

研究所レポート

2015

No.1

新宿区の単身世帯の特徴(3)

— 壮年期・高齢期の生活像 —



新宿区の単身世帯の特徴(3)

— 壮年期・高齢期の生活像 —

新宿区は単身世帯の割合が全国の市区で最も高く¹⁾、上昇の一途をたどっている。未婚率も全国で最も高い²⁾。

一般的に人が単身生活を始めるのは、進学や就職を機に親から独立し、アパートなどに住み始めるときであり、若年期が多い。そして、結婚を機に単身生活は終了する。やがて子どもの独立や配偶者との死別によって高齢期に一人暮らしになる人が出てくるが、その場合はそれまで築き上げてきた、子どもや親族、友人・知人、近所に住む人たちとのつながりによって支えられながら老後の生活を送る、というのが一般的なライフコースの一つであった。

しかし、近年、日本全体として単身化と未婚化が進んでいる。1990年に23%だった全国の単身世帯の一般世帯に占める割合は、20年後の2010年には32%に上昇した。1990年に男性6%、女性4%に過ぎなかった生涯未婚率(50歳時の未婚率)も、2010年には男性20%、女性11%に上昇した。男性の5人に1人、女性の10人に1人が未婚のまま生涯を過ごすということになる。

では、新宿区はどうか。1990年代後半からの都心回帰により、地方から東京への人口流入が現在も進んでいる。東京の副都心に位置する新宿区は、若年期を中心に人口移動が活発で、若年人口が多い³⁾。そのため、単身世帯の割合が高く、1990年の47%から2010年には63%に上昇した。生涯未婚率も1990年の男性14%、女性16%から2010年には男性33%、女性27%に上昇した。実に男性の3人に1人、女性の4人に1人が生涯未婚ということになる。このことは、若年期だけでなく、壮年期においても未婚化が大きく進んでいることを意味し、今後、未婚のまま高齢期を迎える単身者がさらに増えていくことが予想される。

こうした家族形態や配偶関係の変化は出生率や人口の年齢構成に影響を及ぼし、少子高齢化の問題とも大きく関係する。しかし何より、いざ困ったときに誰の支援も得られずに孤立してしまう人が増えてくるのが大きな問題である。また、地域との関わりが弱い単身者が増えてくることで、地域コミュニティが希薄化するという課題もある。

こうしたことから、新宿自治創造研究所では平成25年度に、勤労世代であり、行政サービスを受ける機会が少なく、地域コミュニティとも縁がないことなどから、これまで行政や地域との関わりが薄かった、壮年期の単身者に焦点をあてたプレ調査を行い、平成26年度には壮年期と高齢期の単身者を対象とした詳細な調査を行った。

本年度は単身世帯の実態に関する調査研究の最終年度となる。本レポートは、これまで2年間の研究で蓄積された知見やデータを改めて別の角度から分析するとともに、昨年度実施した100人を超す単身者へのヒアリング調査結果を基に、多様なライフスタイルを持ち、それぞれが独自の課題を抱えている単身者の具体的な生活像を描くことに主眼を置き、その特徴と課題を分析したものである。また、一人暮らしの最大の問題である社会的孤立に関する分析も行った。本レポートで示した研究成果が、これまであまり知られていなかった単身者の意識や生活、そして課題を知り、考えるための手がかりとなり、また、今後の地域行政を進めるうえでの基礎資料となることが期待される。

1) 2010年国勢調査。以下、本頁の数値は国勢調査によるものである。

2) 15歳以上の未婚率(2010年)。詳細はP.8を参照

3) 20~34歳人口の総人口に占める割合は28%で豊島区に次いで高い(2010年)。

I	これまでの研究をふりかえって	3
	1. 平成 25 ～ 26 年度の研究の概要	3
	2. これまでの研究による単身者の特徴と課題	4
II	新宿区で進む単身化	5
	1. 新宿区の単身世帯の現状	5
	2. 新宿区で単身化が進む要因	7
	3. 新宿区の単身化の将来の見通し	10
III	意識調査結果からみる社会的孤立の要因	11
	1. クロス集計による社会的孤立の要因分析	11
	2. 統計分析による社会的孤立の要因分析	13
	3. 男女・年齢区分別にみる社会的孤立要因	15
IV	ヒアリング調査結果からみる単身者の生活像	16
	1. ヒアリング調査の概要	16
	2. ヒアリング調査回答者のタイプ分類	17
	3. 壮年前期（35～49歳）の生活像	18
	4. 壮年後期（50～64歳）の生活像	32
	5. 高齢期（65歳以上）の生活像	40
	（参考）ヒアリング調査回答者一覧	52
V	単身化の課題と施策の方向性	58
	1. ヒアリング調査結果からみる単身者の特徴と課題	58
	2. 地域課題としての社会的孤立	59
	3. 社会的孤立解消のための施策の方向性	60
	おわりに	62



注)

- ・本レポートで使用する国勢調査等の「割合」のデータは、断りがない場合は分母の総数から「不詳」を除いて算出している。
- ・本レポートにおける意識調査結果の回答割合は、基本的に分母の総数から「無回答」、「わからない」を除いて算出しており、単純集計の結果とは数値が異なっている場合がある。
- ・本レポートで使用する「単身世帯」と「単身者」は、人口との関係や個人の意味合いが強いときは「単身者」、世帯との関係が強いときは「単身世帯」と表記しているが、実質的にはどちらも「一人で暮らす人」という意味で同じものである。また、国勢調査で使用している「単独世帯」は本レポートでは「単身世帯」と表記している。

I

これまでの研究をふりかえって

1. 平成 25 ～ 26 年度の研究の概要

冒頭で述べたとおり、新宿自治創造研究所では平成 25 年度から新宿区に特徴的な単身世帯の実態を把握するための調査研究を行ってきた。初年度は壮年期を中心に単身世帯の全体像を把握することを目的とするプレ調査を行った。具体的には、新宿区区民意識調査の中に「新宿区での暮らしと人とのつながり」というテーマを設け、回答のあった 966 人（18 歳以上）の集計結果について、ローデータを基に同居人がいる人（712 人）と単身者（254 人）に分け比較分析を行い、家族生活者と単身生活者との違いや特徴、課題を分析した。また、35 歳～59 歳の単身者 22 人に対するヒアリング調査も行った。これらの調査を通して、壮年期を中心とした単身者の全体的な姿を知ることができた。

平成 26 年度は、前年度の研究をベースに、新宿区で暮らす単身者の特徴や課題をさらに詳細に分析するため、35 歳～64 歳の壮年期に加え、65 歳以上の高齢期の単身者を対象とした本格的な調査を行った。若年期に単身生活を送るのは一般的であり、問題とすべきことは少ない。単身生活が大きな問題となるのは主に高齢期である。区は高齢者向けの調査をこれまでに行い、一人暮らし高齢者向けの施策や行政サービスも多様な形で実施している。今回の調査がこれまでのものと異なるのは、今後、未婚化の進行とともに、頼れる人がいない単身者が高齢期を中心にさらに増えてくるのではないかという中長期的な問題意識から始めたところにある。高齢単身者とその予備軍である壮年期の単身者について、それぞれの意

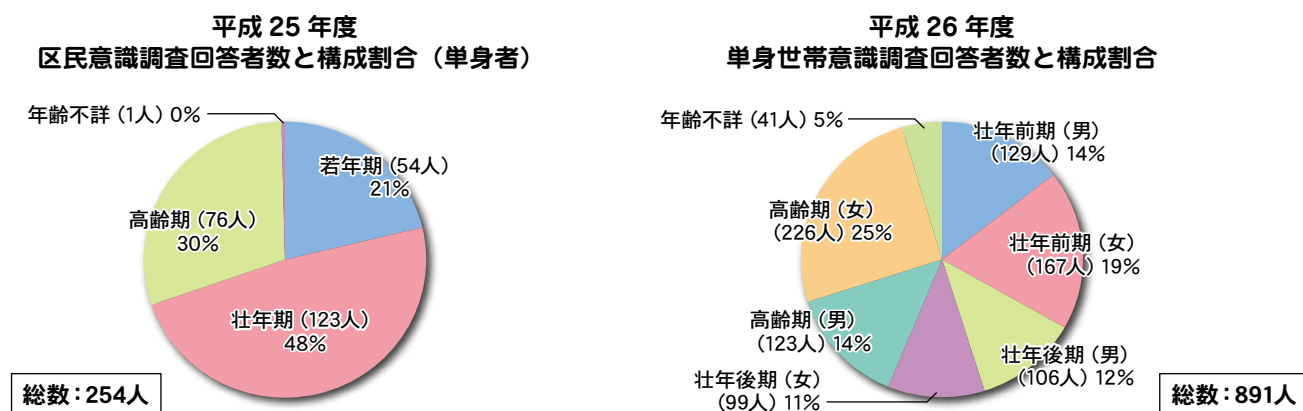
識や生活の実態を把握し、それを比較することで、将来の単身化の姿を見据えて単身者の特徴や課題を分析することを目指している。

調査は量的調査としての意識調査と質的調査としてのヒアリング調査を実施した。意識調査は平成 26 年 8～9 月に、住民基本台帳から無作為抽出した 35 歳以上の一人世帯 2,500 人を対象に実施し、891 人から回答（回答率 35.6%）があった。その集計結果を基に、対象者を 35～49 歳の「壮年前期」、50～64 歳の「壮年後期」、65 歳以上の「高齢期」に分けて、さらに男女別に集計し、結果を全 6 タイプで比較分析を行った。

主な設問は、①居住に関すること（一人暮らしの期間や新宿区の暮らしやすさ、住まいの形態や不満など）、②人や地域とのつながり（親・兄弟姉妹・子どもの有無と連絡頻度、友人とのつきあい、近所づきあいなど）、③日常生活（余暇の過ごし方、一人暮らしの良い点・困った点、健康状態、ストレス、孤独死への不安など）、④高齢期の生活または高齢期への不安・備え、⑤区政への要望などであり、ほかに年収や預貯金（高齢期のみ）、就業形態や職場の所在地、結婚への意向や結婚したくない理由（壮年期のみ）などを設問とした。

ヒアリング調査は、意識調査と同じく 35 歳以上を対象に協力者を募集し、平成 26 年 9～10 月に 106 人の単身者に対し実施した。その分析結果は本レポートの IV 章に掲載している。

図 1 意識調査区分別回答割合



2. これまでの研究による単身者の特徴と課題

平成 25～26 年度はこうした調査により単身者の特徴や課題を抽出した。研究成果は研究所レポート 2013 No.3 と 2014 No.2 にまとめている。そこで示した特徴的な結果の一部を以下のとおり示す。

■新宿区民（18～49歳）

○結婚の意向と未婚理由（H25調査）

- ・未婚男性の3割、未婚女性の2割に結婚の意向がなく、結婚意向は全国と比べて低い。
- ・未婚理由は、男性は「収入面の不安」、女性は「適当な相手にめぐりあわないから」が多い。
- ・結婚の意向がない人の結婚しない理由は、「自由さや気楽さを失いたくないから」、「結婚する必要があるから」が多い。

■35歳以上の単身者

○転入理由と暮らしやすさ

- ・「仕事」や「通勤・通学の便利さ」から新宿区に転入する人が多く、東京圏外の出身者が多い。
- ・新宿区の暮らしやすさとして、「交通の便の良さ」を挙げる人が最も多く（83%）、「通勤の便利さ」、「買い物に便利」、「飲食店や娯楽施設が多い」、「医療機関が多い」も多い。
- ・職場は新宿区または23区がほとんどで（93%）、通勤時間も30分以内が多い（48%）。

○单身生活の良いことと困ったこと

- ・一人暮らしの良いことは、「時間を自由に使える」が最も多く（85%）、「他人に干渉されない」も多い（62%）。
- ・一人暮らしで困ったことは、「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」が最も多く（52%）、「家賃や生活費の負担が重い」、「人との会話が少なくなる」、「家事をするのが面倒」も多い。高齢期では「重い物の移動や高い所の物が取れない」も多い。

○地域活動と近所づきあい

- ・近所づきあいで「あいさつを交わす」人は多い（70%）が、「まったくくない」人も18%いる。
- ・地域活動には「まったく参加していない」人が多い（70%）。今後参加したい人は28%。

■高齢期の単身者の課題

○男女の違いの傾向

- ・男性は女性より、「公的年金を受けていない」、「預貯金が少ない」、「生活保護を受給する」人の割合が高い。
- ・男性は女性より、「民間賃貸住宅」に住む人の割合が高い。そのため、「部屋が狭い」、「家賃が高い」といった不満や「契約更新を断られる」、「保証人が見つからない」といった不安を持つ人が多い。
- ・男性は女性より、友人との交流などに「充実感を感じる」人の割合が低い。
- ・男性は女性より、子どもや兄弟姉妹との「連絡頻度が少ない」人の割合が高い。
- ・男性は女性より、「友人・知人が少ない」人の割合が高い。
- ・男性は女性より、近所づきあいの程度が低い。
- ・男性は女性より、「悩みごとを相談できる相手」や「病気や要介護時に頼れる人」がいる割合が低い。

○女性は夫と死別した人が多く、子どもが近くに住み、頻繁に連絡を取っている人が多い。これまで地域などで築いてきた人づきあいも豊かで、いざという時に支援をしてくれる人も少なくない。

○男性は子どもがいても縁が薄くなり、離別者では子どもと連絡を頻繁にとっている人が少なくなる。また、現役時代に仕事中心の生活であったからか、高齢期では人づきあいが少ない人が多い。

■壮年期の単身者の課題

- ・年収が少ない人は、「健康状態がよくない」、「親しい友人が少ない」、「結婚の意向が低い」という傾向がある。
- ・「年収が低い人」、「子どもがいない人」、「友人がいない人」は、病気時に世話をしてくれる人が少ない傾向がある。

■単身化の今後の課題

- ・未婚率の上昇などから、今後、未婚のまま子どもがなく高齢期を迎える単身者が増えてくることで、支援を必要とする人がさらに増えてくることが想定される。

II

新宿区で進む单身化

本章では、新宿区の単身世帯の現状、新宿区で单身化が進む要因、そして将来の見通しについて、統計データと意識調査結果をもとに示していく。

1. 新宿区の単身世帯の現状

(1) 単身世帯の推移

1965年以降減少し続けていた新宿区の人口（国勢調査）は、1995年を底に増加に転じ、2010年は32.6万人となった。単身世帯は1990年以降増加しており、2010年は2005年より2.3万世帯増の12.2万世帯となった（図2）。一般世帯に占める単身

世帯の割合も1990年以降上昇し、2010年は63%と6割を超えた。23区で最も高く（図3）、全国の市区でも最も高い。総人口に占める単身者（単身世帯）の割合は37%と4割近くになる。

図2 新宿区の単身世帯数と単身世帯割合の推移

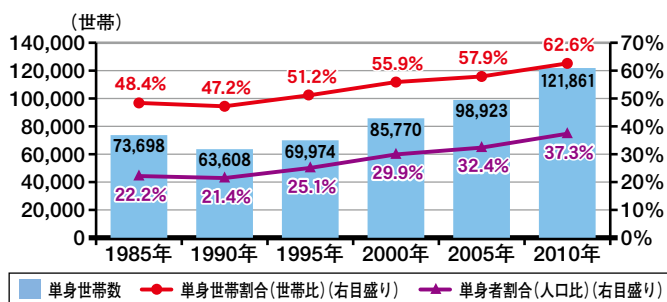
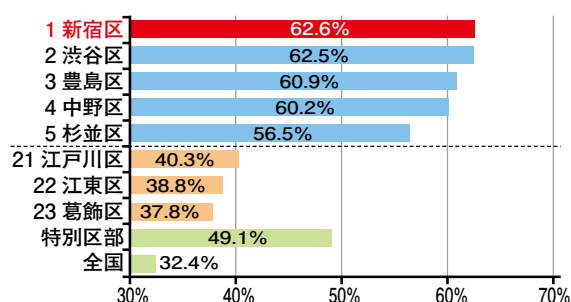


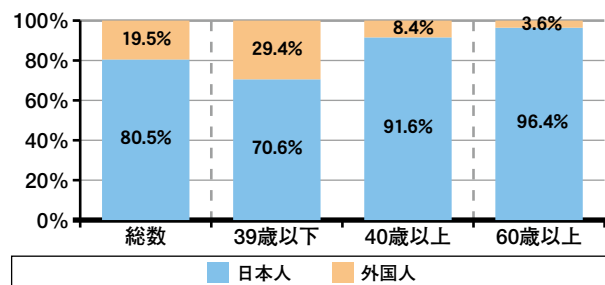
図3 単身世帯割合の23区比較(2010年国勢調査)



(2) 単身者の日本人・外国人別割合

外国人は新宿区の人口の1割以上を占め、特に若年期に多い。住民基本台帳（2016年1月1日現在）による単身者（世帯人員が一人の世帯）を年齢区別に日本人・外国人別の割合をみると（図4）、総数では単身者の2割が外国人であり、40歳未満では単身者の3割を外国人が占める。一方、40歳以上では外国人の割合は8%、60歳以上では4%と低い。単身者は若年期では外国人の割合が高めだが、壮年期・高齢期ではほとんどが日本人ということになる。

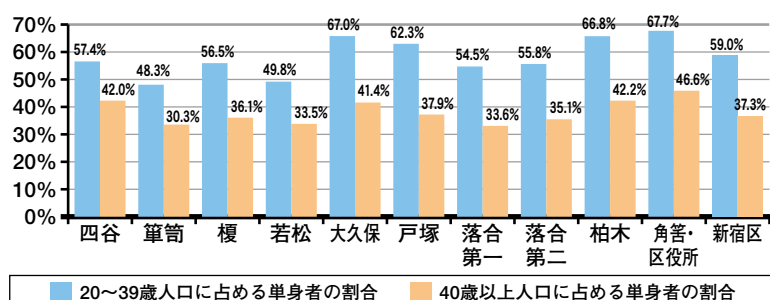
図4 単身者の日本人・外国人別割合(2016年住民基本台帳人口)



(3) 地域別人口に占める単身者の割合

住民基本台帳（2016年1月1日現在）による単身者の年齢区別人口に占める割合を特別出張所地域別にみると（図5）、20～39歳では角筈・区役所、大久保、柏木、戸塚の各地域で6割を超える。40歳以上では、角筈・区役所、柏木、大久保の各地域に加え、四谷地域で4割を超えて高い。一方、笹筒地域、若松地域ではどちらの年齢区分でも低くなっている。

図5 地域別人口に占める単身者の割合(年齢2区分)(2016年住民基本台帳人口)



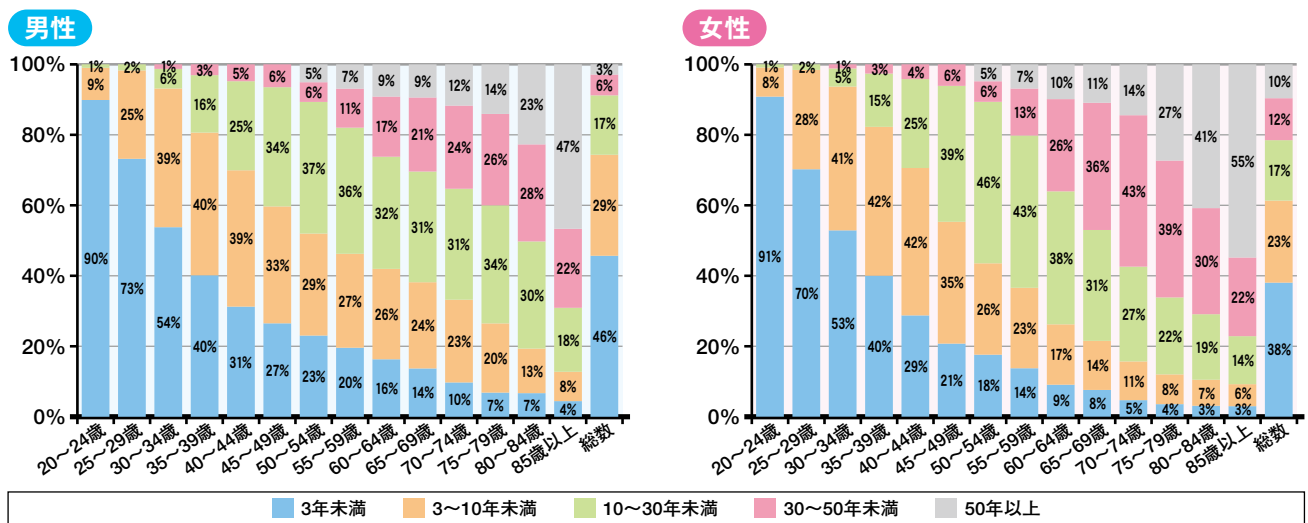
(4) 単身者の移動と定住性

研究所レポート 2014 No.1「新宿区の人口移動」によると、新宿区の転入数、転出数は20歳代を中心に多く、以降、年齢が上がるごとに減少し、定住化が進む傾向にある。図6は単身者の新宿区での居住期間を男女・年齢5歳別に構成割合をみたものである(2014年1月1日現在住民基本台帳データ)。男女とも、年齢が上がるとともに居住期間が長くなり、定住化の傾向が強まっていくことがわかる。単身者は流動性が高く、居住期間が短いという印象があるが、その傾向は

若年期で顕著にみられるが、壮年期や高齢期では当てはまらない。男女別では、例えば65～69歳では30年以上の居住者は男性で3割だが、女性では5割近くおり、女性のほうが居住期間が長い傾向にある。

昨年度実施した35歳以上の単身世帯意識調査においても、「ずっと住み続けたい」、「できれば住み続けたい」の合計は74%で、4人に3人が新宿区に住み続けたいと考えており、一方、「転出したい」という人はわずか4%となっている(図7)。

図6 単身者の男女・年齢5歳別新宿区での居住期間(2014年住民基本台帳データ)



20歳代での人口移動が多い新宿区には、多くの若者が進学や就職を機に、地方から転入してくるとい印象が強い。しかし、単身世帯意識調査から単身者の転入前の居住地域をみると(図9)、新宿区生まれを含む都内23区の割合は60%と高く、首都圏外は12%と低い。しかし、出身地を表す指標として中学校卒業時の居住地域をみると(図10)、新宿区を含む都内23区は35%、首都圏外は42%と、首都圏外出身者のほうが高くなっている。このことから、地方から23区に転入した後、新宿区に転入する、または

23区内で転々とした後、新宿区に転入するに至るとい移動パターンが想定される。実際、2014年1月1日現在の住民基本台帳データから、若年期を含む単身者の転入前の居住地を調べると(図8)、中野区、豊島区、杉並区、渋谷区といった近隣区が多く、転出先も同様の結果になっている。これらの区は、単身世帯割合や未婚率の高さ、出生率の低さ、住宅面積の狭さなどで新宿区と類似の傾向がみられることから、単身者が賃貸住宅の更新などで居住地を選択する際の一つの居住圏域になっていることが推察される。

図7 単身者の新宿区での定住意向(平成26年度単身世帯意識調査 Q5)

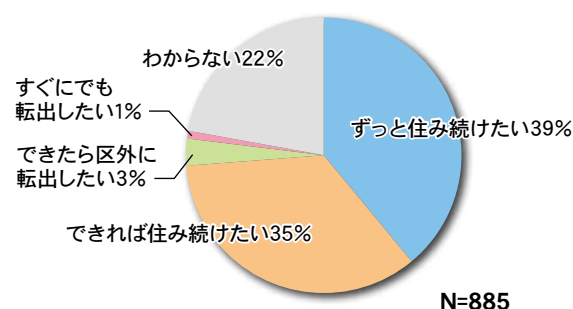


図8 新宿区に住む単身者の転入前上位市区町村(2014年住民基本台帳データ)

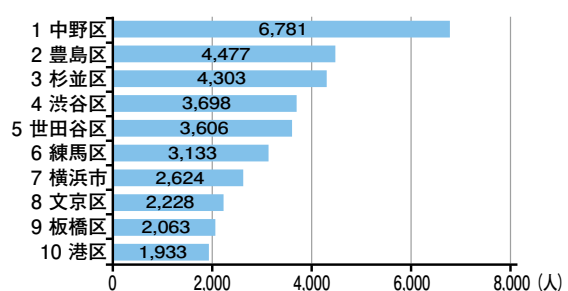
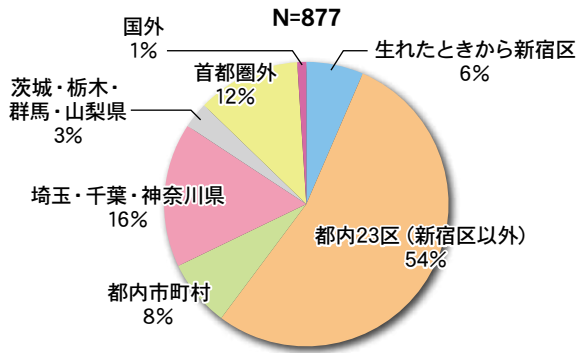


図 9 単身者の転入前居住地
(平成 26 年度単身世帯意識調査 Q2)



単身者に地方出身者が多いということは、親や兄弟姉妹、学生時代の友人など親密なつながりのある人たちが遠距離におり、頻繁に行き来することが難しくなっていることが想定される。

図 10 単身者の中学校卒業時の居住地
(平成 26 年度単身世帯意識調査 Q2-1)

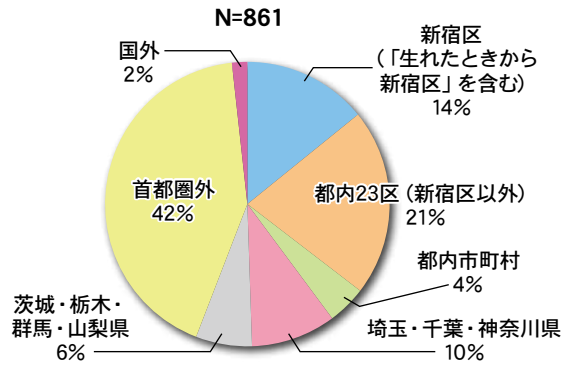
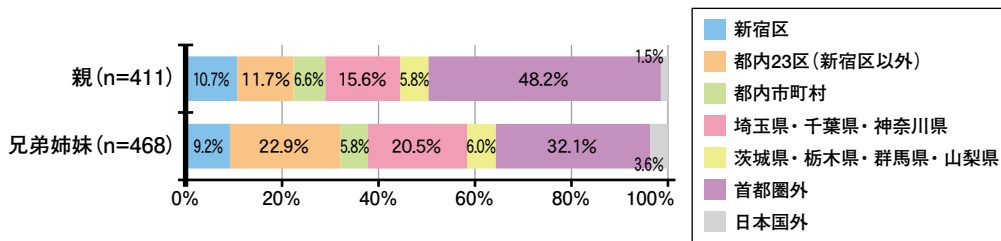


図 11 は単身世帯意識調査による壮年期の単身者の親と、最も親しい兄弟姉妹の居住地である。親の 5 割近く、兄弟姉妹の 3 割強が地方（首都圏外）に居住していることがわかる。

図 11 単身者の親と兄弟・姉妹の居住地(壮年期)(平成 26 年度単身世帯意識調査 Q9、Q10-1)



2. 新宿区で単身化が進む要因

次に新宿区で単身化が進む要因について分析する。

(1) 単身者に暮らしやすいまち

副都心に位置する新宿区には多くの商業施設や事業所が集積し、都心区にも近接する。新宿区に多くの単身者が居住する理由として、まず「利便性の高さ」が挙げられる。単身世帯意識調査結果(図 12)によると、新宿区の暮らしやすいところとして、交通の

便の良さや通勤の便利さ、買い物の便利さ、医療機関が多いこと、百貨店・量販店や飲食店・娯楽施設が多いことなどが上位に挙げられている。仕事、生活、余暇のどの面においても、新宿区は単身者にとって暮らしやすいまちであるといえよう。

(2) 単身者の住む住宅の供給

新宿区では、人口の増加とともに住宅数も増加している。住宅・土地統計調査によると、新宿区の総住宅数は 1993 年の 12.4 万戸から増加し、2013 年には 19.5 万戸と、20 年間で約 7 万戸増加した。新宿区には小規模な住宅が多く、2013 年の同調査による 1 住宅当たりの延べ面積は(図 14)、新宿区は 50.8㎡で、23 区で最も狭くなっている。民営借家に限ると 32.6㎡で、中野区(30.3㎡)に次いで狭い。

また、国勢調査による延べ面積別住宅に住む世帯数(「間借り」を除いた世帯数)の推移をみると(図 13)、新宿区の 29㎡以下の住宅に住む世帯数は、

2005 年から 2010 年にかけて特に大きく増加しており、総世帯数に占める割合も 2010 年は 37% を占める。これは、23 区の中で中野区に次いで高い割合であり(図 15)、単身者向け住宅がここ数年、新宿区に多く供給されてきたことを示している。

また、2013 年住宅・土地統計調査によると、新宿区の民営借家の 1㎡当たりの家賃は 3,012 円で、23 区の中で 5 番目に高くなっている(図 16)。高い家賃にもかかわらず、利便性を重視して新宿区での居住を選択する人や、家賃が支払えるよう狭い住宅を選択して居住している人が多いことが推察される。

図 12 新宿区の暮らしやすいところ(上位回答)
(平成 26 年度单身世帯意識調査 Q4)

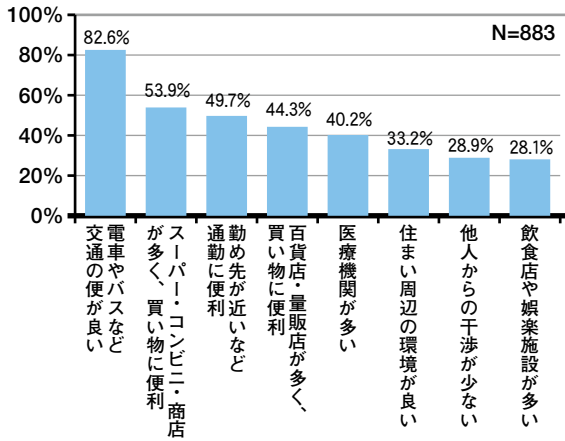


図 13 新宿区の延べ面積別住宅に住む主世帯数の推移(2010 年国勢調査)

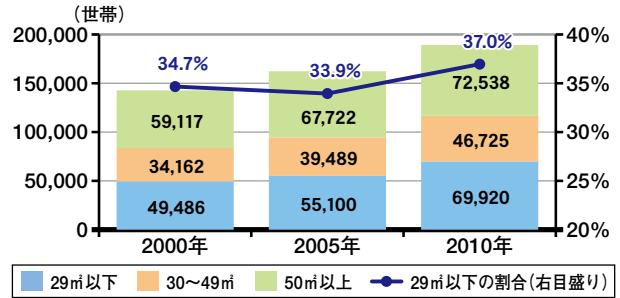


図 14 1 住宅当たり延べ面積の 23 区比較
(2013 年住宅・土地統計調査)

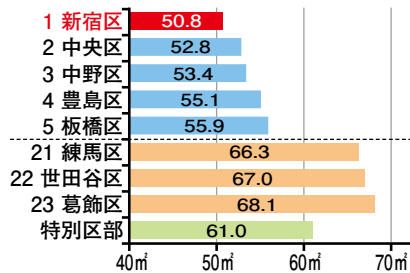


図 15 29㎡以下の住宅に住む主世帯割合の 23 区比較(2010 年国勢調査)

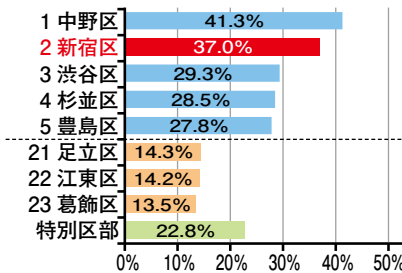
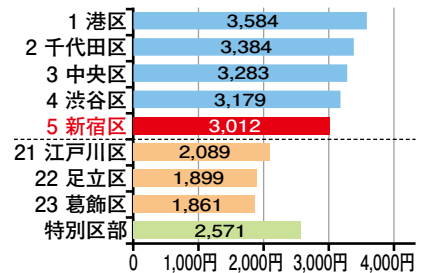


図 16 1 民間借家の延べ面積 1㎡当たりの家賃の 23 区比較(2013 年住宅・土地統計調査)



(3) 未婚化の進行

冒頭で述べたとおり、新宿区では单身世帯とともに未婚者の割合が高い。2010 年国勢調査による 15 歳以上人口に占める未婚者の割合(未婚率)は、男性 50.0%、女性 42.3%と男女とも全国の市区町村の中で最も高くなっている。50 歳時の未婚率である生涯未婚率も男性 33.3%、女性 27.3%と高いことから、若年期だけでなく壮年期においても未婚化が進んでいるといえる。

ところでこれらの数値は新宿区全体のものであり、单身者に限らない。そこで、新宿区の单身者について、男女別、年齢区分別にどのように未婚者の人数や割合が推移してきたのか、また離別や死別の数値が変化してきたのかを 35 歳以上を対象にみることにする。

図 17 は、2010 年国勢調査による新宿区の单身者の年齢・配偶関係別人口を男女別に表したものである。未婚者数は、男性では 20 歳代後半をピークに年齢が上がるとともにほぼ少なくなっていく。60 歳

前後で多くなるのは年齢別人口(団塊の世代等)自体が多いことが原因と考えられる。女性も 25 歳前後をピークに年齢が上がるとともに少なくなっていく一方で、高齢とともに死別者が多くなる。その結果、60 歳以上で单身者全体の数が多くなっている。

図 18 は、单身者を男女・年齢 3 区分別に 2000 年から 2010 年までの配偶関係別人口と割合を示したものである。35～49 歳の壮年前期では、男女とも 2005 年から 2010 年にかけて单身者全体が大きく増加しているが、特に未婚者の増加が著しく、男性は約 6 千から約 1.1 万人へ、女性は約 5 千人から約 8 千人へと大きく増加した。50～64 歳の壮年後期でも壮年前期ほどではないが未婚者数は男女とも増加している。65 歳以上の高齢期でも同様であり、特に男性の未婚者は 2 倍以上に増加した。構成割合もすべての区分で未婚の割合が上昇している。

こうした未婚化の進行が、新宿区で单身化が進む大きな要因といえる。

図 17 新宿区の単身者の男女・年齢各歳・配偶関係別人口(2010年国勢調査)

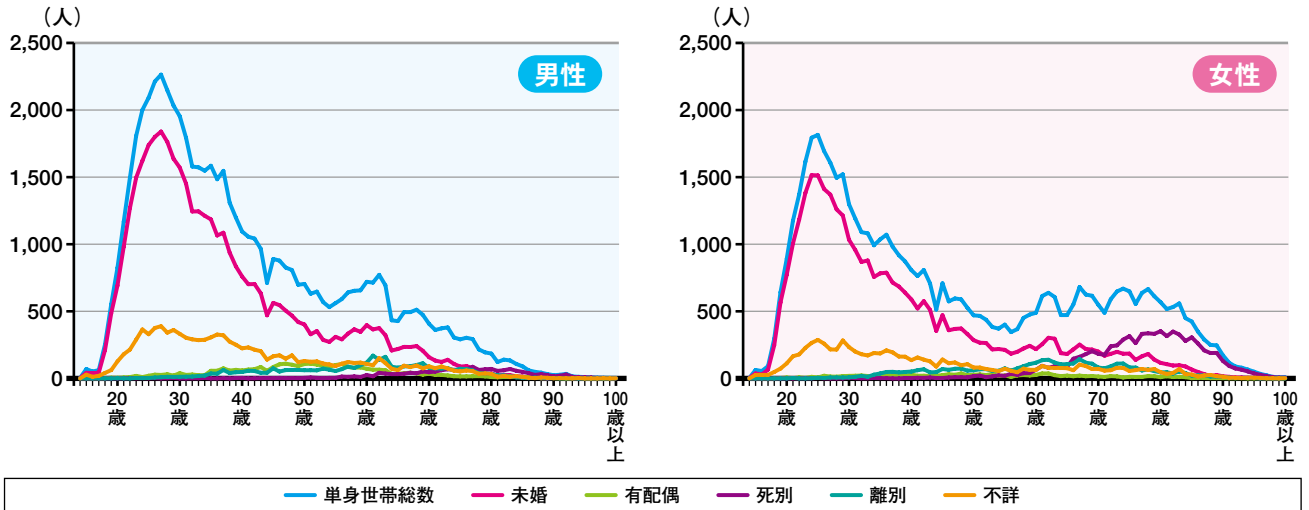


図 18 新宿区の単身者の男女・年齢3区分・配偶関係別人口と割合の推移(2000～2010年)(国勢調査)



3. 新宿区の単身化の将来の見通し

新宿自治創造研究所では2010年の国勢調査人口を基準とした新宿区の将来人口推計（研究所レポート2012 No.2）と将来世帯推計（研究所レポート2013 No.2）を作成した。その推計結果に基づき、単身者の年齢4区分別人口の2035年までの推計値を男女別に示したのが図19である。

単身者はこれまでは若年期が多かったが、未婚化と少子化の進行とともに若年期では男女とも2020年から若干減少する見通しである。壮年前期はしばらく増加した後、男性は減少、女性は横ばいとなる。一方、壮年後期と高齢期では男女とも2035年まで大きく増加し、2010年から2035年にかけて、男性は壮年後期で1万人から2万人に、高齢期で0.7万

人から1.5万人にそれぞれ倍増し、女性も壮年後期で0.7万人から1.7万人に、高齢期で1.5万人から2.3万人へと大きく増加する見通しとなっている。

図20は年齢4区分別人口に占める単身者の割合の推計値である。単身者数と同様、単身割合も男女とも壮年後期と高齢期で上昇が著しい。2010年から2035年にかけて、男性は壮年後期で35%から44%に、高齢期では28%から38%に上昇する。女性は壮年後期で27%から42%に、高齢期では40%から49%に上昇し、高齢期の女性の半分以上が単身者になるという見通しである。

新宿区の単身化は今後、50歳以上の壮年後期から高齢期において大きく進行していくと予測される。

図19 新宿区の単身者の男女・年齢4区分別人口の推移(国勢調査)と推計値(1995～2035年)

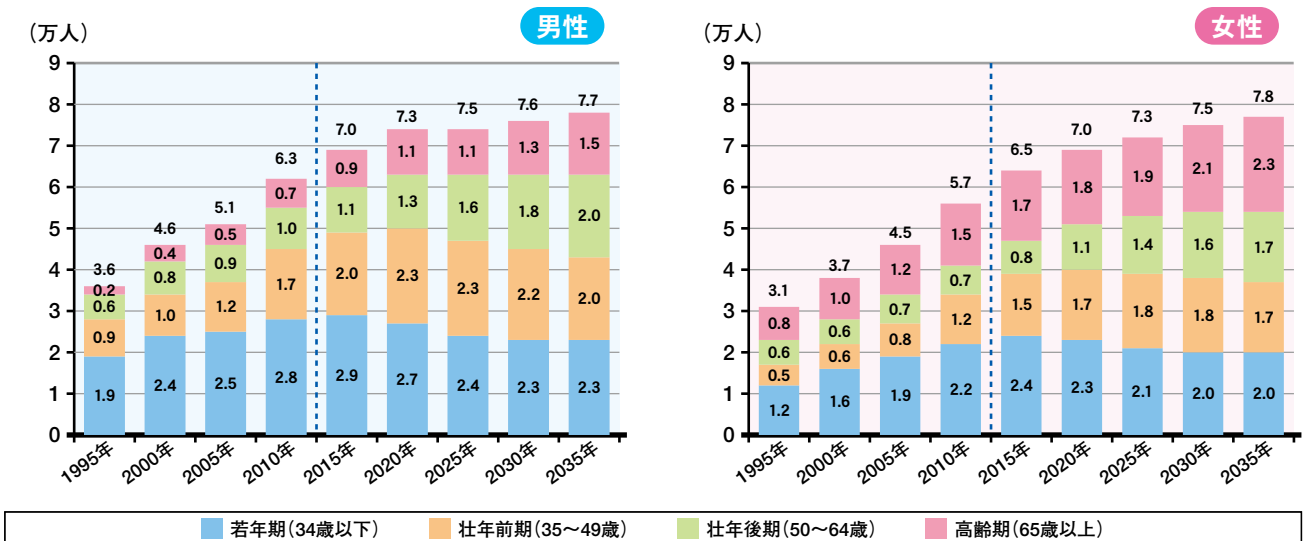
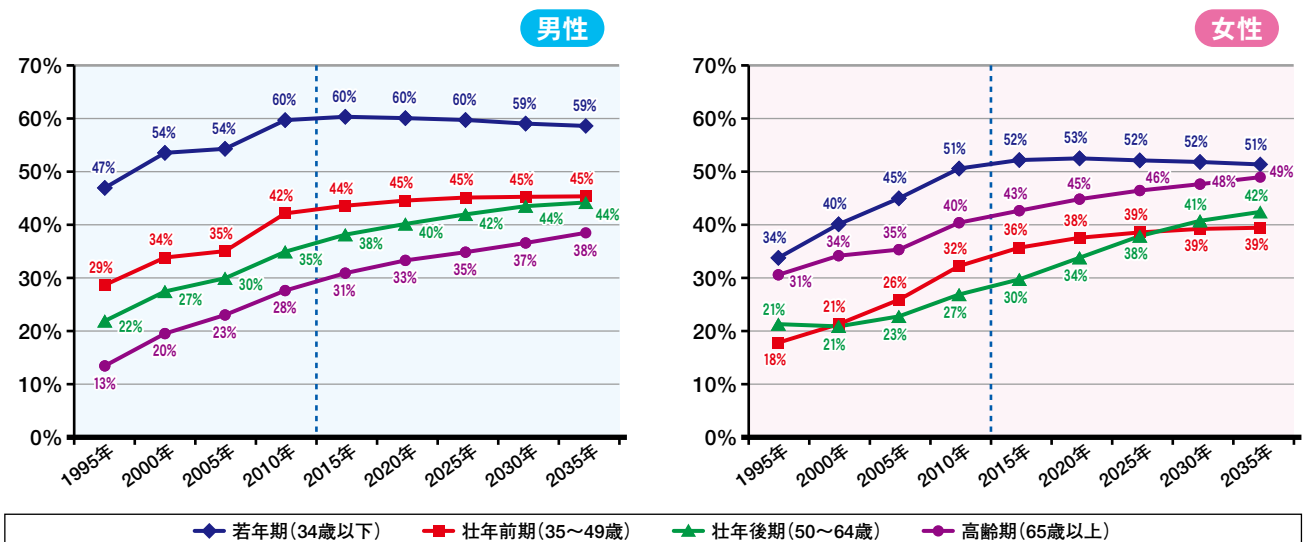


図20 新宿区の単身者の男女・年齢4区分別人口割合の推移(国勢調査)と推計値(1995～2035年)



III

意識調査結果からみる社会的孤立の要因

1. クロス集計による社会的孤立の要因分析

単身世帯意識調査結果によると、一人暮らしをしていて困ったと思うこと(Q22)として、「病気になったときに身の回りの世話をしてくれる人がいない」と答える人が最も高い(52%)。また、高齢期の生活に不安を感じること(Q32-1)を壮年期に聞いたところ、病気、介護状態、収入に次いで、「頼れる人がいなくなり、一人きりの暮らしになること」(44%)であった。区政への要望(Q37)も、「病気や入院時などに身の回りの世話をしてくれる人を派遣するサービス」が住宅対策とともに高い割合(43%)である。実際、「病気やケガで入院や介護が必要になったとき、身の回りの世話をしてくれる人がいなくて困ったことがある」(Q24)は3人に1人が経験している(34%)。

現在は誰の助けも必要とせず、自立した生活が送られても、将来、いつ病気や介護状態になるかわからない。そうした事態を想定したとき、頼れる人がいなかったり、誰も思いつかなかったり、ヘルパーなどに頼るしかないと考える単身者は多いのではないか。いざという時に頼れる家族や親族、友人・知人などが誰もいないという人は社会的に孤立状態にあるといえるであろう。

こうした社会的孤立状態に陥りやすい要因を分析するため、本章ではまず、意識調査の「病気やケガで入院や介護が必要になったとき、身の回りの世話をしてくれそうな人はどなたですか」の問い(Q25/

複数回答)に対し、「いない」、「わからない」、「ケアマネジャーやヘルパーなど専門職の人」の各選択肢のみを回答した人を社会的孤立の傾向が強いものと想定し、要因分析のための指標「いざ頼れる人がいない人」と定義する。

図21は「いざ頼れる人がいない人」の割合を男女・年齢3区分別にみたものである。男性のほうがどの年齢区分でも女性より高く、年齢区分が上がるごとに割合が高くなる傾向がある。壮年前期は36%、壮年後期は45%で、高齢期では51%と半数になる。一方、女性は壮年前期で21%、壮年後期で28%と高くなるが、高齢期では30%と壮年後期とほぼ同じであり、男性より20ポイントも下回っている。

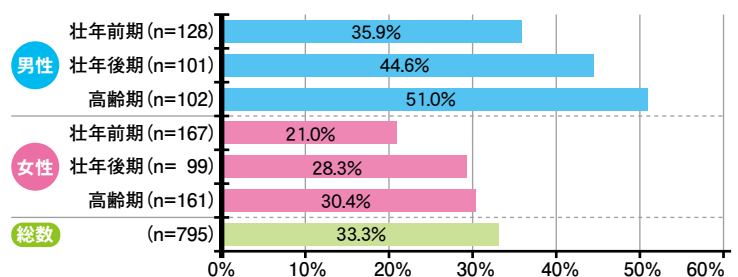
社会的孤立の傾向はこのように男性、高齢期でみられるが、その他の関連要因を分析するため、壮年期・高齢期の年齢2区分別に、Q25で頼れる人として子ども、親、友人などを回答した「いざ頼れる人がいる人」のグループと「いざ頼れる人がいない人」のグループに分け、意識調査の各質問とのクロス集計を行った。その結果、「いざ頼れる人がいない人」のグループのほうで一定の高い数値が出た以下の要因を社会的孤立との関連性が高い要因とみなした。図22はクロス集計の結果である。なお、数値は男女合計のものであるため、各区分とも男性にとってはさらに高い値になっていることに留意が必要である。

【社会的孤立との関連性が高い要因】

- ①未婚または離別である(=死別ではない)。
 - ②子どもがいない、いても連絡がない。
 - ③預貯金がまったくない。
 - ④生活保護を受けている。
- (以上、高齢期のみ)
- ⑤年収が低い(ここでは壮年期 300万円、高齢期 200万円未満)
 - ⑥就業形態が無職か非正規雇用である。
 - ⑦賃貸住宅に居住している。
 - ⑧健康状態がよくない、あまりよくない。
 - ⑨出身地域(ここでは中学校卒業時の居住地)が東京圏(東京都、千葉・埼玉・神奈川県)以外である。
 - ⑩兄弟姉妹がいない、いても連絡をとっていない。

※ ①②は壮年期の回答が少ないため、③④は高齢期のみでの回答のため、高齢期のみで分析している。

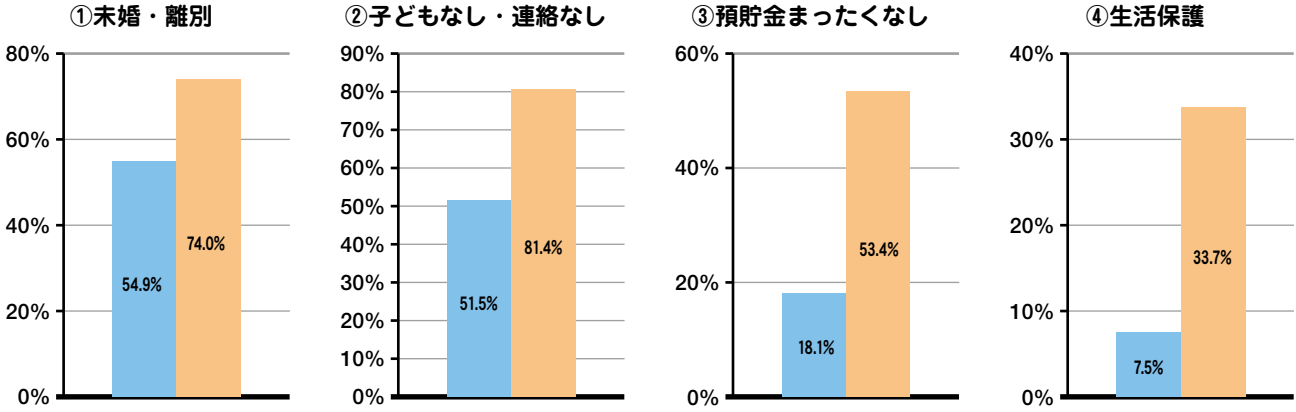
図21 男女・年齢3区分別いざ頼れる人がいない人の割合



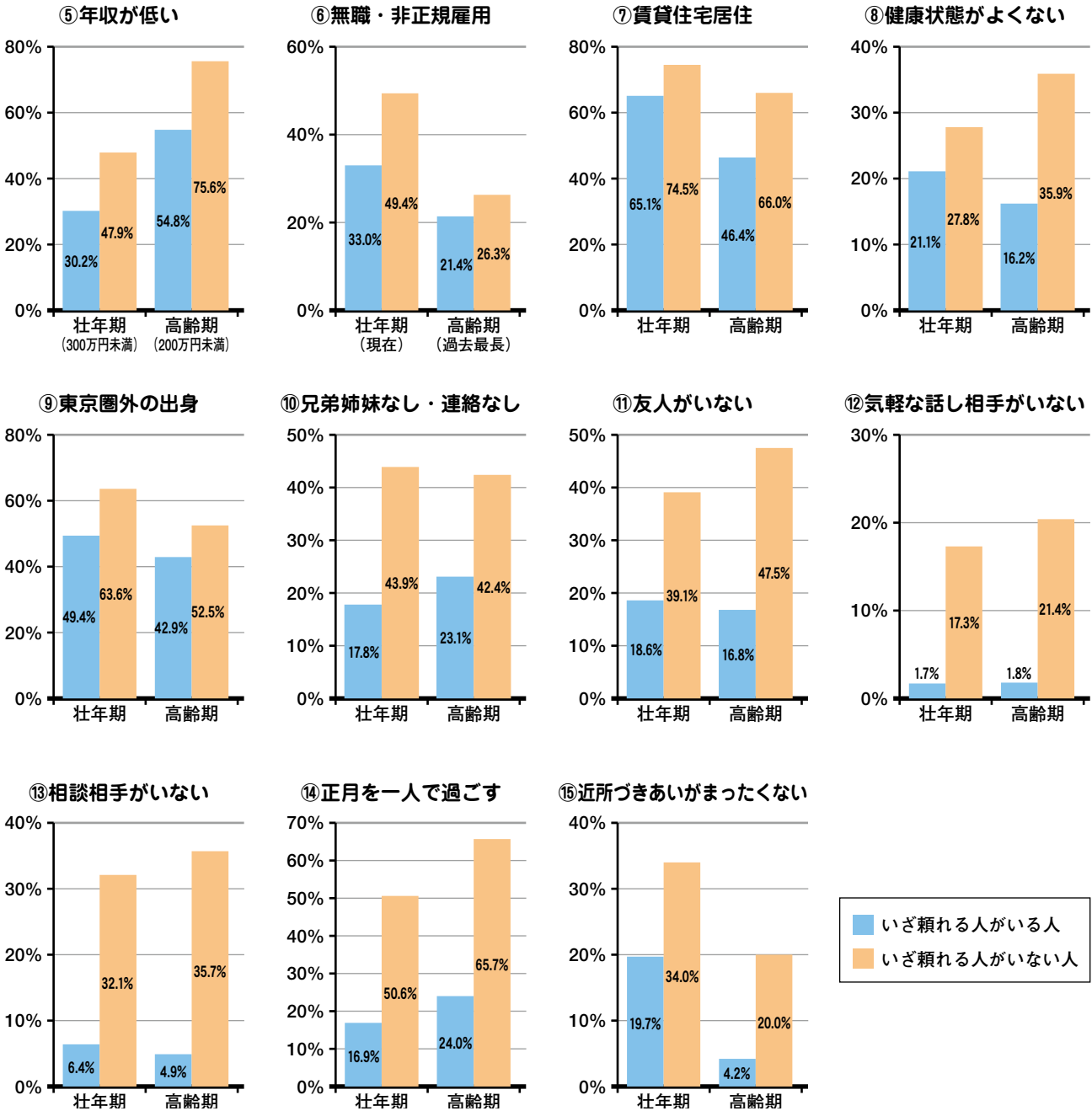
- ⑪友人がいない、とても少ない。
- ⑫気軽におしゃべりができる相手がない。
- ⑬悩みごとを相談できる相手がない。
- ⑭正月を一人で過ごす。
- ⑮近所づきあいがまったくない。

図 22 いざ頼れる人の有無別社会的孤立の関連要因

高齢期のみ



壮年期 高齢期



■ いざ頼れる人がいる人
■ いざ頼れる人がいない人

2. 統計分析による社会的孤立の要因分析

次に、統計分析手法の一つであるロジスティック回帰分析を用いて、社会的孤立の要因に関する分析を行った。ロジスティック回帰分析とは、2値変数(「1」or「0」)である目的変数について複数の説明変数から予測する分析方法である。目的変数としてはクロス集計分析と同様、「いざ頼れる人がいない人」を用い、説明変数としては社会的孤立に影響を与える要因をクロス集計分析の結果や変数間の相関係数等

を参考にしながら変数の選定を行った。その上で最も妥当性が高いと考えられる分析結果が表1のとおりである。ただし、変数の選定にあたっては、「いざ頼れる人がいない人」と同じ意味合いを持つ「人とのつながり」に関する設問(友人がいない、話し相手がない、相談相手がない、正月を一人で過ごす、近所づきあいがいい等)は除外した。

表 1 ロジスティック回帰分析の結果

壮年期(N=416)					高齢期(N=219)				
	B	オッズ比	95%CI	評価		B	オッズ比	95%CI	評価
性別(男性=1)	0.930	2.535 **	1.627 - 3.950	○	性別(男性=1)	0.652	1.919 †	0.981 - 3.753	○
就業形態(正規雇用、会社役員=1)	-0.483	0.617 †	0.356 - 1.068	○	最も長かった就業形態(正規雇用、会社役員=1)	-0.054	0.948	0.505 - 1.780	
年収	-0.186	0.830 *	0.690 - 1.000	○	預貯金	-0.234	0.791 *	0.658 - 0.951	○
出身地域(東京圏出身=1)	-0.475	0.622 *	0.401 - 0.964	○	出身地域(東京圏出身=1)	-0.440	0.644	0.349 - 1.189	
40～44歳	1.018	2.768 **	1.399 - 5.476	○	子ども(いる=1)	-1.058	0.347 **	0.185 - 0.652	○
45～49歳	0.777	2.176 *	1.045 - 4.528		70～74	-0.549	0.577	0.241 - 1.382	
50～54歳	0.926	2.526 *	1.172 - 5.443		75～79	-0.082	0.921	0.394 - 2.155	
55～59歳	0.921	2.513 *	1.048 - 6.027		80～84	-0.356	0.701	0.256 - 1.914	
60～64歳	0.920	2.509 *	1.160 - 5.427		85～89	-0.004	0.996	0.330 - 3.000	
					90歳以上	-0.975	0.377	0.030 - 4.753	

有意確率：† P<0.10 * P<0.05 ** P<0.01 (高齢期の表も同じ)
 Hosmer & Lemeshow $\chi^2 = 5.853$
 Cox-Snell $R^2=0.109$ 、Nagelkerke $R^2=0.152$

Hosmer & Lemeshow $\chi^2 = 7.355$
 Cox-Snell $R^2=0.170$ 、Nagelkerke $R^2=0.229$

分析結果をみると、壮年期では、「男性」であること、「非正規雇用や無職」の就業形態であること、「収入が低い」こと、「東京圏外の出身」であることが、また、高齢期では、「男性」であること、「預貯金額が少ない」こと、「子どもがいない」ことが、社会的な孤立状態になることに対して統計的に有意な影響を及ぼしている可能性が示唆される結果であった。

これらの分析結果をオッズ比で見ると、壮年期では、男性のほうが2.535倍、非正規雇用や無職の人のほうが1.620倍(0.617の逆数)、収入の категорияが1つ下がるにつれて1.204倍(0.830の逆数)、東京圏外の出身の人のほうが1.607倍(0.622の逆数)

孤立状態になりやすいという結果であった。また、年代ごとにおける効果については、35~39歳をベースカテゴリーとした際に、その他の年齢(40~64歳)カテゴリーでは、より孤立状態になりやすいという結果を示す結果であった。

高齢期では、男性のほうが1.919倍、子どもがいないほうが2.881倍(0.347の逆数)、そして、預貯金額の категорияが1つ下がるにつれ1.264倍(0.791の逆数)孤立状態になりやすいという結果であった。なお、高齢期の分析では年代ごとにおける効果に関しては、統計的に有意な関係性を見出すことができなかった。

■ 参考説明

○ロジスティック回帰分析の実施理由

今回の統計分析では、2 値変数である目的変数について複数の説明変数から予測するロジスティック回帰分析を行った。より一般的な分析方法としては、重回帰分析という方法があるが、重回帰分析では目的変数が連続変数（身長、体重のように度合いが段階的にあらわされる変数）でなければならない。そのため、複数の質問項目を組み合わせることにより「社会的孤立」を定義する連続変数を作成した上で重回帰分析を行うことを試みた。しかし、連続変数を作成する過程で分析対象となりうる回答者数が著しく減少してしまい（分析対象となるためには、選定した全ての質問に回答している必要がある。）、統計的検証に耐えうるだけのサンプル数を確保することが困難になった。このサンプル数の問題を解消するために、一つの質問項目のみで目的変数となりうる「いざ頼れる人がいない人」を用いて、ロジスティック回帰分析を実施したものである。

○ロジスティック回帰分析で用いられている主な指標の解釈について

- ・ B: 目的変数に対する関係が「正の関係」か「負の関係」かを判断するのに用いる。例えば、表 1 壮年期を見た場合に、「性別 (男性 = 1)」の B の値が 0.930 と「+」であるため、「いざ頼れる人がいない人」と関連があると読み取ることができる。
- ・ オッズ比: 1 からの距離が遠いほど目的変数に対する影響度が大きいと読み取れる。例えば、表 1 高齢期を見た場合に、「性別 (男性 = 1)」のオッズ比が 1.919 となっている。このことは、比較対象の女性と比べた際に男性の方が、1.919 倍孤立しやすい傾向にあると読み取ることができる。また、今回の分析結果をみた場合、B が「-」のときは、逆数の値をとる。例えば、表 1 高齢期を見た場合に、「子ども (いる = 1)」のオッズ比 0.347 を逆数でみると 2.881 と 1 から最も離れている。そのため、子どもがいない人の方が 2.881 倍孤立しやすい傾向にあると読み取ることができる。
- ・ 有意確率 (オッズ比の欄の記号): 分析に用いた説明変数が、目的変数を説明するのに当たって統計的に意味のある変数であるかどうかを判断する指標。一般的にこの値が 0.05 以下 («*」、«**») であれば有意であると判断でき、0.1 以下 («†」、«*」、«**») のものについても有意な変数として取り扱うことができる。
- ・ 95%CI (95% 信頼区間): 同一の調査を同一の方法で行った際に、95% の確率で示された区間内にオッズ比が入る区間 (100 回中 95 回はオッズ比がこの区間内の値を取る)。
- ・ Hosmer & Lemeshow χ^2 : ロジスティック回帰モデルの適合度を検定する指標。今回の分析は「適合」している。
- ・ Cox-Snell R^2 と Nagelkerke R^2 : ロジスティック回帰モデルの当てはまりの度合の良さを表す指標。今回の分析は「妥当性がある」といえる。

* 結果解釈の説明を行うに当たっては、「内閣府 高齢社会対策 HP」(www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h22/bunseki/zentai/.../s2-3-5.pdf) を参考にした。

○説明変数の説明

- ・ 性別 (Q39、高齢期 Q37): 男性 = 1、女性 = 0
- ・ 就業形態 (Q41-1) (高齢期は Q40 最も長かった就業形態): 会社などの経営者・役員、正規雇用 = 1、非正規雇用、自営業、その他、仕事をしていない (Q41 の回答)、収入のある仕事をしたことはない (高齢期) = 0
- ・ 年収 (Q43): 200 万円未満 = 1、200 万円 ~ 300 万円未満 = 2、300 万円 ~ 500 万円未満 = 3、500 万円 ~ 700 万円未満 = 4、700 万円 ~ 1,000 万円未満 = 5、1,000 万円以上 = 6 の 6 段階尺度を用いた。
- ・ 出身地域 (Q2-1): 中学校卒業時に東京圏内 (東京都・埼玉県・千葉県・神奈川県) に居住していた人 = 1、東京圏外 (茨城県・栃木県・群馬県・山梨県、その他道府県、日本国外) に居住していた人 = 0
- ・ 年齢 (Q40、高齢期 Q38): 壮年期は 35 歳 ~ 39 歳、高齢期は 65 歳 ~ 69 歳を基準カテゴリーとして年齢階級ごとに比較
- ・ 子ども (Q11、高齢期 Q10): いる = 1、いない = 0
- ・ 預貯金 (高齢期 Q44): まったくない = 1、200 万円未満 = 2、200 万円 ~ 500 万円未満 = 3、500 万円 ~ 1,000 万円未満 = 4、1,000 万円 ~ 3,000 万円未満 = 5、3,000 万円以上 = 6 の 6 段階尺度を用いた。高齢者において預貯金額を用いた理由としては、壮年期で分析を行ったのと同じように「年収」の変数を用いたが、統計上有意な結果を確認することができなかつたためである。

3. 男女・年齢区分別にみる社会的孤立要因

表2は、男女・年齢3区分別に1のクロス集計分析と2の統計分析で得られた社会的孤立と関連性の高い要因ごとに意識調査の結果を比較したものである。

年齢区分ごとに孤立要因を男女で比較すると、年齢区分が上がるにつれて男女の差が大きくなり、男性の孤立化の傾向がうかがえる。

男女で約10ポイント以上の差のあった孤立要因は、壮年前期では、「10 兄弟姉妹なし・連絡なし」、「13

相談相手がない」、「15 近所づきあいがいい」の3項目であるが、壮年後期では、これらに「7 賃貸住宅」、「14 正月一人で過ごす」を加えた5項目となる。高齢期ではさらに増え10項目になり、約20ポイント以上の差がある項目に限っても「2 子どもなし・連絡なし」、「3 預貯金まったくなし」、「4 生活保護」、「7 賃貸住宅」、「11 友人がない・とても少ない」、「14 正月一人で過ごす」の6項目に及ぶ。

表2 男女・年齢区分別にみる社会的孤立要因

番号	要因(項目)	回答区分 (上段が孤立要因)	壮年前期 (35～49歳)		壮年後期 (50～64歳)		高齢期 (65歳以上)	
			男	女	男	女	男	女
1	配偶関係	未婚・離別	96.0%	94.0%	88.3%	80.6%	70.4%	51.6%
		死別	0.0%	1.8%	2.9%	11.2%	22.6%	46.1%
2	子ども	なし・連絡なし	94.5%	98.2%	87.1%	77.7%	74.6%	54.7%
		あり	5.5%	1.8%	12.9%	22.3%	25.4%	45.3%
3	預貯金	まったくない	—	—	—	—	48.2%	21.3%
		あり	—	—	—	—	51.8%	78.7%
4	収入源 ※	生活保護	—	—	—	—	34.1%	8.1%
		公的年金	—	—	—	—	57.7%	80.1%
5	年収	壮年期						
		300万円未満	25.6%	29.7%	40.7%	54.3%	—	—
	300万円～700万円未満	52.0%	54.4%	36.3%	35.9%	—	—	
	700万円以上	22.4%	15.8%	23.1%	9.8%	—	—	
高齢期	200万円未満	—	—	—	—	63.9%	61.9%	
	200万円以上	—	—	—	—	36.1%	38.1%	
6	就業形態	非正規雇用・無職	24.2%	34.3%	52.4%	50.0%	14.2%	26.9%
		正規雇用 他	75.8%	65.7%	47.6%	50.0%	85.8%	73.1%
7	住宅形態	賃貸住宅	76.0%	67.1%	70.2%	55.6%	69.1%	41.7%
		持ち家	24.0%	32.9%	29.8%	44.4%	30.9%	58.3%
8	健康状態	よくない傾向	24.2%	15.6%	32.4%	25.3%	32.0%	26.5%
		よい傾向	75.8%	84.4%	67.6%	74.7%	68.0%	73.5%
9	出身地域	東京圏以外	55.0%	56.8%	50.0%	51.0%	47.1%	43.9%
		東京圏	45.0%	43.2%	50.0%	49.0%	52.9%	56.1%
10	兄弟姉妹	なし・連絡なし	30.8%	21.0%	31.6%	20.0%	39.0%	25.9%
		あり	69.2%	79.0%	68.4%	80.0%	61.0%	74.1%
11	友人	いない・とても少ない	25.8%	20.5%	27.7%	28.9%	41.2%	20.5%
		いる	74.2%	79.5%	72.3%	71.1%	58.8%	79.5%
12	気軽な話し相手	いない	9.3%	2.4%	11.4%	7.1%	16.0%	3.2%
		いる	90.7%	97.6%	88.6%	92.9%	84.0%	96.8%
13	相談相手	いない	19.4%	8.4%	21.0%	11.1%	26.5%	8.4%
		いる	80.6%	91.6%	79.0%	88.9%	73.5%	91.6%
14	正月の過ごし方	一人で	25.2%	20.6%	43.3%	22.7%	55.8%	30.2%
		誰かと	74.8%	79.4%	56.7%	77.3%	44.2%	69.8%
15	近所づきあい	まったくない	36.2%	25.6%	23.5%	9.3%	14.2%	7.2%
		ある	63.8%	74.4%	76.5%	90.7%	85.8%	92.8%

※ 収入源は複数回答で、これら以外の選択肢がある。なお、他の項目も、選択肢を「あり」「いる」にまとめている。

IV

ヒアリング調査結果からみる単身者の生活像

1. ヒアリング調査の概要

(1) 調査の実施方法

新宿自治創造研究所では、昨年度、単身世帯意識調査と並行して新宿区で暮らす35歳以上の単身者に対するヒアリング調査（聴き取り調査）を実施した。調査は平成26年9月から10月にかけて、区役所をはじめとする区の施設や協力者の自宅、職場などにおいて、研究員2名が面接方式で実施した。壮年期の単身者は平日の昼間に働いている人が多いため、平日の昼間だけでなく、夜間や土・日曜日にも行った。実施時間は45分から1時間程度を基本としたが、1時間30分に及ぶこともあった。なお、本研究所のアドバ

イザーである宮本みち子放送大学副学長にも数名の聴き取りをお願いした。

調査では、住宅形態など居住に関すること、新宿区に転入するまでの経緯、新宿区の暮らしやすさ・暮らしにくさ、家族や親族との関わり、仕事のこと、日常生活や休日の過ごし方、将来への不安、結婚観、行政への要望などを中心に質問をした。やりとりの中で自らの生い立ちを振り返る機会となることもあった。

(2) ヒアリング調査回答者の内訳

8月下旬にヒアリング調査の協力者を「広報しんじゅく」と新宿区ホームページで募るとともに、8月下旬から9月中旬にかけて実施した単身世帯意識調査の調査票に依頼文を同封し、協力を募った。多くの申込者と日程調整のうえ、最終的には106人を対象に調査を実施することができた。回答者の申込方法別内訳（図23）は、広報が5人、ホームページが1人、意識調査対象者が100人である。男女・年齢区分別内訳は、壮年前期（35～49歳）の男性24人（総数の23%）、女性25人（同24%）、壮年後期（50～64歳）の男性11人（10%）、女性10人（9%）、

高齢期（65歳以上）の男性13人（12%）、女性23人（22%）である。意識調査の回答者区分（P3 図1）と比べて、壮年前期の男性で特に高い割合（プラス9ポイント）となっており、最も行政と関わりが薄い年代の男性から多くの生の声を聴くことができたのは大きな収穫であった。また、ヒアリング回答者の構成割合は、住民基本台帳から無作為抽出で行った単身世帯意識調査の標本（対象者数）（図24）とほぼ同じ構成割合となっており、新宿区に居住する単身者の男女・年齢区分を反映したものとなっている。

図23 ヒアリング調査回答者の構成割合

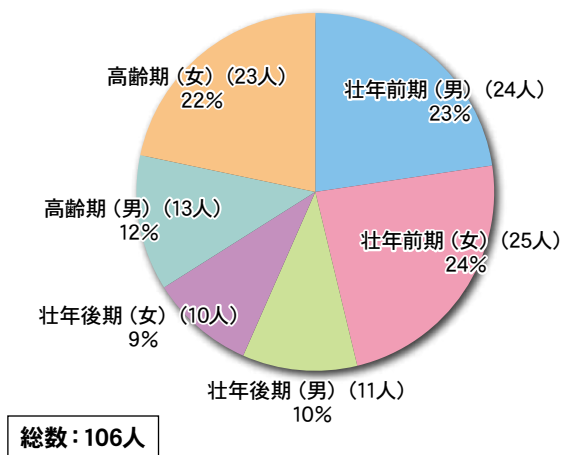
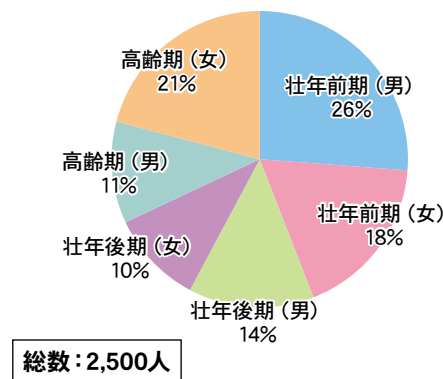


図24 (参考) 単身世帯意識調査標本の構成割合



2. ヒアリング調査回答者のタイプ分類

ヒアリング調査結果から新宿区で暮らす壮年期・高齢期の単身者の生活像を描くにあたり、多様な単身者をなるべく共通の特徴や課題が見いだせるようタイプ別に分類する。

一口に単身者といっても、男女、年齢、配偶関係、居住環境など千差万別であり、とりわけどんな仕事に就き、どのような働き方をしているかによって、生活水準だけでなく、生活様式や人間関係までが大きく左右される。仕事を退職した後も、預貯金や年金受給額などの経済的な側面や仕事や職場で培った人間関係といった側面で違いが生じ、老後の生活に大きく影響する。こうしたことから、タイプ分類については、これまでの比較分析の基本としてきた男女・年齢区分別の分類に加え、仕事や収入面からくる生活の安定度によって「生活安定層」と「生活不安定層」に分類することとする。具体的には、壮年期では、就業形態がおおむね安定し、収入が一定水準であるグループと、就業形態が不安定で収入が少ないグループである。高齢期では、年金収入や家族等の支援により一定の安定した生活を送っているグ

ループと、年金などの収入や家族等の支援がなく、生活に困難さを抱えているグループである。

こうしてタイプ分類を行うが、Ⅲ-3の結果から、壮年期では経済的にも人とのつながりにおいて男女の違いは少ないことがわかっている。むしろ、仕事の内容や働き方によって、生活様式や人とのつながりに違いが生じる。そのため、壮年期では男女別ではなく、収入の規模や職種・業種によって分類することとする。

新宿区は全国と比べて特に情報通信業や学術研究・専門技術サービス業の従業者の割合が高い（P22 図26）。実際、IT関係や医療機関に勤務する人がヒアリング回答者に多くみられ、都心特有の特徴的な働き方をしている様子がうかがえた。そこで、壮年期の生活安定層の分類は、企業に正規職で勤める人のうち高収入を得ているグループと標準的な収入を得ているグループ、そして情報サービス業に就くグループと専門的技術・資格者であるグループとの4つに分類した。こうして定めたタイプ分類の結果は表3のとおりである。

表3 ヒアリング調査回答者のタイプ分類

年齢区分	壮年期								高齢期 (65歳以上)							
	壮年前期(35～49歳)				壮年後期(50～64歳)				安定層		不安定層					
生活安定度	安定層				不安定層				安定層		不安定層					
就業区分 男女区分	高収入 正規職・ 標準収入	標準収入 正規職・ 従事者	情報サー ビス業	資 格 者	専 門 的 技 術	事 業 者	収入不安 定な	失 業 中	非 正 規 職	生活保 護	男性	女性	男性	女性	男性	女性
ヒアリング 回答者数	7	10	6	10	6	5	4	5	5	6	5	5	16	8	7	

※ 職業不詳が1人あり

このタイプ分類に従い、表3左側の壮年前期の生活安定層で正規雇用・高収入のグループから順にヒアリング結果を示していく。手順としては、まずタイプごとにグループの特徴について、ヒアリング結果からみられる傾向を「暮らしぶり」、「結婚観」、「つながり」などの項目ごとにコメントを交えて示し、その後、単身者の生活像がより鮮明に浮かぶよう代表的な事例をいくつか取りあげた。

また、生活安定度に違いにより、意識調査の各質問項目にどのような回答の違いがあるかをみるため、年齢区分ごとに男女・年収別クロス集計結果を載せ

ており、高齢期ではさらに、連絡のある子どもの有無別の結果を載せている。使用した質問項目は、壮年期・高齢期共通のものとしては、「住宅」、「友人」、「相談相手」、「入院・介護時に頼れる人」、「近所づきあい」である。また、壮年期のみでは、「就業形態」、「健康状態」、「高齢期に不安に感じる事」、「経済的な備え」、「結婚への意向」、「結婚しない理由」であり、高齢期のみでは、「預貯金」、「収入源」、「正月ともに過ごした人」、「配偶関係」、「子どもの有無」、「子どもとの連絡」である。それぞれ年収や子どもの有無によって特徴が出ていることがわかる。

3. 壮年前期(35～49歳)の生活像

3-1 生活安定層

(1) 正規職・高収入

このグループに属するのは、大企業等に勤務し、高い収入を得ている人たちである。経済的には非常に安定的な層といえる。その反面、長時間勤務が常態化していることが多く、「結婚、子育て、親の介護を考えると、今までの仕事を最優先にしたペースで働くのは無理だと考えています。」(30代、女、会計事務所)、「土曜日は会社に出ていることが多いです。」(40代、女、不動産会社)との意見があるように、生活は仕事中心の人が多く。

●暮らしぶり

長時間勤務のためプライベートな時間は限られているが、余暇は充実しており、空き時間を利用してジムに通ったり、趣味に費やしたりしている人が多い。また、食事については、自炊をしている人が多く、自己管理意識の高さがうかがえる。「土日は自分への投資として、スポーツジムに通う生活を20年くらい続けています。」(30代、男、人材派遣会社)、「運動は、2週間か1週間に一回ジムに通っています。」(30代、男、通信機器会社)との意見が表すとおり、健康を自分自身への投資と考えているようだ。

●結婚観

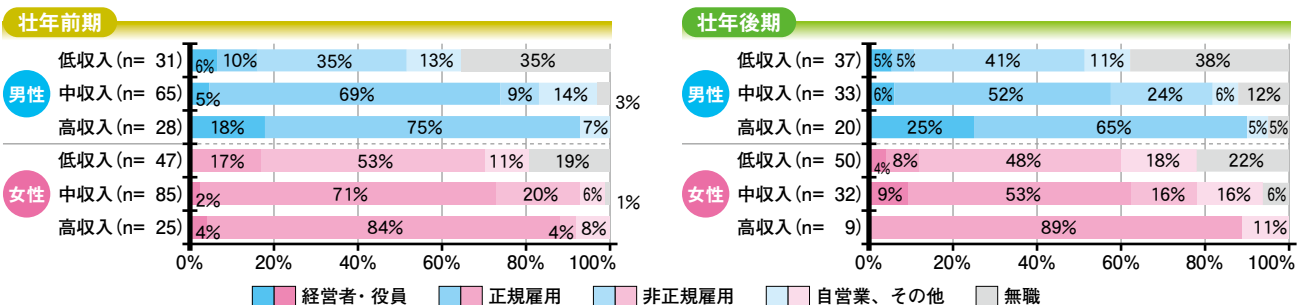
一人でいる理由や結婚観は、「出会い」に割く時間が少ないためか、「仕事が忙しくて、自由な時間がないから、出会いがないという人がいると思います。」(30代、女、証券会社)や「仕事が忙しいので全く時間がとれませんが、相手がいれば結婚してもよいと思っています。」(30代、男、人材派遣会社)という意見がみられる。また、「長く付き合っているパートナーがいます。お互いの両親が高齢で、彼の母親も認知症になっています。そういう年代なので、入籍するかはタイミング次第です。」(40代、女、証券会社)など、結婚に対して消極的な意見も浮かがる。その一方で、30代では近々結婚予定の回答者もいる。

●つながり

壮年前期ということもあり、両親、兄弟とのつながりが強く、学生時代や会社を通じた仲間とのつながりも強い。また、「妹の子ども(甥と姪)には、お金を貯めておくからと言って、将来の面倒をお願いしています。」(40代、女、食品会社)という人もいる。仕事の忙しさを反映して、近所と付き合いのある人はほとんどいない。

●●●●●●●●●● 単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ① ●●●●●●●●●●

Q41-1 就業形態



壮年期の単身者の就業形態を低収入(年収300万円未満)、中収入(年収300～700万円未満)、高収入(年収700万円以上)(以下、同じ)の区分ごとに見ると、就業形態が「非正規雇用」の壮年前期(35～49歳)の単身者の割合は、男女とも低収入者で高い(男性35%、女性53%)。

壮年後期(50～64歳)では、「非正規雇用」の割合は男女とも低収入者で高く、4割以上(男性41%、女性48%)を占める。「正規雇用」の割合は、男女とも低収入者で1割にも満たない(男性5%、女性8%)。

注) 本章のクロス集計においては、年収別では年収無回答者を、高齢期の子どもの有無別ではその無回答者をそれぞれ対象から除いて集計している。

馴染みのある新宿で分譲マンションに住み、趣味にも力を入れる

【事例1】Aさん(40代後半、女、証券会社、未婚)

Aさんは首都圏外出身で、大学進学を機に上京した。その後、証券会社で10年近く働いている。地元から出てきて初めて住んだまちが新宿区であったこともあり、新宿区は馴染みのある場所である。現在住んでいるのは、将来売りに出すことも考えて購入した分譲マンションで、住宅街の一角にある。

忙しい中ではあるが、余暇も充実しており、趣味のフラメンコは、平日、休日とレッスンに通っている。また、読書好きで、毎月かなりの数の本を購入している。

母親が実家に一人で住んでいるため、様子を見るに、年に2、3回は帰郷している。また、弟が比較的近くに住んでおり、時々連絡を取り合う仲である。高齢の母親に万が一のことがあった場合には、呼び寄せて、自分はパートナーと住み、母親にはAさんの自宅に住んでもらうことも計画している。

パートナーとの付き合いは長く、家族にはすでに身内として認知されている。ただ、お互いに仕

事を持ち、両親も高齢で、相手の親は認知症を発症していること、普段から会いたい時に会っていても、急いで結婚しなければならない理由は見当たらない。入籍するかどうかは、差し迫った問題に直面した時など、タイミング次第と考えている。

仕事が忙しく、朝早く出勤し夜遅く帰宅するため、同じマンションの人々とは、廊下やエレベーターで出会った際に挨拶をする程度であり、特に親しい付き合いはしていない。

緊急事態が起きて誰かに世話をしてもらう必要が生じた場合には、パートナーか弟や親族に頼ることができる。また、休日を共にする親しい友人も多いので、そうした友人に頼むことができる。

老後については、相手がいるいない、男女に限らず、自分自身がどのように暮らしていくのか、そのためにはどれだけのお金が必要となるのか、誰もがそうしたライフプランを持つべきだと感じている。そのため、養老保険に入るなどして将来のリスクにしっかりと備えている。

仕事、親の介護と毎日忙しいが、同じ境遇の友人と助け合う

【事例2】Bさん(40代後半、女、不動産会社、未婚)

Bさんは近隣県出身で、現在は、不動産会社で管理職に就いている。新宿区に転入したのは、10年ほど前に、現在居住する分譲マンションを、新築で購入したことがきっかけであった。転職を経験してはいるが、業種は一貫して不動産業である。

新宿区に住む利点は、通勤に便利なこと、仕事が深夜に及んでもタクシーで安く帰宅できること、深夜に帰宅しても立ち寄れる飲み屋や食事処があること、などである。

土日也多忙である。出勤して仕事をしたり、老人ホームにいる母親を訪問したり、美容院、買い物、洗濯、掃除など、普段できない雑事を済ませていると、あっという間に休日は終わる。そうした中で力を注いでいるのが趣味のフラダンスである。毎回参加できるわけではないが、週1回の頻

度で教室に通っている。

結婚に関しては、これまでは管理職という責務と、生活スタイルが変化することに対して躊躇していたため踏みとどまっていたが、縁があればしてみたいと考えている。ただ、同年代の男性は、夫婦のあり方について、まだ古い価値観を持っているのではないかと懸念している。

Bさんには、同じく仕事中心の生活を送る独身の友人がいる。そうした友人の多くが同じ新宿区に住んでおり、何かあればお互いに助け合おうと常々話し合っている。そうした友人には十分な年収があり、既に住宅ローンを払い終わっている人も少なくない。加えて、いざという時に備えて、都内に住む妹には自宅の鍵を渡している。

(2) 正規職・標準収入

このグループに属するのは、正社員であり、標準的な収入を得ている人たちである。必ずしも仕事中心ではなく、私生活の充実を重視している人が多い。そのような人は、仕事を生活の中心には置いておらず、「休みの日は完全にオフと考えて、余り多くのことや堅いことは考えないようにしています。」(40代、男、印刷会社)、「仕事をしているのは、ローンを払うためと生活のため。」(40代、女、保険会社)であったりする。その反面、山登りやダンスなど、プライベートにおける趣味の充実に力を入れている人が多い。

●暮らしぶり

収入はそれほど高いとは言えないが、現在の収入に満足し、私生活の充実を楽しんでいる人がいる一方で、「かろうじて正社員ですが、収入が上がらないため、貯金することができず厳しいです。福祉の仕事は本当に収入が上がりません。」(40代、男、障害者施設)、「老後に向けて、10億円を目標に貯蓄をしています。」(40代、女、広告制作会社)のように、現在の給与に不安を覚えているたり、将来への不安から極端な節約生活をしている人もいる。

健康には気を配っており、外食頻度は決して低くないが、「ファーストフードやインスタント食品はよほどのことがない限り食べません。」(40代、女、アパレル会社)、「家にいる時は、朝と夜は基本的に自炊をしています。」(40代、女、保険会社)とあるように、時間のある時には自炊をし、定期的にジムに

通ったり適度な運動を行うなど、健康管理にも努めている人が多い。

●結婚観

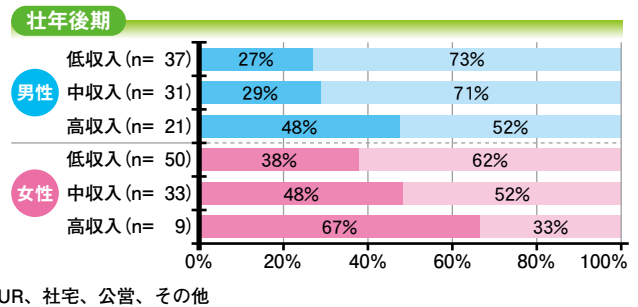
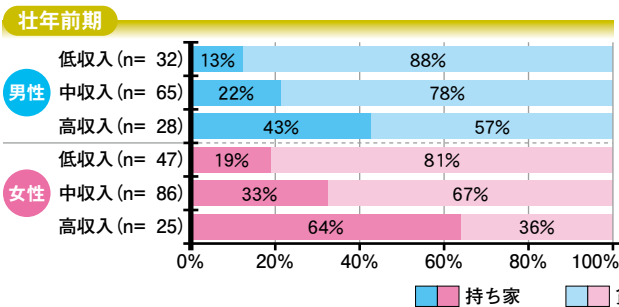
「今は仕事も趣味も楽しいので、特に結婚に興味はありません。結婚したくないわけではありませんが、いつかはするだろうと思っていたら今に至りました。」(40代、女、広告制作会社)や「もともと結婚への憧れがありませんでした。」(40代、女、保険会社)など、積極的な動機づけの不足を指摘する意見がある。

●つながり

「体の調子が悪くなって死亡していたとしても、誰からも気づかれず、そのままにされてしまうのではないかという不安が頭をよぎることがあります。」(30代、男、高校教諭)、「健康とお金の面は問題ないと思いますが、人とのつながりが少し心配です。」(40代、男、特殊法人)という意見がある一方で、「前の会社の同期で、いざという時は助けてくれる友達が近くに住んでいます。」(40代、女、電機メーカー)、「兄弟とは割と仲がいいので、連絡を取り合っています。」(40代、女、IT系企業)、「趣味のダンスチームの人たちと友人として付き合っています。」(40代、女、英会話学校)のように、総じて親族関係、友人関係、会社関係のいずれのつながりも強く、社会的孤立に結びつく要素は見当たらない。

●●●●●●●●●● 単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ② ●●●●●●●●●●

Q6 住宅



壮年前期の単身者が居住する住宅の割合は、男女とも収入区分が上がるほど「持ち家」が高くなる。特に女性は、低収入者の19%に対し、高収入者では64%と格差が大きい。

壮年後期では、男女とも収入区分が上がるほど「持ち家」の割合が高くなる。特に女性の高収入者では67%にも及ぶ。

福祉職の給料に不安を覚えながら、婚活での出会いに期待

【事例3】Cさん(40代前半、男、障害者施設、未婚)

Cさんは首都圏外出身で、現在都内の障害者福祉施設に正社員として勤務する。

福祉職は他職種と比べ平均給与が低い。この業界で10年以上働いてきたCさんもその例外ではない。健康で仕事が途切れていないので何とか生活しているが、収入が少ないので、預貯金ができず、支えとなる家や家族を持っていないことに対して不安を覚えている。また、こうした待遇や職場環境への不満もあり、これまで都内の施設をいくつか転々としてきた。新宿区のメリットは、職場がどこに変わろうと、通勤に便利な点である。

休日は趣味のキックボクシングをしたり、民間業者が行う婚活イベントに参加している。キック

ボクシングを通じて親しくなった仲間は、その多くが同世代で、深い付き合いのできる友人である。

Cさんは結婚願望が強いが、職場で女性と出会う機会が少ないため、そうした機会を求めて、これまで数多くの婚活イベントに参加してきた。しかし、収入面がネックとなった。以前は相手にも一定水準の収入を望んでいたが、今はそうした条件は取り払い、自分と気の合う性格のよい人と結婚をして、一緒に暮らしたいと思うようになった。

いざという時に頼れるのは両親である。友人には頼みにくいため、両親との仲は必ずしも良好ではないが、頼らざるを得ない。

分譲マンションを購入したが、大きな怪我をして実家に帰るか検討中

【事例4】Dさん(40代後半、女、IT系企業事務、未婚)

Dさんは首都圏外出身で、上京して以来ずっと新宿区に住み続けている。現在は、約10年前に購入した分譲マンションに暮らしている。マンションは、ずっと東京に住んで家賃を払うならローンを払ったほうがよいと思い購入した。仕事はIT関係企業の事務職である。

弟が2人いて、割と仲が良く、連絡もよく取り合っている。特に、下の弟は勤務先が近く、頻繁に会っている。

現在、肩の筋肉を損傷していて、週2回ほどリハビリに通っている。上半身が動かせないので、日常

生活に苦勞することが多い。会社へも満員電車を避けるためバスを利用し遠回りしている。また、一人での入浴、レトルトの容器を開けられないことなどに不便を感じている。障害者サービス、介護保険など、使える公的サービスがないか調べてみたが、年齢的な理由などから使えるサービスが何もなかった。

学生時代の友人は東京にはおらず、万が一の場合に頼れるのは実家にいる親である。怪我をしたことで新宿区のような都会に住むことに不安を持つようになった。定年まで会社に勤務し続けて実家に帰るか、その前に実家に帰るか、悩んでいる。

多様性のある新宿で、土日のプライベートは充実

【事例5】Eさん(40歳代後半、女、英会話学校、離別)

Eさんは転職して英会話学校の正社員となり、カリキュラムの作成などを担当する。新宿区に転入した理由は、外国人が多く住み、マンハッタンに似た多様性のある雰囲気に面白さを感じたことと、通勤に便利なところが大きかった。

新宿区の生活は、買い物と生活の便がよいのでとても満足している。仕事で遅くなっても開いている店が多く、買い物に困らないので便利である。

平日は仕事の拘束時間が長く、帰宅も遅くなりがちであるが、土日は休みである。土曜の夜は友人と遊びに行ったり、飲みに行ったりしている。

体力維持も兼ねて、趣味でサルサやフラメンコも週1回通っている。レッスンを通じて仲良くなった友人もあり、会社とは無関係なつながりであるため、プライベートな話をするができる。

離婚経験があり、30代の頃は再婚したいと思っていたが、そうした縁はなかった。

将来的には、アパートやマンションを購入するほどの資力を持つことは難しいので、ずっと賃貸で暮らしていきたいと考えている。その際には家賃が最優先条件になるだろうと考えている。

(3) 情報サービス業従事者

図 25、26 のとおり、新宿区には情報通信業が多く、特に情報サービス業は、新宿区を代表する産業のひとつといえる。「プロジェクトが立て込んでくると、土日休みなしで、夜寝られなかったり、ホテル暮らしということもあります。」(30代、男、IT系企業)、「若いうちは24時間仕事をしているという業界です。」(30代、男、アプリ制作会社)との声があるように、長時間労働が常態化している産業である。そのため、「職住近接」を求めて新宿区に来た人も多いようだ。

●暮らしぶり

勤め先が比較的近くにあるため、自転車通勤の人が少なくない。不規則な生活習慣になりやすいが、中には「マラソンやトライアスロンをやるタイプなので、食事は自炊して、自己管理しています。」(40代、男、ベンチャー企業)のように、健康維持を心掛けている人もいる。

業界は季節性があるだけでなく、競争も激しいた

め、浮き沈みが大きい。ただ、「私は今の仕事が楽しくて天職だと思っているので、オンとオフの境がなくても嫌ではありません。」(40代、女、マーケティング会社経営)のように、忙しさを楽しんでいる人もいる。

●結婚観

長時間勤務のためかそもそも出会いの機会が少なく、「結婚願望はありますが、タイミングを逃してしまったという感じです。」(30代、男、アプリ制作会社)、「夜遅いので、同じような生活をしている人でないと難しいです。」(30代、男、マーケティング会社)、「業界的に独身が多いと思います。」(30代、男、アニメイベント会社)との声がある。

●つながり

壮年前期ということもあり、親族関係、友人関係、会社関係のいずれのつながりも特に問題はみられない。

図 25 新宿区の産業大分類別従業者数 (上位産業) (2012年経済センサス活動調査)

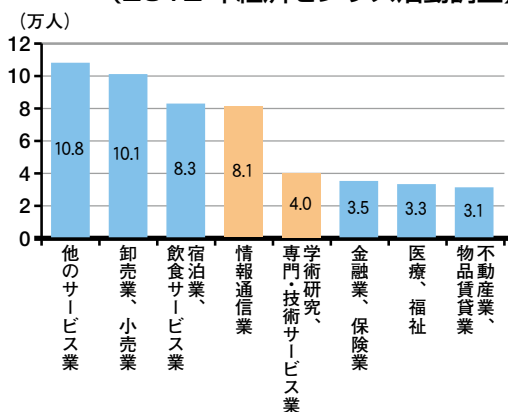
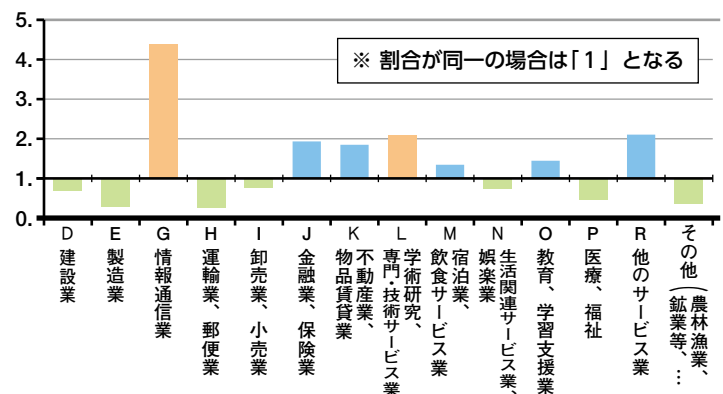


図 25 は新宿区で働く従業者の多い上位 8 産業である。従業者が最も多いのは「他のサービス業」で、「情報通信業」は全 18 業種中 4 番目 (8.1 万人)、「学術研究、専門・技術サービス業」は 5 番目 (4.0 万人) に多い。産業別従業者の構成割合を全国の構成割合との比 (特化係数) でみると (図 26)、「情報通信業」

図 26 新宿区の産業大分類別従業者割合の全国割合との比 (特化係数) (2012年経済センサス活動調査)



が圧倒的に高く、次いで「学術研究、専門・技術サービス業」が「他のサービス業」とともに高くなっている。

本章でタイプ分類されている「情報サービス業」は主に「情報通信業」に属し、「専門的技術・資格者」は主に「学術研究、専門・技術サービス業」に属する。

コネクションづくりに便利な新宿区で、深夜まで仕事

【事例6】Fさん(30歳代後半、男、アプリ制作会社、未婚)

Fさんは、スマホのアプリ制作プロデューサーである。クライアントは主に上場企業で、そうした企業に対してアプリの提案をしている。新宿区に住み始めたきっかけは、職場への近さであった。その後、当時の居住地の近くの分譲マンションを購入し、現在に至る。

若いうちは24時間仕事をしている業界である。西新宿の十二社通り沿いには、スタジオや専門学校など関連施設が多くあるため、撮影系や動画系の制作マンが多い。そうした人々とのコネクションを保つにも新宿区はよい場所である。

このまま一人暮らしが続くことについての不安は全くない。将来のことは考えるが、新宿に住ん

でいるということは、仕事があり収入も得られ、友人もいる状態ということなので、いいコネクションを作って健全に暮らしていけると感じている。

結婚に関しては、願望はあるが、タイミングを逃してしまったと感じている。この年になると仕事関係で出会うのは年輩の男性が多く、異性との出会いがなくなってくるからである。結婚によって、現在の生活スタイルが崩れてしまうリスクを考えて及び腰になっているところもある。

生活は、労働時間を反映して不規則になりがちである。しかし、不規則な生活の中で、簡単な自炊をしたり、帰宅後7時間は十分な睡眠をとるなど、生活習慣が乱れないように努力している。

自ら会社を経営、東京にいるからこそできる仕事だと実感

【事例7】Gさん(40代前半、女、マーケティング会社経営、未婚)

Gさんは、英語を活用するマーケティング調査会社を自ら起こした個人経営者である。東京の西側で転居先を探し、交通の利便性が確保できるといことで新宿区に居住した。

調査はインタビューを主とするため、依頼先によって仕事場所は変わる。インタビューがない時には、自宅で次の仕事の準備や報告書の作成を行っている。今の仕事は楽しく、充実しており、東京にいるからこそできる仕事だと実感している。しばらくは実家に帰る予定はない。

また、仕事を通じて知り合った人々に公私ともに助けられているため、一人暮らしであることによる困りごとは特にない。一人でいることに関し

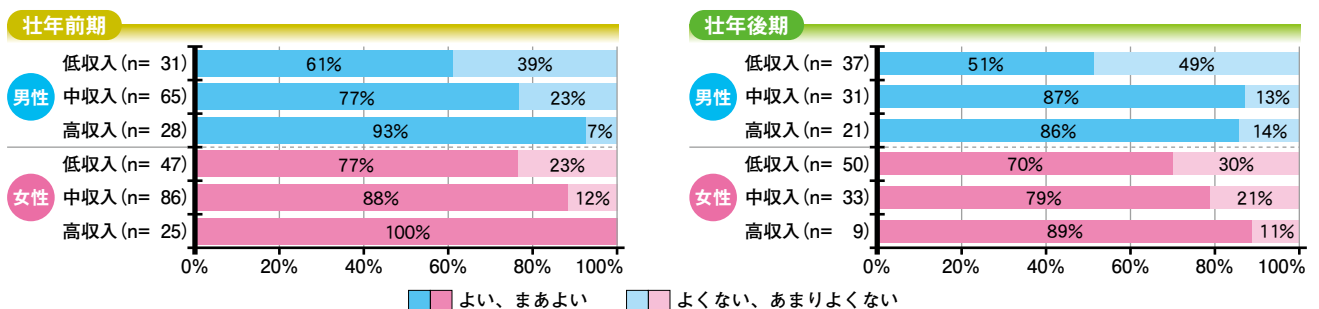
ても、独身主義ではなく、これまで良縁に恵まれなかったため未婚のまましているが、よい縁があれば結婚したいと考えている。

健康状態は心身ともに健康である。できる限り歩いたり走ったりして健康の維持に努めている。時間があるときには、居住地の周辺を10キロ近く走ることもある。食事も、可能な限り自炊をするように努めている。

同性で単身者の友人が数人比較的近くに住んでおり、夜中でも訪ねていける仲なので、緊急時にはそれらの友人に気兼ねなく支援を求めることができる。

単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ③

Q27 健康状態



健康状態が「よくない」「あまりよくない」という壮年前期の単身者の割合は、収入区分が下がるほど高くなり、特に男性の低収入者では4割近く(39%)にもなる。一方、女性の高収入者では健康状態がよ

くない人は皆無となる。

壮年後期では、男女とも低収入者でよくない割合が高く、特に男性では半数近く(49%)にもなる。

(4) 専門的技術・資格者

専門的技術・資格を有する人たちも新宿区を代表する産業の構成要員である。このグループは、看護職、大学・専門学校などの教員、放射線技師、弁護士など、専門性を生かした職業に就く人たちである。「大学を卒業後、病院に勤めました。その後、3か所の看護施設で働きながら、大学院に通って修了しました。」(30代、女、作業療法士)、「栄養の学校に入っていて、そこで出会った学会の先生からスカウトされて看護施設を起ち上げてほしいと支援を受けました。」(30代、女、看護施設経営)など、専門性を身に着けるために専門教育機関にいた時間も長く、大学院卒業など高学歴者が多いのもこの層の特徴である。また、「複数の病院を掛け持ちしています。学校で教える仕事もしています。」(40代、女、医師)のように、専門性があるため、一つの組織に属さず、複数の仕事を掛け持ちするなど、自らのペースで働く人も少なくない。

●暮らしぶり

このグループに属する人のうち、組織に所属せず、非常勤、フリーランスとして勤務している人は、所得が不安定になる場合もある。また、「開業したばかりなので、ほとんど仕事ばかりしているのですが、もう少ししたら落ち着くと思います。」(40代、男、税理士)のように、自営業の場合、公私の区別がつかない生活ともなる。

健康に対する意識は高く、ジムに通ったり、マラソンをしている人も多い。「休日はヨガの教室に通っています。」(40代、女、写真家)、「山登りやスポーツ観戦、マラソン、旅行など、いろいろな趣味があるので、週末に家にいることはありません。」(40代、女、デザイン会社)など、余暇も充実している。

●結婚観

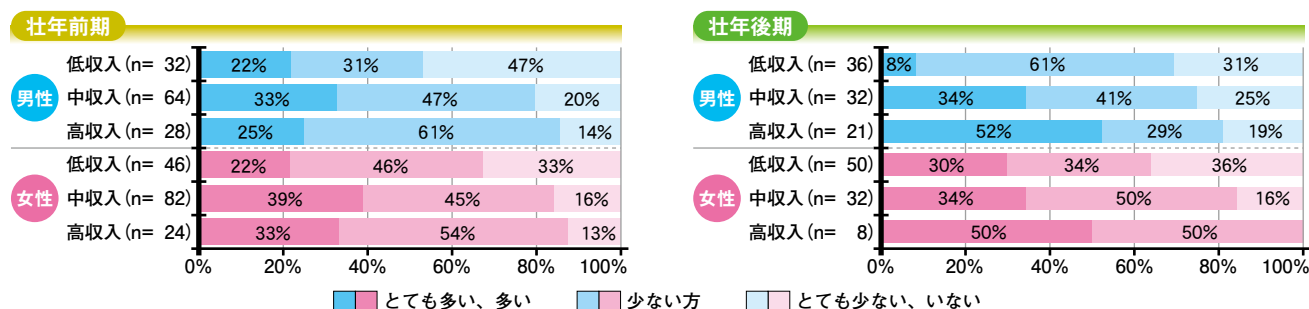
結婚に関して、意識はしているものの、収入が安定するまでに時間がかかる場合も多く、「研究職は婚期が人より遅くなります。」(30代、女、大学講師)、「結婚したい人は、家庭の主婦業を担う気がある女性ではないと難しいので、それをする気がない人だと多分結婚することはないと思います。」(30代、女、弁護士)、「今付き合っている人はいますが、奨学金を返してお金がないということもあって、近々結婚することはないと思います。」(40代、男、放射線技師)との声がある。

●つながり

「いざという時、頼れる友人がいます。職場のスタッフに同世代が多いです。」(40代、女、大学講師)など、総じて親族関係、友人関係、会社(所属団体)関係のいずれのつながりも強固である。

単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ④

Q12 友人



親しい友人が「とても少ない」「いない」という壮年前期の単身者の割合は、男女とも低収入者で高く、男性で47%、女性で33%を占める。中高収入者の2倍以上の割合である。

壮年後期では、「とても少ない」「いない」割合は男女とも低収入者で高く、男性で31%、女性で36%を占める。女性の高収入者では皆無である。男性の低収入者で友人の多い人は8%と極めて低い。

知り合いの誘いを受けて看護施設運営、365日休みなく対応

【事例8】Hさん(30代後半、女、看護施設経営、未婚)

Hさんは首都圏外出身で、地元の病院で働いた後、東京で一時休養を兼ねて勉強していたところ、知り合いから誘いを受けて、看護施設を開設することになった。現在、自らも実務にあたりながら、看護施設の経営者として、スタッフをまとめている。

仕事は、その性質上、24時間、365日休みなく対応しなければならない。ともに働くスタッフが個別の対応をしているが、スタッフで対応できない場合はHさんが対応することになる。時には徹夜で対応することもあり、予め計画して休暇を取ることは難しい。

現在は看護施設の開設から間がなく、経済的に余裕がないが、地域医療の仕事に誇りを感じてお

り、体が健康である限りこの仕事を続けていきたいと考えている。

実家には両親が住んでいる。一人いる兄は東京近郊に住んでいる。仲が悪いわけではないが、お互い忙しく、連絡はほとんど取り合っていない状態である。

結婚を考えている相手がいるが、遠距離の付き合いである。同じ地域医療を専門としているため、お互いの事情はよく理解している。今後どのように暮らしていくかを相談中である。年齢的に子どものことも考えるが、医療現場に携わっていると物事が思い通りに進まない事例を多く見ているので、なるようにしかならないとも考えている。

複数の勤務先を掛け持ちしながら、組織を超えて同業者とつながる

【事例9】Iさん(40歳代前半、女、医師、未婚)

Iさんは医師である。新宿区で生まれ育った。その後医者になり、他区の病院で働いていたが、現在住む分譲マンションを購入したことを機に新宿区に戻ってきた。新宿区のマンションを購入した理由は、住環境の良さと資産価値が低下しないと思ったからである。現在は、複数の病院を掛けもちし、教職にも携わっている。

休みの日は、ジムに通ったり、家の周辺を走ったりしている。プライベートでは、仕事上でのつながりのある人よりも、他の分野で医師になっている大学時代の同期やジムで知り合った人と、相談

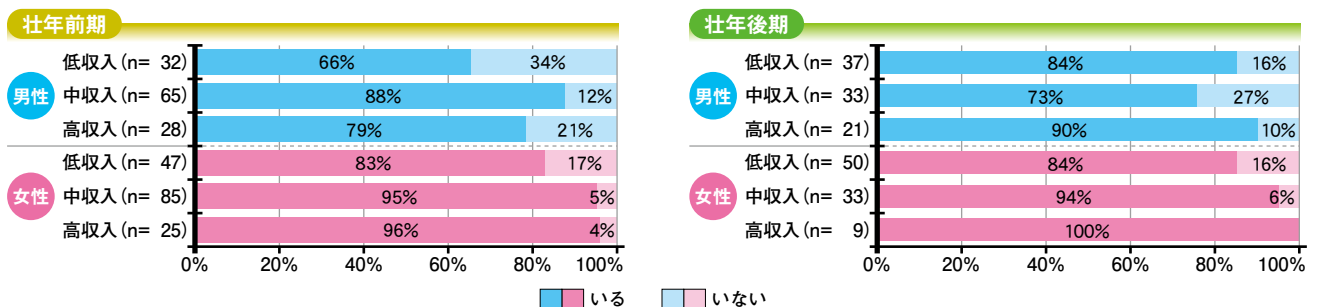
ごとを話したり、遊びや食事に行ったりしている。

現在は良い出会いがないため独身だが、いい相手がいれば結婚したいと考えている。ただ、結婚しても、子どもを産むには周りの協力、特に相手の人の協力がないと無理だろう、と感じている。

また、一人で病気になるると生活に困り、仕事にも支障がでるので、自炊を心がけるなど、健康管理をきちんと行っている。いざという時には自分も医者であるし、同期の友人も様々な専門医であり、頼りにできるので、親や姉妹に頼ることなく対処できるだろうと考えている。

単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ⑤

Q14 悩みごとの相談相手



悩みごとの相談相手が「いない」という壮年前期の単身者の割合は、男性の低収入者で34%と高く、女性の中高収入者(4~5%)と対照的である。

壮年後期では、「いない」という人は、男性はいずれの収入区分でも1割以上であるのに対し、女性の高収入者は皆無である。

3-2 生活不安定層

(1) 収入不安定な事業者

このグループに属する人々は、個人で仕事をしている自営業やフリーランスの人たちである。収入は業績次第なので不安定である。仕事に便利との理由で新宿区に移り住んでいる人が多く、自宅を職場とするか、自宅を職場としない場合であっても、勤務先まで自転車か徒歩で通勤可能な人が多い。

●暮らしぶり

「独立して個人経営者になったので、平日と休日の区別がなくなりました。自分でスケジュール管理できる点はいいのですが、土日も仕事関係で誰かと会うことが多いです。」(30代、男、マーケティング会社経営)、「個人事業主ということもあって、仕事のことばかり考えています。土日、平日関係なく事業のことを考える必要があるので、仕事と余暇の区別ができていません。」(40代、男、ネットショップ経営)、「年収が非常に低く、どこかに引っ越す希望もなくなりました。」(40代、女、デザイナー)など、不規則な生活を送っている。

●結婚観

「起業して成功すればいいですが、リスクも背負っているため浮き沈みの激しい面があります。そのことが結婚を躊躇している理由の一つかもしれません。」(30代、男、マーケティング会社経営)、「結婚はいいところも悪いところもあると思うので、縁があれば再婚してもいいかもしれません。」(40代、男、

飲食店経営)、「結婚するには正社員でないと難しいと思いました。」(40代、男、自由営業)など、収入の不安定性を反映した意見が目立つ。

●将来への備え

「将来のことはあまり心配していません。仕事はやり続けると思っているので、お金の心配はないですね。仕事をする場所にもこだわりはありません。自分一人であれば、年金に頼らず暮らせると思っています。」(30代、男、マーケティング会社経営)、「同業者が近所に住んでいて、何かあった時に助け合おうと約束しています。」(40代、男、飲食店経営)などの意見に見られるように、楽観的意見も多く、いざという時にも、自らが築いた関係を生かして、リスクに備えている姿が浮かび上がる。

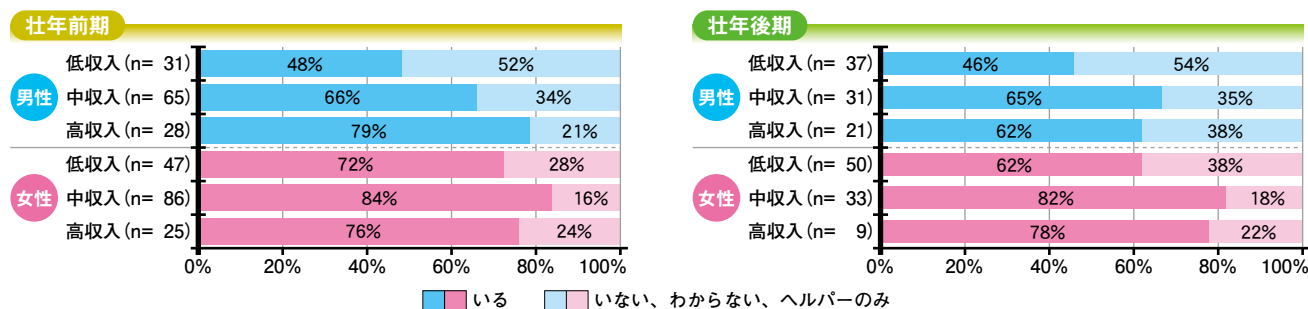
●つながり

その一方で、「友達はいませんが、近くに住んでいませんし、電話はしません。メールをするくらいで、休日一緒に過ごすこともありません。」(40代、女、フリーライター)のように、必要以上に他人と関わりを持ちたくない人もいる。

会社を通じた人間関係、いわゆる「社縁」がないか希薄であるため、親族関係、友人関係のつながり、仕事を通じた個人的つながりが重要となる。これらのつながりが十分に強ければ問題はないが、弱いと社会的孤立予備軍となる可能性もある。

●●●●●●●● 単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ⑥ ●●●●●●●●

Q25 入院・介護時に頼れる人



入院・介護時に頼れる人が「いない」「わからない」「ヘルパーのみ」という壮年前期の男性単身者の割合は、収入区分が下がるほど高くなり、低収入者では5割超(52%)に及ぶ。女性は年収による違いはほ

とんどない。壮年後期の男性では、頼れる人がいない人は低収入者で多く、5割半ば(54%)を占める。女性も低収入者では38%と高くなっている。

起業したばかりで仕事中心の生活、売上の変動が結婚への足かせに

【事例 10】 Jさん(30代後半、男、マーケティング会社個人経営、未婚)

Jさんはマーケティング会社の経営者である。20代の頃からフリーランスとして働いてきたが、首都圏外の某県の地域活性マーケティングを行う会社を立ち上げるために起業した。事業は、都市部の消費者に地元の商品を購入してもらうためのPRやブランディングを手掛けている。社員は自分だけであり、自宅はオフィスと兼用である。年中仕事のことばかり考えているので、楽しいこともあれば辛いこともあるが、楽しんでいる部分が多いので続けることができている。

新宿区に転入する前は、23区内に住んでいたが、木造住宅が密集する地域であり、安全上の不安があったため、新宿区に転入してきた。

休みがとれると、友人と飲みに行ったり、車がないので自転車で美術館などに行っている。

いずれは結婚して家族を持ちたいと考えているが、起業したばかりで、売上の浮き沈みが激しいため、そのことが結婚を躊躇している理由の一つである。

病気などで寝込んでしまったら、両親や親族には頼ることができないので、親しい先輩と、万が一の際にはお互いに助け合おう、と話合っている。ただ、金銭的な面では、将来のことは心配していない。仕事をする場所に強い拘りはなく、どこであっても仕事は続けていくので、自分一人であれば国民年金に頼ることなく生きていくことができると確信している。自営業なので、深酒をしないようにしたり、節約も兼ねて自炊するなど、自分の健康もしっかりと管理している。

不安定なフリーライター生活だが、無理するよりは一人がよい

【事例 11】 Kさん(40代後半、女、フリーライター、未婚)

Kさんは、首都圏外出身のフリーライターである。海外で留学、放浪をして帰国後、新宿区に転入した。当初は新宿区のシェアハウスで暮らしていたが、個室のない生活を続けることは苦痛であったため、近くに今のアパートを見つけて引越してきた。

現在は主に旅行をテーマとした記事を執筆するフリーライターであるが、仕事は不安定である。自分を売り込んでいかななくてはならないが、競争が厳しいため、他の仕事をすることもある。生活をすることに精一杯で、貯金はなかなかできない。

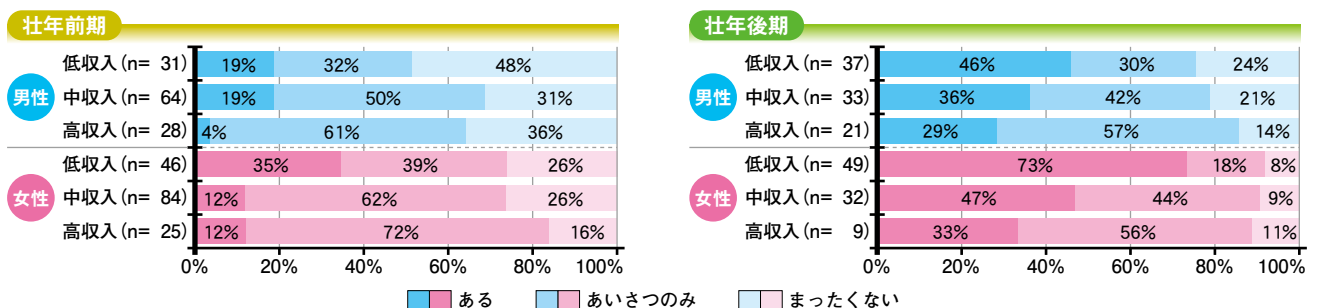
友人はいるが、近くに住んでいるわけではないので、メールで連絡をするぐらいで、休日と一緒に過ごすわけではない。母親と妹がいるが、首都圏外に住んでいるため、頻繁に行き来をするわけでもない。

これまで結婚をしたいと思ったこともあったが、誰といても疲れてしまうため、疲れるぐらいだったら無理はしないで一人でいた方がいいと思っている。

これまで実際に困った経験はないが、急に具合が悪くなるなど緊急の場合には、とりあえず友人に連絡することを考えている。

単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ⑦

Q 16 近所づきあい



近所づきあいが「まったくない」という壮年前期の単身者の割合は、男性の低収入者で高く、5割近く(48%)に及ぶ。

壮年後期では「まったくない」の割合は、男女とも壮年前期より低くなる。また、若干ではあるが、男性は収入区分が下がるほど「まったくない」が高くなる。

(2) 非正規職・失業中

このグループに属するのは、「今は無職で求職活動をしています。システムエンジニアの仕事は選ばなければいくともありますが、日曜もなかったりして大変な仕事でしたので、今度は介護の仕事に就きたいと思っています。」(30代、男、無職)のように、現在失業中か、非正規職に従事するかのいずれかの人たちである。

●暮らしぶり

調査回答者の中にはスポーツジムに通っている人も少なからずいた。ただ、収入面では基本的な生活を送るうえでぎりぎりか、かなり厳しい状態にあり、生活保護の一手手前の人も少なくない。

●結婚観

一人である理由や結婚については、「結婚はしたいと思いますが、できる確率は低いです。仕事がアルバイトなので、収入の面からも結婚は難しいかなと

いう気持ちがあります。」(40代、男、アルバイト)、「若いころから絶対結婚しないと言っているので、親も諦めていますし、今も全く結婚する気はありません。」(40代、男、非正規)など、否定的な意見が多い。また、「独身主義ではなく、気付いたらこの年になっていました。たまたまいい人が見つかりませんでした。」(40代、女、アルバイト)という声もある。

●つながり

「社縁」がないか非常に薄く、「友人はいないので、どこかに出かけるとか、遊ぶことは全くありません。」(40代、男、アルバイト)など、友人関係のつながりも弱い人が多い。近所づきあいもない人が多いが、例外的に「近所の方はみんな親切です。消防団に入り活動していました。」(40代、女、無職)のように、住民同士仲がよい地域もある。地域とつながりを持たない場合、親族関係のつながりの低下により社会的孤立へとつながる可能性が高くなる。

長時間労働が原因で体調を崩し、他業種で求職中

【事例 12】 Lさん(30代後半、男、無職、未婚)

Lさんは、新宿区出身である。以前はコンピューター会社でSE(システム・エンジニア)をしていたが、土日もないほど仕事が忙しく、体調を崩してしまった。体調を崩しても働き続けたが、当然のことながら健康時のようには働けず、会社からはパフォーマンスが悪いとみられ、辞職することになった。

現在は求職活動中である。仕事を選ばなければSEの求人はあるが、体調を崩すほど大変な仕事であるため、今度は介護職に就きたいと考えている。現在、そのための職業訓練も受けているところである。

仕事を辞めてからは、貯金の切り崩しで生活をしている。生活保護を受けたいと思い、区にも相談に行ったが、なかなか難しい。現在のアパートには風呂がないので、銭湯やフィットネスクラブに行って入っている。普段はインターネットで

ユーチューブやフェイスブックを見たり、テレビを見てくつろいでいる。

一番困っているのは再就職に関することである。自分に条件の合った仕事を見つけることが難しい。介護の仕事は泊まりがけの仕事が基本で、それを選ばないと採用の確率が低くなるが、前職で体調を壊してしまったため、最初から長時間で働くことには躊躇してしまうからである。

同じ区内に両親と兄弟がおり、とても仲が良い。最低でも週に1回は顔を見せるようにしているが、Lさんの現状をととても心配してくれている。また、新宿区生まれのLさんには昔から仲良くしている友人もいて、現在も近くに住んでいる。

結婚については、まずはきちんとした職に就いて経済的に安定してからでないと考えられない。結婚して新宿区に住みたいが、住むためにはよい収入がなければならないとも感じている。

高い賃金を求めて上京するもアルバイト生活、友人はまったくいない

【事例 13】 M さん(40 代前半、男、配送業アルバイト、未婚)

M さんは首都圏外出身で、学校卒業後、地元で 5 回ほど転職したが、どの仕事も自分に合わず辞めてしまった。地元の会社は業績が悪かったり、最低賃金が低いので、賃金が高く求人も多いとの期待から上京してきた。

上京当初は派遣社員として工事現場の仕事に就き、その後、現在の配送業に就いた。アルバイトではあるが、国民年金と国民健康保険の手続きはできるので、特に不自由に感じていない。また、敢えて正社員になろうとも考えていない。ただ一方で、個人起業が週末起業をしてみたいと思っており、公的機関などに支援や相談窓口がないか探しているところである。

休日は、家で録画しておいたアニメを見るか、

古本屋に行くぐらいである。友人はいないと言い切る。どうせ裏切られるので、生きている間は絶対に友人を持つことはないだろう、一人でいるほうが、身近に信頼できない人がいるよりもいい、と考えている。

結婚については、今まで誰ともつきあったことがなく、自分に結婚をしたいという願望があっても、これまでの自分の感覚から、恐らく出会いはないだろうと予想している。

健康を考えて朝と夜は自炊をしている。まれに外でできあひ品を購入してくることもあるが、外食はほとんどしない。また、健康のためというわけではないが、家での筋力トレーニングはかかさず行っている。

飲食店のアルバイト掛け持ちからの収入と貯金の切り崩しで生活

【事例 14】 N さん(40 代後半、女、飲食店アルバイト、未婚)

N さんは、23 区内出身で、昔から馴染みのある新宿区に手頃な物件が見つかったため転入してきた。猥雑さも含めて多様性のあるところが新宿区の魅力であるという。

現在は、飲食店のアルバイトを昼と夜の二つ掛け持ちして生活している。シフト制で土日は休みである。最初の仕事は正社員であったが、その後派遣社員として 20 年近く働いた。その後、リストラされ、失業保険をもらった後、アルバイトでの生活を送っている。

失業後、正社員を目指して就職活動を行っていたが、正社員の募集が少なく、その希望は叶わなかった。現在でも機会があれば正社員になりたいと思っている。

現在はアルバイトによる収入と貯金の切り崩しで何とか生活している。時給の割には重労働であるため、いつまで続けられるか不安に感じている。

結婚していない最大の理由は、一人の気楽さに慣れてしまったためである。独身主義を貫いているわけではなく、たまたま縁がなく、気づいたらこの年齢になっていた。ただ、リストラで仕事を辞めた後、急に時間ができてしまって、不安、孤独、寂しさを覚えた。

健康に関しては、これまで病気で困ったことはないが、昼はまかないを食べて夜はなるべく自炊を心がけている。また、スポーツジムは、風呂とサウナのために行っている部分もあるが、毎日行くようにしている。

昔は友人と一緒に出かけることもあったが、最近はその機会も少なくなってきた。これまで具体的に考えたことはないが、万が一の際には、都内に兄弟が住んでいるので、恐らく頼ることになるだろうと考えている。

(3) 生活保護

このグループに属するのは、生活保護を受けている人たちである。会社関係、友人関係のつながりがなく、事情により親族関係のつながりがほぼないか、あったとしてもかなり浅い人が多い。「仕事を求め、首都圏外から新宿区に転入してきました。」(40代、男、無職A) との声に代表されるように、仕事を求めて上京し、路上生活をしていたところ生活保護申請を勧められた人も少なくない。新宿の地名度、地方に比べて仕事が多くあることへの期待、路上生活をするに対してレッテルを貼られにくい環境があることなどが、その背景にあると考えられる。

●暮らしぶり

また、「精神的な病気と心臓に病気を抱えています。」(30代、男、無職) との声もあるように、健康に何らかの問題を抱えている場合も少なくない。食事は、コンビニやできあいの弁当への依存度が高く、人間関係にトラブル(恐怖心、トラウマ)を抱えていて、困ったときに頼る人がいない人も少なくない。

●結婚観

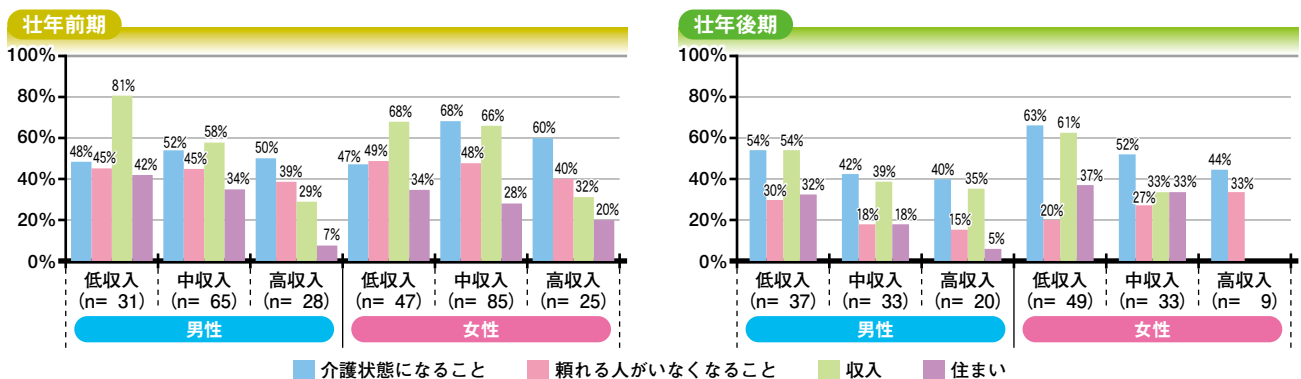
一人でいる理由や結婚に関しては、「いずれ社会復帰できたら、再婚したいという願望はあります。体が良くなって、仕事ができるようになり、またパートナーが見つければ最高ですね。」(30代、男、無職)、「今後も、風呂付の部屋に移るなど、生活を建て直してからでないと結婚は考えられません。」(40代、男、無職B)、「私はわがままで人と一緒にいると煩わしいと感じるので、結婚生活が続けられないと思います。」(40代、女、アルバイト) など、まずは自分自身の生活面の安定が優先事項であり、結婚を考える余裕がない様子が見ええる。

●つながり

家族とのつながり、友人や社縁もなく、病気で働くことも難しいため、現時点での社会的孤立度は高めである。生活を安定化させるにはまず、人間関係、健康状態を改善する必要がある。それらの改善が見込めない場合、将来の社会的孤立度はさらに高くなる。

●●●●●●●● 単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ⑧ ●●●●●●●●

Q32-1 高齢期の生活で不安を感じること



壮年前期の単身者が高齢期の生活で不安を感じることは、男女とも低収入者では「収入」が最も高く、男性約8割、女性7割近くに及ぶ。「介護状態になること」と「頼れる人がいなくなる」の割合も男性は低中収入者では各5割前後と高く、女性もほぼ同様であるが、中収入者では「介護状態」が68%と

高くなる。
 壮年後期の単身者では、男性と女性の低収入者は「収入」と「介護状態になること」の割合が高く、さらに低収入者では「住まい」が男女とも3割台と高くなっている。

地元で経営していた居酒屋が経営不振、上京しホームレスに

【事例 15】 Oさん(40代後半、男、無職、未婚)

Oさんは、首都圏外で居酒屋を経営していたが、近くの工場が閉鎖されて客足が落ちるなど、不景気のおりを受けて経営不振に陥り、閉店を余儀なくされた。その後、他の仕事を探したが、求人中心は介護職で、自分の条件に合うものがなかったため、仕事を求めて新宿区にやって来た。

上京時はネットカフェや野宿できる場所を調べてきたが、手元には現金2万円しかなかった。野宿をしていたところ支援団体から声をかけられて、生活保護を受給することになった。

親族関係に関しては、父親はすでに他界し、母親が実家に住んでいる。兄弟姉妹や付き合いのあ

る親類はいない。母親も生活保護が申請できる生活水準であるが、世間体を気にして申請していない。母親とは時々連絡をとっている。

健康に関しては、重度の不眠症を抱えており、仕事が翌日に控えていると緊張で眠ることができなくなる。現在は無職であるが、誰かと約束をしていない日であっても短時間しか眠ることができない。

このように重度の不眠症を抱えていて、結婚について考える余裕がないため、結婚願望はそれほど強くない。また、万が一病気になっても、世話を頼める人は一人も思い浮かばない。

様々な職を転々とした後、不定期の仕事と生活保護で生活

【事例 16】 Pさん(40代後半、女、アルバイト、未婚)

Pさんは、20歳頃までは首都圏外にいて、その後仕事を求めて上京した。

20代の頃から心のバランスを崩すことのあるPさんは、障害者手帳を所持している。これまではホテルの清掃員や仲居、交通誘導や建設現場のガードマンなど様々な仕事を転々としてきた。現在は、生活保護の助けを受けながら、週1日程度で交通誘導等の不定期の仕事が続いている。それらの収入を合わせて生活はなんとかできてはいるが、一部を貯金に回すほどの余裕はない。

親族関係とのつながりを見ると、地元で母親と弟がいる。しかし、弟とは、父親が亡くなり、相

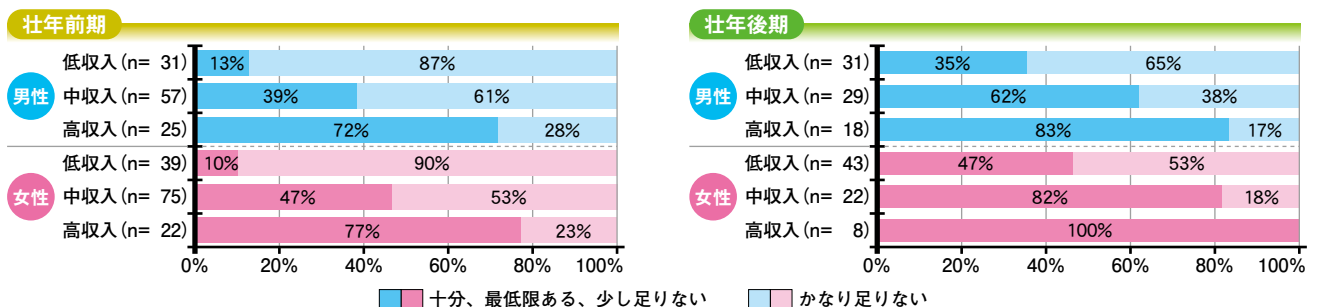
続を巡ってもめて以来関係が冷え切っている。また、生活保護を受給していることへの後ろめたさから、母親との連絡も電話のみである。

新宿区は、賑やかなところと治安もそれほど悪くないところが気に入っている。

親しくしている人は特にいない。強いていえば、互いに推理小説を貸しあう隣人がいる。Pさんにとって、人と一緒にいることは煩わしく、結婚や同棲などの共同生活を営むことには抵抗がある。その一方で、一人暮らしであるがゆえの孤独死への不安があり、年齢、性別にかかわらず、親しい友人がほしいとも思っている。

単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ⑨

Q33 高齢期への経済的な備え



高齢期への経済的な備えが「かなり足りない」という壮年前期の単身者の割合は、男女とも収入区分が下がるほど高くなり、低収入者では9割程度(男性87%、女性90%)にもなり、高収入者の2割台と

は対照的である。

壮年後期の単身者では、「かなり足りない」は男女とも収入区分が下がるほど高い割合となり、男女とも半数以上(男性65%、女性53%)を占める。

4. 壮年後期(50～64歳)の生活像

4-1 生活安定層

(1) 男性

生活が安定している壮年後期の男性は、会社勤めや経営者、専門的資格者など一定の安定した収入のある人たちである。

●暮らしぶり

「会社を辞めてからは、アパート経営と株の配当で生計を立てています。」(50代、男、アパート経営)、「今は年金と給与で暮らしています。持ち家ですし、蓄えや親が残してくれたものもありますので、老後のお金の心配はしていません。」(60代、男、嘱託職員)など、会社勤務以外で収入を得ている人もいる。

●配偶関係・結婚観

50歳を過ぎると、離婚や死別を経験している人や、結婚という公的な制度に縛られず、事実婚やパートナー関係などの緩やかな関係を築いている人など、婚姻状況は多様になってくる。

ヒアリング回答者の一人でいる理由、結婚に関しては、「会社勤めのときは、2、3年ごとに転勤があったので、結婚を考えられませんでした。今後は、縁があれば結婚したいと考えています。」(50代、男、ジャーナリスト)、「若い頃から、結婚は時間の無駄なので、結婚する意向はありませんでした。今後もそれは変わりません。」(50代、男、大学教授)、「独身主義ではないので、自然に結婚の流れになったら結婚したかもしれませんが、お互いにタイミングが合わなかったのだと思います。50歳くらいから、一から関係を築くのが面倒臭くなってしまいました。」(60代、男、嘱託職員)、などの声がある。

●つながり

親族関係、友人関係、会社関係のいずれのつながりも強く、いずれか一つのつながりが弱い場合も、それ以外が非常に強いため、深刻な問題とはなっていない。ただし、女性に比べて男性の場合、「一人だと内にこもってしまって、人と話す機会がありません。」(60代、男、嘱託職員)など、自ら積極的に動かず、社会的に孤立しがちな姿もうかがえる。

●情報サービス業

特筆すべきは、壮年前期にも多かった情報サービス企業に勤務する人たちである。例えばシステムエンジニアの場合は、様々な企業に出向いて仕事を行うため、どこへ通勤するにも便利な場所として新宿区を選択している。「今までは土日でも仕事をして仕事一筋できました。体がボロボロになってしまいそうなので、ここ3、4年はなるべく早く帰るようにしています。」(50代、男、システムエンジニア)との声があるように、産業の性質上、長時間労働は常態化している。

そのため、一人でいる理由、結婚観も、「仕事の忙しさもありますが、縁もなかったもので、結婚せずにきたのだと思います。」(50代、男、システムエンジニア)と、出会いの機会の少なさを指摘している。

こうした企業に勤める人々は、他の会社への派遣が多いことから、友人関係、会社関係とのつながりが比較的浅く、唯一強いと考えられている親族関係のつながりがなくなると、社会的孤立は高まる可能性がある。また、健康上の問題を抱える人も少なくない。したがって、現時点で社会的に孤立してはいないが、つながり次第では将来的に社会的孤立度が高まる可能性は高い。

会社勤務の管理職 SE を辞めてフリーに、プライベートを充実させたい

【事例 17】 Q さん(50 代後半、男、システムエンジニア、未婚)

Q さんは、小学生の時に家族で新宿区に転入してきて以来、新宿区民である。

最近まで会社勤務の管理職 SE（システムエンジニア）であったが、現在は退職してフリーの SE である。SE の仕事はプロジェクト単位なので、プロジェクトが発生すると仕事生まれる。基本的に契約によってそれらの仕事を引き受けるといって変化はあったが、顔見知りが多い中での仕事である。ただ、現在の収入は安定しているが、フリーランスであるため、継続的に仕事の契約ができるかどうかは約束されていない。

これまでは土日もなく仕事一筋できたが、ここ最近はその生活を反省し、土日は仕事をせず、社交ダンスや写真など、プライベートを充実させ

るようにしている。

新宿区は小さい頃から馴染みのある場所であるため、近所に友人がたくさんいる。商店街の会長や地域活動で中心となっている人々は皆、自分と同世代である。近所から認識されているので恵まれていると感じている。

仕事の忙しさから良い縁がなく、持病もあるため、これまで結婚には消極的であった。現在異性の友達はいるが、必要な場合には連絡が取れ、会うこともできるので、お互いに結婚までは考えていない。一人暮らしは楽で自由を満喫している。普段の生活で困っていることは特にないが、孤独死に関しては少し不安を感じている。

定年退職後嘱託職員として勤務、一人でいると内にこもりがちに

【事例 18】 R さん(60 代前半、男、嘱託職員、未婚)

R さんは会社を定年退職後、同じ会社に嘱託職員として勤務している。兄弟はおらず、一年前に母親を亡くしてからは、一戸建てに一人で犬と暮らしている。現在は、年金と会社からの収入で暮らしており、貯えも十分にあるので、老後の心配はしていない。

R さんは、自分自身を、つきあいが上手くなく、地元で友人が少ない人間であると考えている。その反面、一人でいると人と話す機会がなく、内にこもりがちになることを心配している。困りごとがあるときには、同じ区内に住む親友に相談に

のってもらっている。

結婚に関しては、独身主義ではなかったが、若い頃から結婚を意識してつきあったことはなかった。同世代の友人が結婚したり子どもを持っても、焦ることはなかった。50 歳頃からは、一から関係を築くのが面倒くさくなったと感じている。

孤独死など高齢期に起こりうる問題について具体的に考えてはいないが、将来は、現在住んでいる家を売り、老人ホームに入るなど、専門家に相談しながら計画を立てておこうとは思っている。

(2) 女性

生活が安定している壮年後期の女性は、一定の収入を得ている人たちであり、企業に勤めて高収入を得ている人や資格を生かした仕事をしている人、経営者など様々である。

●暮らしぶり

住宅は持ち家（一戸建て、分譲マンション）の人が多く。「新聞社の管理職をしています。今までのキャリアもありますし、元気なうちはやっぱり働きたいと思います。」（50代、女、新聞社）と安定的な収入があるため、暮らしぶりに余裕がある人がいる。一方、「国の給付金でやっている事業で、給料が決まってしまうので、もう少し経済的にゆとりがあったらいいなと思います。」（50代、女、障害者施設）など、より豊かな暮らしぶりを望んでいる人もいる。

●結婚観

一人である理由、結婚に関しては、「伴侶に対して何を求めるかは人によって違いますが、身の回りの世話をしてほしいから結婚したいという男性の話を

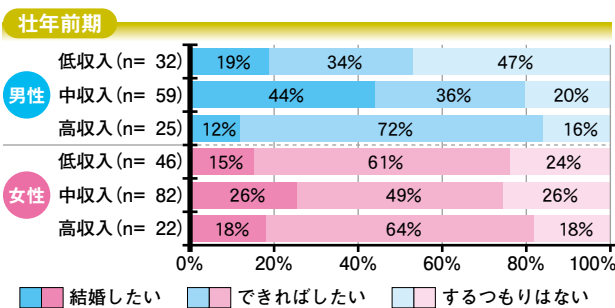
聞くと、自分のことは自分でしてほしいと思ってしまいます。」（50代、女、障害者施設）、「離婚した後、今はパートナーがいるのですが、お互いの親が生きている間は再婚しないと思います。」（50代、女、マンション経営）、「結婚しなかったのは、強い意志があったわけではありませんが、たまたま縁がなかっただけです。今後、結婚する気はありません。」（60代、女、学習塾経営）など、消極的な意見が多い。

●つながり

親族関係、友人関係、会社関係のいずれのつながりも強く、いずれか一つが弱い場合であっても、「何かあったときは、頼りになる近所の友人が何人かいます。」（50代、女、マンション経営）というように、それ以外の非常に強いつながりがある人が多い。そのため、現在の社会的孤立度は低く、将来孤立する兆候もみられない。フリーランス、自営業の場合でも、会社という組織を通じたつながりはないが、同業者との間に緩やかに独自の個人的ネットワークをつくっている人もいる。

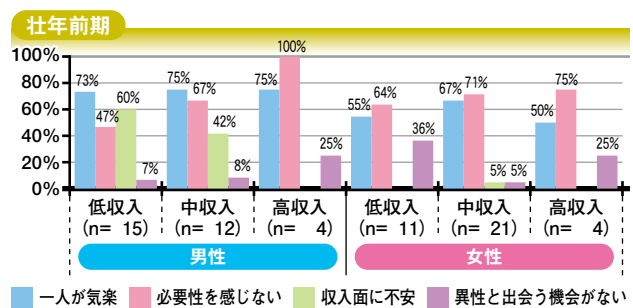
単身世帯意識調査結果(壮年前期・後期 男女・年収別) ⑩

Q36-1 結婚意向



壮年前期の男性単身者の低収入者の4割半ば（47%）が「結婚するつもりがない」と答えている。一方、男性の中収入者は44%が「結婚したい」と答え、男性の高収入者と女性は「できれば結婚したい」が最も高い。

Q36-3 結婚しない理由



結婚するつもりがないと回答した人の理由は、男女とも「一人が気楽」もしくは「必要性を感じない」が最も高い。「収入面に不安」は、男性の低収入者で6割、中収入者で4割超を占めるが、女性はほぼ皆無である。（※回答数が少ないことに注意）

会社の管理職として忙しいが、近所づきあいなど、つながりも豊富

【事例 19】 S さん(50 代前半、女、新聞社、未婚)

S さんは新宿区生まれである。大学卒業後新聞社に勤務し、現在までずっと同じ職場である。

20 代、30 代の頃は非常に忙しく、仕事と家との往復だった。定年の 65 歳までは正社員として働くことができるので、元気なうちは働き続けたいと考えている。

新宿区は生まれた場所であるため馴染みがあり、生活しやすい場所であるとも感じている。小中学校は教師のレベルが高く、大きな病院が多く、コンビニも多く、教育、医療、生活すべてにおいて便利である。

S さんは独身だが、長いつきあいのパートナーがいる。また、妹とその息子が同じ区内にいますので、甥の学外活動を通じて地域活動に参加するようになり、その結果、地域のネットワークが広がってきた。

数年前から同窓会も開催されるようになった。同窓生の中には、S さんのように独身の人から離婚や死別を経験している人までいて、いわゆる標準世帯は少数派である。同窓生とは、定年退職後もお互いに助け合っていこうと話をしている。

ワンルームマンションの管理人で、地域活動にも積極的に参加

【事例 20】 T さん(50 代後半、女、マンション経営、離別)

T さんは、新宿区生まれである。現在はワンルームマンションを経営している。管理人として、ゴミ出し、必要箇所の修理など、マンションの維持管理に努めている。T さんが長く住む西新宿のあたりは、意外と下町的な雰囲気が残っているところであり、地域の人々のつながりも比較的強いと感じている。

毎月賃料収入があるため、経済的には安定した生活を送っている。高齢の母親が同じマンションに住んでおり、また近所には叔母もいて、支援が必要な

時には手を差し伸べてくれる。兄がいるが、相続問題でもめてからは疎遠である。近所の人とも親しくしており、T さんが病気になった際にも手伝ってくれ、万が一の際にはお願いできる仲である。

知識の向上に努めたり、地域活動にも積極的に参加している。例えば、大学や区主催の市民講座などに通い、興味を追求している。また、できる限り自分で自立して生活していくために、ジムにも 1 日 1 回通って健康管理に気を配っている。

塾経営をとおして、同業者やパート職員とつながりを育む

【事例 21】 U さん(60 代前半、女、学習塾経営、未婚)

U さんは首都圏外出身で、大学入学を機に上京して以来一人暮らしである。大学卒業後、企業に入社し、その後、学習塾を開設した。

教室の経営には定年退職がない。また、肉体的に辛さもない。仕事を続けることが健康な証拠と考えている。近所には同業者が多く、お互いに競合者ではあるが、情報を共有したり、食事を共にする良き仲間でもある。また、U さんの教室を手伝うパート職員の人たちとも親しくしており、人に恵まれた環境にあると感じている。

東日本大震災は、地域づきあいの重要性を認識する機会となった。それを機に、近所づきあいに

も積極的に関与するようになった。マンションの理事会や親睦会、町内会旅行などにも参加している。顔見知りが増えることで、災害時や困った時に助け合いが行いやすくなると考えている。

これまで独身を貫いてきたため、子どもや孫など、身内でつながっている人がいないことには多少不安を感じている。孤独死についても不安はある。その一方で、実家に住む義姉と甥とは、頻繁に連絡をとっているわけではないが、親しくつきあっており、何かあった時にお願いすることはできる。甥にいたっては、U さんの最期の面倒をみると言ってくれている。

4-2 生活不安定層

(1) 男性

生活に不安定な壮年後期の男性は、非正規職や個人事業者、無職や生活保護の人である。「データベースのソフトを、お客様に合わせてカスタマイズするという会社を、20年近く前に立ち上げ、自宅で仕事をしていました。ただ、歳も歳ですし、いちいちプログラムを作るのも面倒臭くなって、今はあまり仕事はしていません。」(50代、男、無職B)、「IT業界では、サイトを作ったり、アフターフォローをしたりして、1年半前まで給料をもらっていました。今はその都度報酬をもらっています。」(60代、男、臨時職)、などである。

●暮らしぶり

「仕事をして少し貯金ができたら失業し、新しい仕事に就けたと思ったらまた仕事なくなる、といった生活を送ってきました。」(50代、男、無職A)、「安定した収入がないので、実はここ2年くらい家賃を全く払っていません。」(60代、男、臨時職)や「日本は、特に年をとったクリエイターがクリエイティブな仕事をするのに厳しい環境です。こういう仕事は定年がないので、体さえ許せば続けていきたいとは思っています。」(60代、男、設計事務所経営)など、厳しい状況がうかがえる。

自営業の傍ら年金を繰り上げて受給している者もいる。若い頃の収入が不安定であり、年金を納めていなかった人は、将来の生活に漠然とした不安を抱いているようだ。

●結婚観

一人である理由や結婚については、「自分一人食べていくのに精一杯な状況でしたので、今も結婚について考えることはありません。とにかく、生活保護

から早く抜け出して、最低限の生活を送るのが希望です。」(50代、男、無職A)、「外出する機会が少なくなり、女性と出会う機会は年とともに減っていきます。」(60代、男、設計事務所経営)という声がある。

●つながり

つながりの度合いを見ると、親族関係、友人関係、会社関係のいずれのつながりもほぼ皆無である。また、「親とは絶縁状態ですね。そういう状況だから生活保護を受けることになっているのだと思います。」(50代、男、無職A)に表されるように、最終的に頼りとなるべき親族との関係にトラブルを抱えているケースが多く、いざという時に頼る人がいない人も多い。

ただ、その一方で、「仕事の入らない時は、夜間のパトロールや近所のお祭りの手伝い、古紙回収などの町会・自治会のボランティア活動をしています。」(50代、男、無職A)や「施設に入っているので、今のところ日常生活で困ったことは見つからないですね。ご飯もおいしく食べられ、外出も自由ですので、神田川沿いに出かけることができます。なるべく長く今の生活を続けたい気持ちがあります。」(50代、男、無職C)という声が表すように、厳しい生活を送る生活困窮者の中には、自分なりの楽しみを見つけたり、これまでつながることのなかった人との出会いを求めている人もいる。

以上が示すように、若い頃から就労形態が不安定であったため、社会的孤立度は高めである。将来については、社縁がないため、親族関係、友人関係のつながりの有無や強弱によって、社会的孤立度が高まる者と高まらない者に二極化することが考えられる。

派遣・契約社員として職を転々とした後、生活保護受給者に

【事例 22】 V さん(50 代前半、男、無職、未婚)

V さんは、現在、生活保護を受給中である。首都圏外出身で、学校卒業後、数年間サラリーマンとして勤務後は、製造業や建設業の派遣社員や契約社員として職を転々としてきた。

製造業や建設業は景気に左右されるため、景気が悪化すると全く仕事がない時もあるなど、生活は不安定であった。新宿区に住民票を置き、仕事の関係で全国各地に出張した。失業すると貯蓄で食いつなぎながら次の仕事を探し、新たな仕事に就けたと思ったらまた仕事なくなる、といった生活であった。ひどい時には給料を踏み倒されたり、身銭を切って仕事をするということもあった。

現在のように長期失業することになったのは、リーマンショックの影響である。海外向けの産業機械製造会社で働いていたところ、リーマンショックに端を発した世界不況によって受け入れ先の企業の業績が悪化し、契約終了となった。現

在は、週 1 日程度仕事をしながら、生活保護の支援を受けている。生活保護はあくまでも一時的な避難と考えているが、次の仕事がなかなか見つからず、そこからの脱却は容易ではない。

その一方で、失業後、近所をぶらぶらしていたため顔見知りが増え、町会活動に誘われるようになった。仕事のない時には、夜間のパトロール、近所のお祭りの手伝い、古紙回収など、町会・自治会のボランティア活動を手伝っている。忙しい仕事から解放されたことがあって、地域との付き合いを深めるきっかけとなった。

このように自分の生活で精一杯な状況であったため、結婚について考える余裕はなかった。現在もそうした状況に変わりなく、生活保護から早く抜け出して、自立した生活を送ることを望んでいる。

IT 業界に長く勤めた後、知り合いからの仕事で生活しているが生活は不安定

【事例 23】 W さん(60 代前半、男、臨時職、離別)

W さんは首都圏外出身で、IT 業界に長く勤め、業界の知り合いに誘われて上京した。それに合わせて、住所も新宿区を中心に都内を転々としてきた。IT 業界の知り合いからの依頼により、ウェブサイト作成やそのアフターフォローをしてきた。タレントとして、再現ドラマの端役として出演したこともある。報酬は、仕事の依頼の都度もらっている。

このように収入が不安定なので、ここ 2 年ほど家賃を滞納している。そのため最近、より安定的な収入の仕事求めて、時間を見つけてハローワークに通っている。

一人っ子で育った W さんにとって、一人でい

ることは特に寂しいことではない。加えて、新宿区は、誰からも干渉されることがないので、一人で暮らしやすい場所であるとも感じている。その一方で、実家に要介護 1 の母親を一人残している。今後介護度がさらに進展した際にどう対処するかが悩みの種である。

仕事のない日は、行きつけのカフェや食事処など、人が多く集まる場所へ出かけることを楽しみとしている。タレント業をとおして知り合った人とも時々会っている。

料理が得意なので、食事は昼は行きつけの店で外食するが、夜はほぼ自炊である。

(2) 女性

生活が不安定な壮年後期の女性は、個人事業者、非正規労働に従事する人、失業中の人などである。具体的には、「去年退職して現在は無職、職探し中です。今は失業保険をもらっていますが、12月までで支給が終わってしまいます。」(50代、女、無職)、「郵便物の仕分け作業のパートを週4日しています。」(50代、女、パート)、「収入はわずかですがネットショップ経営の仕事をしています。」(60代、女、ネットショップ経営)、などである。

●暮らしぶり

「人生設計としては、60歳以降は働きたくないと思っていましたが、年金だけでは生活できないので、働かざるをえません。」(60代、女、ネットショップ経営)と、厳しさを訴える声がある。

その一方、現在の生活については、「生活の余裕はありませんが、今の収入でもなんとかやりくりできています。生活にかかる費用は家賃と食費ぐらいなので、現在の仕事を続けていられれば生きていくことができます。」(50代、女、パート)、「生活していれば十分だと思うので、お金はそれほど必要ありません。お金に余裕があればもっと食べ物にお金をかけたいですが、お金がないからといって気になりません。とにかく自由な時間があるというのが、自分にとって一番いいと思います。」(60代、女、無職A)のように、質素ではあるが、現在の生活に満足している人も少なくない。

●結婚観

一人でいる理由、結婚に関しては、「縁がなく、一人のほうが気楽なので、特に誰かと付き合うこともありませんでした。一人のほうがいいと思っていて、結婚にも興味がありませんでした。」(60代、女、ネットショップ経営)、「結婚については、どうなるか全くわかりません。結婚しようと思っていたときは、仕事の方が楽しかったというのが理由だと思います。」(50代、女、無職)、「子どもが欲しいわけではなかったので、再婚は考えませんでした。再婚を考えるよりも、一緒に食事をしたり、話をしたりする人がいればいいと思います。」(50代、女、パート)との意見がある。

●いざという時の対応

「孤独死は仕方ないと思っています。仕事をしているうちは、会社に来なければ気づいてもらえますが、辞めた後は気づかれないだろうと思います。」(60代、女、ネットショップ経営)との声がある。

●つながり

「東京には頼れる人がいません。職場の知人にも頼りたくないですし、頼れる人もいません。」(50代、女、パート)、「万が一自分に何かあれば、友人か息子の友人に頼ることができます。」(60代、女、無職B)などの声がある。近所づきあいもほとんどない。よって、兄弟や子どもとのつながりの有無や強弱によって、社会的孤立度が高まる可能性がある。

職を転々とした後パート収入で生活、高齢期の一人暮らしが不安

【事例 24】 Xさん(50代後半、女、パート、離別)

Xさんは首都圏外出身で、高校卒業後、上京して就職し、その後、いくつかの職を転々としてきた。現在はパート職員として、週4日、郵便物の仕分け作業を行っている。以前は休日にはあちこち出かけていたが、現在は立ち仕事で体が疲れるため、外出することが少なくなった。家でテレビを見たり読書をしたりしてのんびり過ごしている。

パート収入であるため生活に余裕はないが、主な経費は家賃と食費ぐらいなので、なんとかやり繰りできている。仕事があり、現在の収入を維持できる限り、生きていけると考えている。

親戚が都内にいるが、交流は全くない。また、同じアパートの住人とは挨拶を交わす程度で、近所付き合いはない。一人の時間を大切にしたいので、近隣住民との交流の必要性は感じていない。一緒に食事をしたり話をしたりする人がいればいいと思うが、そういう人がいても籍を入れる必要はないとも考えている。

高齢期のことを考えると、東京で一人暮らしを続けることに不安を感じている。将来的には実家に帰ることも念頭に置いている。健康維持のために特別な運動はしていないが、電車に乗るよりも歩いて行動している。

年金を収入源としながら、不足分をネットショップ経営などで補う

【事例 25】 Yさん(60代前半、女、ネットショップ経営、未婚)

Yさんは、新宿区出身である。親の転勤に伴い全国各地を転々とした後、昔から馴染みのあるこの地に戻ってきた。現在は新宿区に分譲マンション住まいである。

長らくフリーランスのデータ入力の仕事をしてきたが、現在は辞めて、ネットショップの運営を主に行っている。ネットショップは迅速に発送の対応をしたり、商品の掲載を頻繁に行わなければならないなど、フォローアップに手間がかかる。朝早くから夜遅くまで作業をしている。自宅できるところがよい点であるが、少額の商品が中心であるため、お小遣い程度の儲けである。

現在、主な収入源は年金である。人間いつ死ぬかわからないと思い、前倒しで60歳から受給している。自らの人生計画では60歳以降は働く予

定ではなかったが、年金だけでは税金とマンションの管理費を賄うことができないので、働かざるを得ない状況である。

つながりに関していえば、新宿区出身ではあるが、引越したことによって当時の知り合いとのつながりも途絶えてしまった。居住先マンションでは、分譲賃貸や事務所の割合が高く、交流は全くない。ただし、自分自身の安全のためにも、マンションの警備員には声をかけて名前を覚えてもらうようにするなど、顔見知りとなるように努力をしている。

一人暮らしは病気になったときのことだけが心配だが、普段は気楽である。子どもがいない分、リタイア後は動物や途上国の子どもの支援など、ボランティア活動に時間を費やしたいと考えている。

5. 高齢期(65歳以上)の生活像

5-1 生活安定層

(1) 男性

生活が安定している高齢期の男性は、厚生年金など安定した収入がある人が多い。「働けるうちは仕事を探して働くと思います。働いていれば、いろいろなことを忘れられます。生活は年金と現在の職場の給与所得があるので、心配はありません。」(70代、男、鉄道整備会社)、「収入は厚生年金があるので、問題ありません。」(70代、男、無職)など、生活するのに十分な厚生年金があったり、専門的な仕事に従事していたり、預貯金がある人たちである。

●暮らしぶり

定年まで勤務し、厚生年金があり、住居は持ち家一戸建てか分譲マンションの人が多い。

この世代は、結婚することが当然であった世代である。そのような世代の特徴を反映してか、男性は、離別、死別により単身者となった人が少なくない。食事に関しては、自炊をしてきた人とそうした生活を全くしてこなかった人の二極化がみられる。

●つながり

「町会長さんが近くに住んでいるので、僕のところへ来てよく相談したり、相談を受けたりしています。」(80代、男、無職)など、つながりの不足を自ら補足していこうとしたり、古いつながりを維持していこうとする動きがみられる。

その一方で、「退職後、一人になった時が不安です。趣味の釣りはお金がかかります。毎日するものではないので、結局やるものがなくなってしまう不安もあります。」(70代、男、鉄道整備会社)と、「社縁」の喪失を不安視する声もある。

●いざという時の対応

「娘に家の合鍵を渡してあります。」(80代、男、無職)など、十分に備えていたり、「不安や心配事は特になく、明るく考えるようにして過ごしています。考えたってどうしようもないですから。」(90代、男、通訳・翻訳業)のように、楽観的な姿もうかがえる。

定年後年金暮らし、国際 NGO やボランティア活動に力を入れる

【事例 26】 Z さん(70代前半、男、無職、離別)

Zさんは60歳の定年までは普通のサラリーマンをしていた。10年ほど前に離婚を経験し、それを機に分譲マンションを購入し、新宿区に転入してきた。

60歳で退職した後、国際 NGO やボランティア活動に力を入れるようになった。そのため、一日中家で過ごすことは減多にない。これらの活動は基本的に無償である。Zさん自身は、厚生年金による収入があるため、生活に困ることはない。

NGO・NPO 活動をとおして、様々な年代の人との出会いがある。そのため、友人・知人の数は

多い。娘と息子とも、頻繁にはではないが、時々連絡を取り合う仲である。ただ、いずれもすぐに駆けつけられる距離にはいないので、万が一の場合には、都内にいる友人・知人を頼ることができる。また、ボランティア活動も、定期的に通っているので、異変があれば、その仲間たちが気づいてくれるだろうと考えている。

現在のところ、健康上の問題はなく、自転車で遠くまで出かけたり、時間のある時にはできる限り歩くようにしている。食事にも気をつけており、玄米中心の自炊を心がけている。

(2) 女性

高齢期に安定した生活を送っている女性は、年金生活で持ち家の人が多い。

●暮らしぶり

「60歳まで契約社員だったので、給料も少ないし年金も多くないのですが、一人で食べるには全然不自由しないし、好きなこともこれからできるなと思っています。」(60代、女、無職)、「遺族年金は少ないのですが、映画が楽しみなので、年金をきちんと使わせてもらっています。」(70代、女、臨時職)、「厚生年金は年々減っていますが、なんとか生活できています。」(70代、女、無職B)、「国民年金と遺族年金をもらっていて、何とかやっています。」(70代、女、無職E)、「60歳まで働いて、後は厚生年金で生活しています。」(80代、女、無職B)など、調査対象者のほぼ全員が持ち家が都営・区営住宅に居住している。経済的には年金だけのシンプルな生活ではあるが、豊富なつながりによって人生を謳歌している。かつて企業に勤めていたり、年金受給まで専門性の高い仕事をしていた人も少なくない。

一人暮らしについては、「図書館で本をたくさん借りて読んでいます。地域で絵手紙やコーラスの活動を楽しんでいます。」(70代、女、臨時職)など、日々の生活を満喫している。

●つながり

「子ども達から電話は1週間か2週間に一回かかてきます。」(60代、女、無職)、「子ども達は自分のことを心配してくれているので、台風や地震のときにもメールをくれます。」(70代、女、臨時職)など、子どもがいる場合、比較的頻繁に連絡を取り合っている。また、子どもがいない人も、「いい友人がたくさんいるので、一人暮らしは寂しくありません。惚れた腫れたは関係なく、男の友達も女の友達もたくさんいます。同窓会も盛大にやります。」(70代、女、無職B)、「団地の人とは顔見知りなので、自分に何かあった時はなんとかなるだろうと思います。」(70代、女、無職F)、「家にこもらず、なるべく外出するよう意識しています。勉強が好きなので、大学で開かれている生涯教育講座に参加しています。」(80代、女、無職A)など、それを補うのに十分な数の友人がいたり、姪、甥など、若い世代とのつながりがある。

さらに、「友人の数は自分では多いほうだと思いま

せんが、地元も含めて親しい友人がいます。広く浅い友人より、信頼できる人、困ったときに助けてくれる人が大切です。」(70代、女、無職C)、「つながりを作るためにも、地域のボランティアに参加して知識や情報を増やしておきたいと思っています。ボランティアをやっているだけで、いざという時に頼みやすいという気持ちもあって、やってみたいと思っています。」(60代、女、無職)など、新たなつながりの構築に努めている人がいる。

●いざという時の対応

「どこか施設に入るのもいいかと思っています。」(70代、女、無職A)、「体が不自由になった場合に備えて、入居できる施設を予約しています。その施設は、退院後であっても費用を支払えば宿泊することができて、身の回りの世話などもしてくれます。」(70代、女、映像制作会社経営)、「特別養護老人ホームに入りたくとも順番待ちがひどいので、将来的にはリバーズモーゲージを使って自宅に住み続けることも考えています。」(70代、女、無職B)、「毎朝、8時半にお互いの安否確認のため、妹と電話連絡することになっています。もし、私と連絡がつかなかったら、妹からケアマネジャーさんに電話してもらおうことになっています。」(70代、女、無職D)、「娘が現在の住まいから徒歩で行ける距離に住んでいるだけでなく、毎日電話で必ず連絡を取り合うことになっているので、いざという時も頼りになります。」(90代、女、無職)など、頼れる人がいたり、そのための十分な準備をしている。

●その他

高齢期という年齢を反映して、軽度の健康上の問題を抱える人もいるが、総じていえば、「親に感謝です。毎日楽しくて、とても幸せです。」(70代、女、無職B)、「一人暮らしをしていて、寂しいと思ったことはないですね。先のことをよくよ考えても仕方がないので、前向きに過ごしています。」(70代、女、無職D)と、生きることに前向きであり、社交性に富んだ人が多い。

現在の高齢期の人々は結婚が当然であった世代であり、そのような世代の特徴を反映してか、配偶者との死別により単身となった女性が多い。

遺族年金で生活、小遣いのためにシルバー人材センターをとおして仕事を

【事例 27】 AA さん(70 代前半、女、臨時職、死別)

AA さんは結婚を機に近隣県から新宿区に転入した。以来ずっと同じ場所に住み続け、夫の死後、家を相続している。

生活のためには遺族年金を受給しているが、暇を持って余すのが嫌で、シルバー人材センターに登録して、選挙の手伝い、公共施設の仕事などを手伝っている。また、70 歳から利用できるバスや電車が無料となるシルバーパスを積極的に活用して買い物などを行っている。このように、充実した毎日を送っている。

区の施設は積極的に活用している。例えば、図書館にはよく通っているし、地域の施設に講師を呼んで、月 1 回程度趣味の活動を楽しんでいる。

日々積極的に動き回っている AA さんは、多くのつながりを持つ。例えば、二人の子どもは AA さんのことをいつも心配してくれており、台風や地震のときなど、折に触れて電話、メールで連絡をくれる。兄弟姉妹も会いたいときに会いにいけ

る距離にいる。まだ必要ではないが、75 歳を過ぎたら、娘に毎日 1 回連絡をしてもらうことを考えている。

また、近所には同じく夫を亡くした人がおり、万が一のために、お互いの子どもの電話番号を交換している。何かあれば、その人が息子に電話連絡をして知らせてくれることになっている。

地域の町内会も団結力がある。古くから住んでいる人はお互いに顔見知りで、消防、掃除、お祭りなどの活動をしている。相続によって若い人も入ってきている。

このように親族、友人・知人と良好な関係を築いているが、万が一の時には、救急車か、隣人か、子ども達に連絡できるので安心である。

唯一の困りごととはといえば、昔建てた家であるため、掃除が辛いことである。2 階の窓の開け閉め、重いものを運ぶ時など、年をとってきたうえ、足も不自由になってきたので大変である。

贅沢はできないが持ち家がありなんとか生活、友人にも恵まれている

【事例 28】 AB さん(70 代前半、女、無職：B、未婚)

AB さんは、小学校の時から新宿区に住んでいる。大学卒業後は、40 代後半で母親の介護で仕事を辞めるまで、商社、外資系の企業などに勤務した。厚生年金は 10 万円に満たない額ではあるが、持ち家もあり、なんとか生活をしている。

将来的には特別養護老人ホームに入りたいが、順番待ちが長いと聞いている。独身で過ごしてきた、誰かに資産を残す必要もないため、リバースモーゲージ（自宅を担保にして銀行などから借入をすること）を活用して、自宅に住み続けることも念頭においている。

AB さんは一人暮らしではあるが、男性、女性

を問わずよい友人に恵まれているため、孤独を感じることはない。同窓会も頻繁に開催している。また、近所との関係も良好で、旅行などで自宅を留守にする際は、近所の親しい人々に挨拶をしてから行くようにしている。こうした関係を築いているため、火事、泥棒、大地震の際にも助け合え、自分の身に何かあった際にも誰かに気づいてもらえるだろうという安心感がある。

AB さんは、毎日が楽しく、とても幸せであると感じており、教育の機会や恵まれた環境を与えてくれた親にとっても感謝している。

公営住宅暮らしでシルバーパスを利用して頻繁に外出、息子との関係も良好

【事例 29】 AC さん(70 代後半、女、無職：E、死別)

AC さんは結婚を機に 23 区内に転入し、夫の死を機に子どもの家から便利な新宿区の公営住宅に転入した。結婚してからはずっと専業主婦であった。現在は国民年金と遺族年金で生活をしている。

一人で行動するのが好きで、映画が好きなので、近隣区など、シルバーパスを利用できる範囲でよく出かけている。家でじっとしていることはほとんどない。

息子からは毎日安否の電話がかかってくるし、少なくとも月に 2 回は AC さんの家に泊まってくる。また、孫が、アルバイトのシフトで遅い時な

どに泊まってくる。さらに、息子夫婦からは、一人暮らしに自信がなくなったらいつでも一緒に暮らそうといわれており、部屋も用意されている。

転入前の地域には長く住んでいたので近所は顔なじみばかりであったが、新宿区には転入して間もなく、大分慣れてはきたが、以前に比べて外出頻度が少なくなった。

とはいえ、隣近所の中でも、カラオケに行ったり、具合が悪くなったら伝え合おうと話す人ができた。また、本当に具合が悪くなった時には、息子、孫、夫の兄弟に頼みごとができると考えている。

クリエイティブな仕事を長年続けてきた人の老後の充実した生活

【事例 30】 AD さん(70 代後半、女、映像制作会社経営、未婚)

AD さんは、新宿区に 40 年以上住み続けている現役の経営者である。印刷物の広告の仕事から始め、現在は、映像制作を手掛けている。新宿区に多いクリエイティブな仕事を長年続けてきた人の老後の充実した生活の姿の一つともいえる。

孤独死するのは悲惨という風潮があるが、一人暮らしの人はそれぐらいの事態を覚悟していくことは当然であって、取り立てて深刻な問題として捉えるのはおかしいのではないかと感じている。体を動かせるうちは、コンサートや映画や展覧会など、自分のやりたいことをやって楽しみたいと思っている。

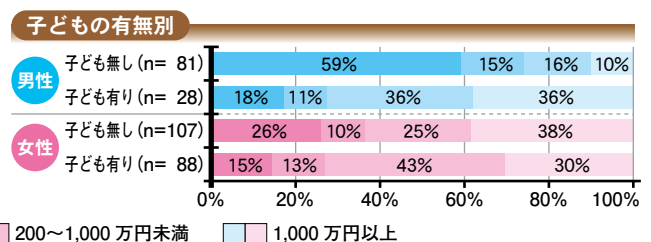
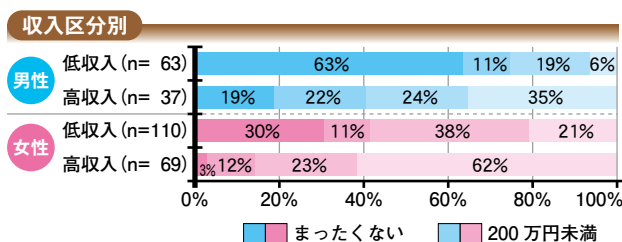
今は一人暮らしだが、家には友人や親戚だけでなく、これまで常に誰かが居候している状態であったため、全く一人で暮らしてきたという実感はない。また、昔からの友人とは、電話をかける

など、連絡を頻繁に取り合っている。親族関係、友人・知人関係、会社関係のいずれのつながりも強く、特に友人・知人関係とのつながりが強いいため、孤独を感じることはない。

将来、体が不自由になった場合に備えて、入居できる施設を予約している。周りに面倒を見てくれる人がいても、入居可能な施設を用意しておけば、お互いが辛くなる前に入居することができる。その施設は、退院後であっても費用を支払えば宿泊することができて、身の回りの世話などもしてくれる。ただ、都心から離れた場所にあるので、馴染みのない場所に移ると、これまでの友人関係を失い、生活基盤が崩れてしまうため、高齢者が継続して住める住宅が区内にもっとあればと思っている。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ①

Q44 預貯金



高齢期(65歳以上)の単身者の預貯金を低収入(年収200万円未満)、高収入(200万円以上)(以下、同じ)の区分ごとにみると、「まったくない」という高齢単身者は、低収入男性の6割半ば(63%)、低収入女性

の3割(30%)を占める。子どもの有無別(連絡をとっていない人は「子ども無し」に含める。)にみると、「子ども無し」の男性の約6割(59%)が、預貯金が「まったくない」状況にある。

手仕事で身を立て、現在は公営住宅に住みながら年金で暮らす

【事例 31】 AE さん(80 代前半、女、無職：A、未婚)

AE さんは、新宿区で生まれ、ずっと新宿区で育ってきた。現在は無職であるが、若い頃に家事と両立できる仕事として仕立て業の開業を紹介され、65 歳までそれによって働いてきた。お客さんは小唄やお茶の先生であり、高齢者が多かったことから、それらの人々の生活から、健康の大切さを学んできた。

現在は、公営住宅に住み、年金で暮らしている。家にこもらず、なるべく外出するように心がけている。勉強が好きなので、大学で開講される生涯教育講座を 30 年ほど前から受講している。

社会と関わりを持ち続けるためには、自分から情報収集をしなければならないと考えており、フェイスブックやツイッターなどの SNS も積極的に活用している。特に、ツイッターは普段からよく利用している。

地域活動にも積極的に参加しており、高齢者支援の講習会に参加して、話し相手のボランティアをしたり、福祉施設のボランティアも長らくしていた。

AE さんの両親はすでに他界しており、兄弟姉妹はいない。両親がなくなったことで、一人暮らしになった。心配ごとがあるとすれば、保証人に関する問題に不安を感じている。今までは、知り合いに謝礼を払い保証人を引き受けてもらっていたが、その人が高齢になってくると負担になり、いつ断られるかという心配がある。

いざという時に備えては、生協の宅配を利用している。自分の身に何かが起こり、外出できなくなったことを考えて、食品も買い込んでいる。健康にも気をつけており、定期的に人間ドックを受けており、数年ごとに脳検査も受診している。

年金で不自由のない生活と教員時代の豊富な人脈による強いつながり

【事例 32】 AF さん(80 代後半、女、無職：C、死別)

AF さんは 62 歳で退職するまで、長らく看護学校の教員であった。新宿区で生まれ、結婚して区外に転出するまで新宿区で暮らしていた。新宿区の実家(アパート併設)に住んでいた姉妹が亡くなったため、実家の管理も兼ねて転入してきた。

夫と死別してからずっと一人暮らしであり、寂しさや不安を感じることはない。誰かというよりも、自分のペースで時間の管理をして生活できるので気楽である。生活に関しては年金があるため全く困っていない。

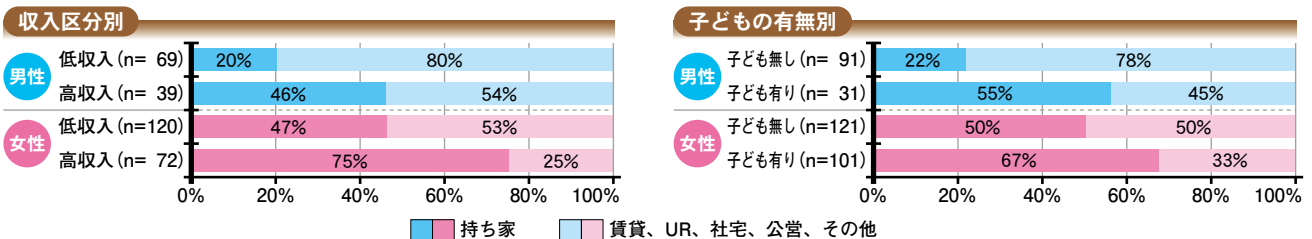
新宿区には帰ってきたばかりで近所づきあいはま

だないが、転居前に住んでいたときにできた友人・知人や、看護学校時代の教え子がたくさんいるため、人脈は豊富である。元の勤務先のスタッフとは家族のような関係で、安否確認のために、毎日電話やメールが来る。弟も二人おり、頼ることができる。また、二人の息子のうち長男は亡くなったが、次男がいる。このように、いざというとき、頼ることのできる人は多く、困ることはない。

食事の時間とメニューはきちんと定め、生活のリズムを崩さないようにしている。また、健康維持のために、なるべく歩くように心がけている。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ②

Q6 住宅



高齢期の単身者が居住する住宅は、男女とも高収入者で「持ち家」の割合が高く、特に女性の高収入者では 75%と 4 人に 3 人が持ち家である。一方、男性の低収入者の 8 割が賃貸住宅に居住する。

子どもの有無でみると、男女とも「子ども無し」で賃貸が多く、特に「子ども無し」の男性の 8 割近く (78%) が賃貸住宅居住者である。

5-2 生活不安定層

(1) 男性

高齢期に生活が不安定な男性は、年金が少ないか、受けられないため、働かざるを得ない人や生活保護の人が多く。「リーマンショック前にも一度収入は下がったのですが、リーマンショック後は売上が月10万円くらい減りました。」(60代、男、タクシー運転手)という人や、テレビ業界、自営業など、景気に影響を受けやすい業界で仕事を経験してきた者が多い。以前勤めていた会社が倒産してから非正規職を転々としてきた人もいる。

●暮らしぶり

年金は、「年金でやっていけないこともないけど、それだけだと食べていだけで精いっぱい生活になってしまうと思うので、働いています。」(70代、男、公園清掃員)のように、無年金であるか、あったとしても生活をするには十分ではない額である。多くの人が生活保護を受給している。

食事については、「自炊をしています。」(60代、男、無職)と健康維持に努めている人がいる一方で、「三食食べたり、気が向かないと食べないで寝してしまうこともあります。ご飯を炊いておかずはコンビニで買って来て、家で食べることが多いです。」(70代、男、無職A)など、不規則になりがちな人もいる。

●つながり

婚姻関係については、「奥さんと別れて一人になりました。」(70代、男、無職B)など、離別の人が多い。子どもはいないか、いても関係は良好ではない。

「両親は他界し、親戚も全くいないので、天涯孤独の身です。身近に家族や友人がいないため、いざという時頼れる人が思い浮かびません。」(60代、男、無職)というように、親族関係、会社関係のつながりはほとんどない。

その一方で、友人関係のつながりの一つとして、「宗教関係の会合に月1、2回は出ています。いざという時は相談に乗ってくれます。」(70代、男、ビル清掃員)のように、宗教法人とつながりを持ち、それが日々生活をする上での心の安らぎへとつながっている人もいる。また、介護支援を受けている場合、「ヘルパーも月4回、家に来ていろいろ手伝ってくれます。」(70代、男、執筆業)のように、ヘルパーとのつながりが救いとなっている人もいる。

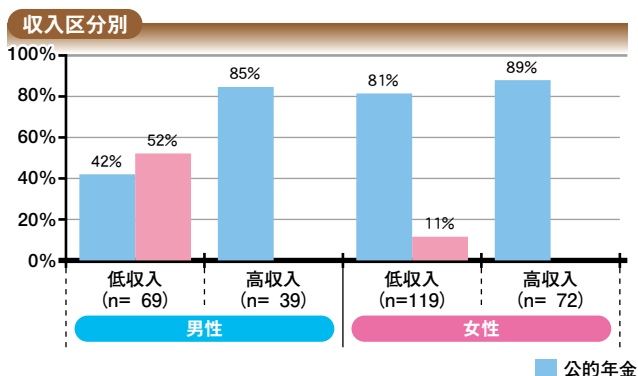
●いざという時の対応

「病気になった時は、兄弟にちょっと来てというくらいなら頼めるかもしれませんが、みんなそれぞれの生活がありますから、迷惑かけられません。」(60代、男、タクシー運転手)など、親族であっても、容易には頼ることはできないと考えている。

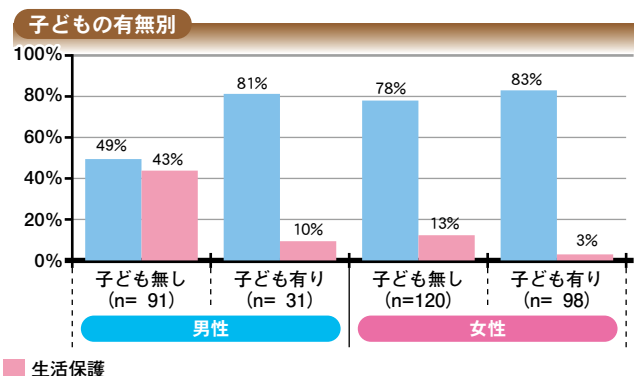
以上のような状況を反映して、誰にも頼ることができないと回答する人がいる一方で、「いざという時のことを考えるだけばかばかしいので、最近はお考えないようにしました。何かあれば、外で倒れていれば誰かが連絡してくれると思います。」(70代、男、無職A)のように、将来、生活への不安感をあえて持たないようにしている人もいる。

●●●●●●●●●● 単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ③ ●●●●●●●●●●

Q43 収入源



高齢単身者の収入源のうち「公的年金」と「生活保護」についてみると、高収入男性と女性では8割以上が公的年金を受給しているが、低収入男性では4割超(42%)しか公的年金を受給しておらず、5割超



(52%)が生活保護を受給している。子どもの有無でみると、「子ども無し」の男性では公的年金受給者は半数(49%)であり、生活保護を43%が受けている。

リーマンショック以降、減少し続ける給料と息子との不仲

【事例 33】 AG さん(60 代後半、男、タクシー運転手、離別)

AG さんは、中学校卒業を機に家族で東京に引越してきた。高校卒業後は印刷会社に勤務したが、印刷業界のデジタル化など、業界が変化し、給与が上がらない中で、子どもの進学を機にタクシー運転手に転向した。しかし、環境変化を受けてタクシー運転手の収入は下がり続け、特にリーマンショック以降は長距離の利用者が減り、収入はさらに大きく減少した。75 歳まで勤務できるが、高齢者が多く、しかも収入は生活保護のそれと大きく変わらない金額である。ただ、稼げる間は稼ぎたいと考えている。

年金は、子育て中にかけていない時期があり、

受給年数が足りないことがわかっている。今の生活のままでは厳しいと感じている。

離婚後、息子 1 人と父子で暮らしてきたが、息子の結婚を機に一人暮らしになった。息子とは、老後の面倒のことが原因で言い争いとなり、それ以降、連絡が取れなくなった。

頼りになるのは、兄弟である。兄弟のほとんどが近くに住んでいて、時々一緒に集まって食事をしたりする。ただし、ちょっとしたことであれば兄弟を頼ることができるが、それぞれの生活があるため、迷惑はかけたくないと思っている。

失業後ホームレスをしていたところ支援団体の紹介で生活保護受給へ

【事例 34】 AH さん(60 代後半、男、無職、未婚)

AH さんは首都圏外出身で、上野でホームレスをしていたところ、支援団体の紹介で生活保護を受給することになり、同時に新宿区に転入した。

大手小売店のバイヤーをしていたが、経営が悪化したことを受けて自己都合で退職した。退職後は上京して、チケットを転売する商売で生計を立てていたが、シネマ・コンプレックスの台頭でチケット販売が成り立たなくなり、見切りをつけた。その後は土木作業員、警備員をしてきたが、リーマンショック後は年齢要因もあり、全く仕事が見つからなくなった。失業後、支援を受けるまで、1 年近く上野でホームレス生活を送っていた。

普段は、図書館で本を読んだり、映画を見たりして過ごしている。冷暖房を節約するために、身

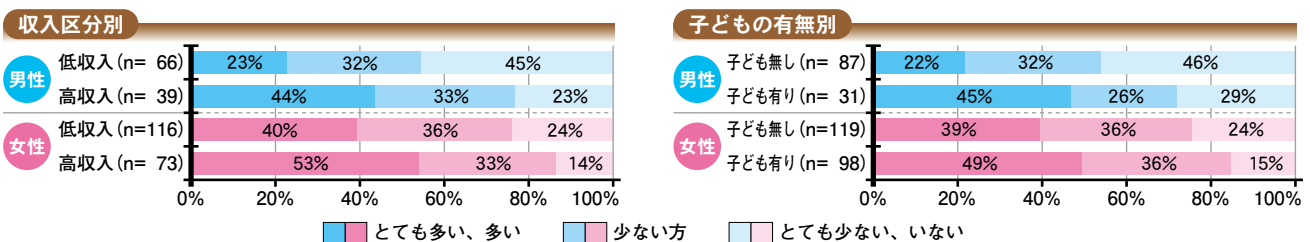
なりを整えて百貨店に行ったり、近くの家電屋にある大きなテレビで見たい番組を鑑賞することも

ある。これまで女性とつきあったことがあるが、結婚で縛られるのが嫌だったのと、子どもを欲しいと思わなかったのが未婚の理由だろうと考えている。結婚していれば、別の人生になっていたのではないかと思っている。

両親は他界し、親戚も全くいないので天涯孤独の身である。身近な家族や友人がいないため、いざという時に頼れる人が思い浮かばない。支援団体のスタッフが 1 月に 1 回電話をくれ、2 か月に 1 回様子を見に来てくれる。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ④

Q12 友人



親しい友人が「とても少ない」「いない」という高齢単身者の割合は、男女とも低収入者で高く、特に男性の低収入者では 45% と 4 割半ばを占める。子

どもの有無でみると、「子ども無し」の男性の 4 割半ば (46%) に友人がほとんどいない。

貯金の底がつき路上生活者に、その後生活保護受給へ

【事例 35】 AI さん(70 代前半、男、無職：A、離別)

AI さんは首都圏外出身で、若い頃に左官として仕事をしていましたが、腕を痛めてしまったため、20 代半ばで近隣県にやってきた。

都内に転入後しばらくは貯金で暮らしていたが、そのうち貯金も底をついたため、友人と空き缶の収集をするようになり、しばらくその収入で、公園で寝泊まりをしながら住所のない生活を送っていた。その後、仲間に教えてもらい生活保護を申請したのが、50 歳頃であった。

7 年前に新宿区に転入し、最初に入ったアパートは、8 人部屋に十数人が同居し、南京虫も出てくるなど、安心して暮らせる場所ではなかった。また、受けとった生活保護費も、様々なものが差し引かれ、手元には 7,000 円程度しか残らなかつ

た。

一人暮らしが長く、慣れてしまったので、寂しいとは全く思わない。普段から一人で過ごしている。家にもイライラすることが多いので、日中はほとんど図書館で過ごしている。一人暮らしは気楽な反面、いざという時のことを考えると少し心配でもあるが、その時になって考えればいいとも思っている。身寄りがないので、誰にも頼ることができないが、何かあれば、外で倒れていれば誰かが連絡してくれると思っている。

食事は三食食べたり、食べないで寝てしまうこともある。気が向いた時はご飯を炊いて、おかずはコンビニで買い、家で食べることが多い。

定年退職後持病が悪化、入院中に生活資金が底をつき生活保護に

【事例 36】 AJ さん(70 代後半、男、無職：C、離別)

AJ さんは首都圏外出身で、客船内などのクリーニング業に従事していた。持病があり、仕事を辞める頃は極めて体調が悪い状態であった。その後、離婚し、さらに病状が悪化して入院していたときに生活資金が底をついたため、病院の紹介で役所に相談し、生活保護を受給することになった。

普段はデイサービスに週 2 回通っている。車で送迎してもらえるので、23 区内の施設ではあるが、遠さは感じない。また、アパートは風呂なしだが、デイサービスでお風呂に入ることができるので、助かっている。

買い物は、たまにコンビニに行くことはあるが、普段は出かけることはなく、もっぱら生協の宅配を利用している。

体の調子が良い時は、昼間 1,000 円で歌い放題の近所のスナックで、月に 1、2 回、カラオケをすることがささやかな楽しみである。

客船の仕事で訪れた外国で他国の人と話をしたことを機に宗教に興味を持った。最近足が不自由で階段の上りが辛いのでほとんど出かけていないが、以前は週に一度の宗教の集まりに積極的に参加していた。

元気な時はよいが、具合が悪くなると一人暮らしは寂しく不安に感じることもある。ただ、宗教を通じて知り合った知人は、病気になるとすぐに病院に飛んできてくれる。よくしてくれる人が周りにいることに安心している。持病が原因で視力がよくないが、知人が AJ さんに代わって住宅の申し込みや役所の用事も手伝ってくれる。弟と妹が地元に住んでおり、特に弟とは仲がよく、たまに電話で連絡をとっているが、自分に何かあった時は、これらの知人に頼ることになるだろうと考えている。

(2) 女性

生活の不安定な高齢期の女性は男性と同様、年金の少ない人や無年金の人で、働かざるを得ない人が多い。「店（麻雀荘）に全てをつぎ込んできたので、苦しいです。」（80代、女、無職）など、これまで、水商売、飲食業、非正規職を転々としてきた人たちが、経済的には、生活保護と非正規職をいったりきたりの人々もいる。

●暮らしぶり

「新宿に住み始めたころは、アパート兼寮のような感じで、食事もついて家賃1万円で安かったです。いろいろなことがあって、新宿が居心地よくて、田舎に帰るのが嫌だと思えるようになりました。だんだん田舎に帰らなくなって、年をとったら、余計に田舎より東京のほうが良いと思うようになりました。」（60代、女、清掃員）など、兄弟はいるが、同じく高齢であり、遠距離であることから、連絡頻度は高くない。無年金者も多く、経済的には生活保護以下の人もみられた。

●つながり

離別者が多い。また、つながりについては、「兄弟姉妹とは遺産相続の問題から疎遠になってしまいました。」（70代、女、無職C）など、親族関係にトラブルを抱えている人も少なくない。

そのため、いざという時には、「身の回りのことを頼めそうな人は思いつきません。」（60代、女、飲食店経営）、「自分の具合が悪くても、助けを呼べる人はいません。救急車を呼ぶほかないと思っています。友人の中には新宿に住んでいる人もいますが、そういったことを頼めるほど親しくありません。」（70代、女、無職B）など、他人を頼らずに生きてい

うとする決意がみられる。一方で、「病院で保証人が必要な時一番困りました。遠縁の人にお墓のことから全てお願いしましたが、私の生死がフィフティフィティと言われたら怖いからということで、保証人を断られてしまいました。本人の意識がない時に手術の判断をするような場合、病院の保証人をどうしたらよいか心配です。」（70代、女、不動産業）など、頼ることのできる人が少ないがために起こる問題にも直面している。

中には、「仲のよい同業者の友人であれば、何かあった時にちょっとした身の回りの世話などをしてくれると思います。普段も買い物などしてくれますから。」（80代、女、無職）というように、同業者間のつながりを持つものもいる。

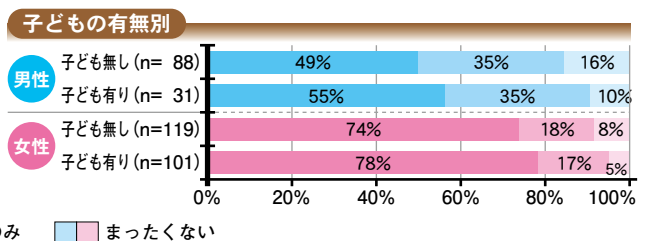
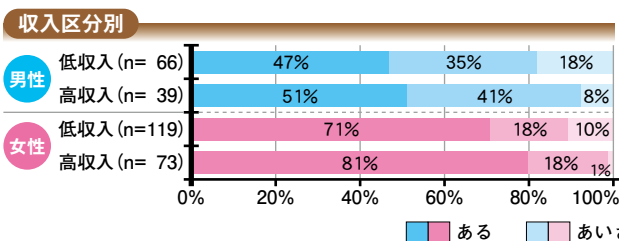
●いざという時の対応

将来に対しては、「大きな病気をした経験はありませんが、いつそうなるかわかりません。そうなった時、姉や妹が来て世話を頼めばやってくれると思います。彼女たちも家庭があることから長い間頼るのは厳しいと思います。」（60代、女、清掃員）、「年金は払っていなかったで全くありません。知り合いからの援助と自分の貯金の取り崩しで暮らしています。病気のこともあるので、お金の面が不安です。」（70代、女、無職A）など、病気になった際の支援面や今後の生活にかかる金銭面で不安を感じている。

このグループの人々は、高齢であることに加えて、収入も不安定であるため、心臓疾患、がん、心筋梗塞などの病気を経験し、退院後も経過観察のため定期的に通院している人が少なくない。こうした健康状態がさらに上記のような不安へとつながっている。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ⑤

Q16 近所づきあい



高齢期では近所づきあいが「まったくない」という単身者の割合は壮年期と比べて低くなり、低収入者で2割近く（18%）であるが、「あいさつのみ」という割合を含めると、男性の5割前後（低収入者53%、高収入者49%）が近所づきあいをほとんどし

ていない。一方、女性は低収入者の7割超（71%）、高収入者の約8割（81%）があいさつ以上の近所づきあいをしている。子どもの有無でみると、「子ども無し」で若干近所づきあいの程度が低くなる。

元気なうちは働きつづけたいが、アパートに住み続けられるかが心配

【事例 37】AK さん(60 代後半、女、マンション清掃員、未婚)

AK さんは首都圏外出身で、中学校卒業後、理容師の仕事をしてきたが、仕事を辞め、東京にやってきた。その時に勤務したのが新宿区の食品工場であったため、新宿区に住むことになり、それ以降ずっと新宿区民である。

新宿に住み始めた頃、アパートは食事もついて家賃も安かった。新宿区に住むうちに居心地がよくなり、田舎に帰るのが面倒になった。年齢を重ねるとともに、東京の便利さに慣れ、田舎に帰る意欲がなくなっていった。

現在は、週 4 日、マンション清掃の仕事をしている。蓄えがないと将来が心配なため、自分の体が元気なうちは働きたいと考えている。仕事を辞めてしまうと、年金だけで生活することは厳しいからである。

休日は、映画を観たり、友人と絵を描きに出かけたり、写真を撮りに行くなどして過ごしている。ただ、友人も各自の生活で忙しく、年々会える機

会も減ってきた。

悩みは、築年数の経った現在のアパートに取り壊しの話があり、住み続けられるかどうかわからないことである。歳を取ると、新しい家を借りる時に保証人を誰に依頼するかという問題がでてくる。しかも、仕事を辞めると家が借りにくくなるので、仕事があるうちに新しい家に引っ越したいと考えている。

兄弟姉妹の多くは実家近くに住んでいる。妹からはときどき連絡がきて、安否を確認してくれている。元の職場の同僚とも時々連絡をとりあう仲である。

これまで大きな病気をした経験はなく、とても健康である。万が一の場合については、姉や妹に世話をお願いすることができるが、それぞれに家庭があることを考えると、長期間頼ることは難しいと考えている。

長年飲食店で働き、知り合いからの援助と貯金の切り崩しで生活

【事例 38】AL さん(70 代前半、女、無職：A、未婚)

AL さんは首都圏外出身で、仕事のために上京し、以来 50 年間、新宿区に住んでいる。最初は理髪店で職人として働いた後、水商売、割烹料理などの飲食店を転々としてきた。

地域などで行われるカラオケや麻雀の会に参加するため、毎日外出している。

年金は払っていなかったもので、全くない。知り合いからの援助と貯金の切り崩しで生計を立てている。ただし、病気のこともあるので、お金の面がとても不安である。

両親とも他界している。兄弟は実家に 1 人と近隣県に 1 人住んでいるが高齢なので、実家に帰る

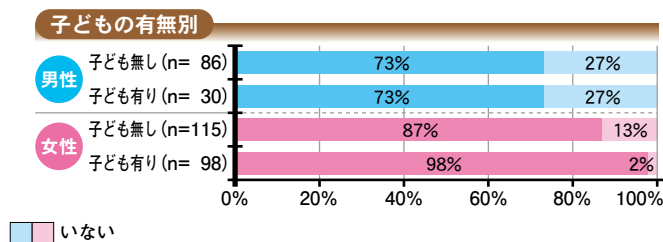
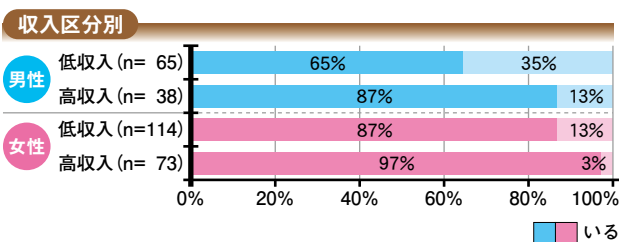
つもりはない。それ以外にも、カラオケや麻雀の会で知り合った友人がいる。

結婚には縁がなかった。強い信念があったわけではなく、適当な相手がいなかっただけである。万が一の場合には、数年間に大病・手術をして、病院を出たり入ったりしている状態なので、救急車を呼ぶ予定である。倒れた時は意識のない時だと思っており、もうあの世に行くだけである。

不安は、長生きすると治療費がかかることである。万が一お金がなくなったら、生活保護も一つの手段として考えている。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ⑥

Q 14 悩みごとの相談相手

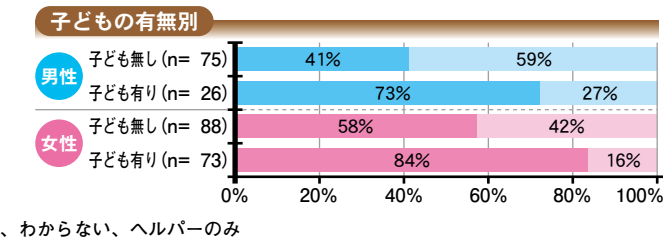
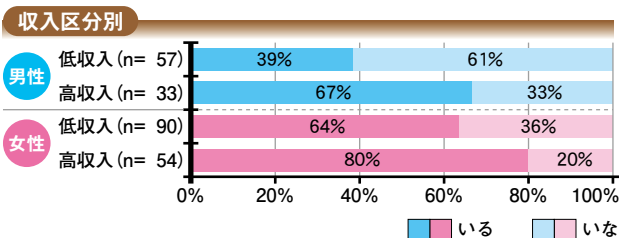


悩みごとの相談相手が「いない」という高齢単身者の割合は、男性の低収入者で35%と高い。子どもの有無でみると、男性の割合は子どもの有無にかか

わらず2割半ばで女性より高く、子どものいる女性はわずか2%と、ほぼ全員に相談相手がいることになる。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ⑦

Q 28-2 入院・介護時に頼れる人

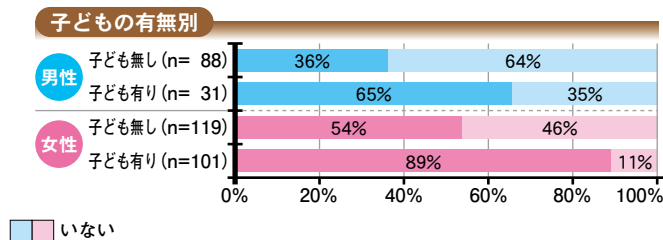
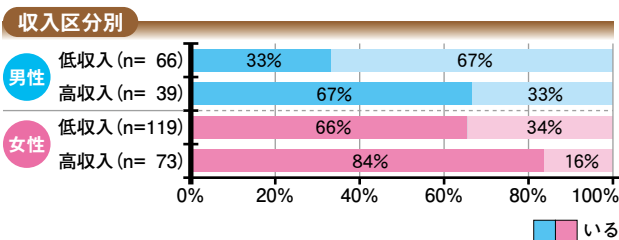


入院・介護時に頼れる人が「いない」「わからない」「ヘルパーのみ」という高齢単身者の割合は、低収入者で高く、特に男性の6割超(61%)を占める。子

どもの有無でみると、男女とも「子ども無し」で高く、男性の6割近く(59%)、女性の4割超(42%)が頼れる親しい人がいない状況である。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ⑧

Q 15 正月ともに過ごした人

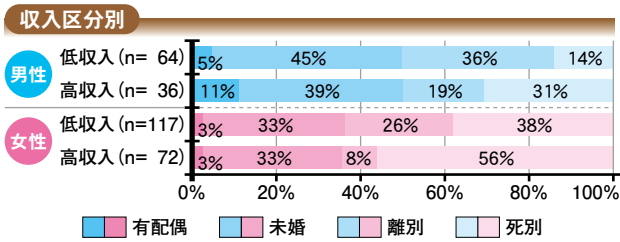


正月を一人で過ごした高齢単身者の割合は、男女とも低収入者で高く、特に男性で6割半ば(67%)と高い。子どもの有無でみると、男女とも「子ども

無し」で高く、男性の6割半ば(64%)、女性の4割半ば(46%)が正月を一人で過ごしている。

単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ⑨

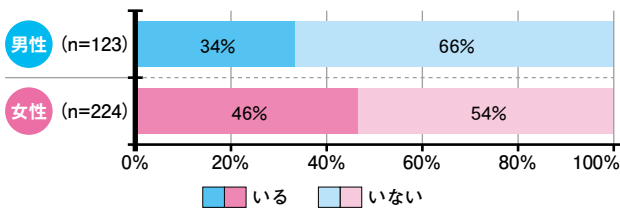
Q 34 配偶関係



高齢単身者の配偶関係は、男女とも低収入者では「離別」の割合が高く、高収入者では「死別」の割合が高くなる。特に男性の低収入者は36%が離別で、女性の高収入者は56%が死別である。

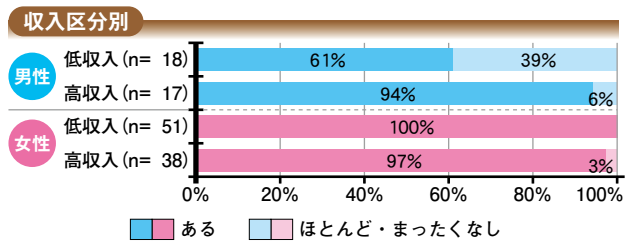
単身世帯意識調査結果(高齢期 男女別) ⑩

Q 10 子どもの有無



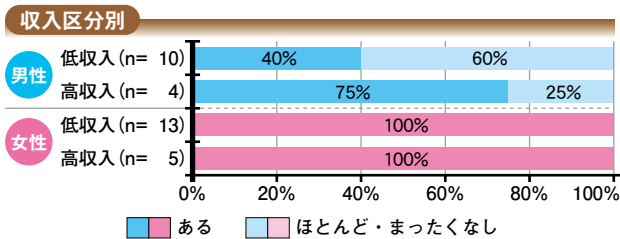
高齢期の単身者で子どものいる人は、男性の3人に1人(34%)、女性の4割半ば(46%)いる(年収無回答者を含む)。うち、男性の高収入者と女性のほ

Q 10-3 子どもとの連絡



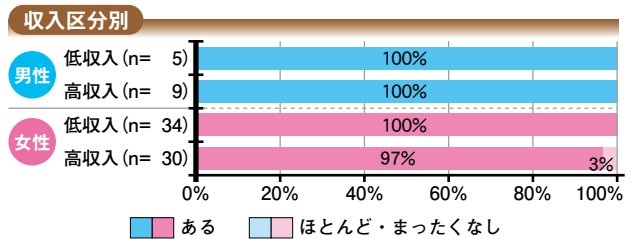
ぼ全員が子どもと連絡をとっているが、男性の低収入者では4割近く(39%)が「ほとんど・まったく」連絡をとっていない。

Q 10-3 子どもとの連絡 (離別)



これを離死別ごとにみると、離別者では低収入男性の6割が子どもと連絡をとっていないが、死別者

Q 10-3 子どもとの連絡 (死別)



では低収入男性を含めたほぼ全員が子どもと連絡をとっている。

(参考) ヒアリング調査回答者一覧

■ 壮年前期(35～49歳) 49人

● 生活安定層

(1) 正規職・高収入 7人(男2、女5)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
1	30代後半	女	証券会社	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。店が多い。静かで暮らしやすい。	健康	首都圏外	未婚/婚約者あり	親、妹	いる	-	婚約者
2	30代後半	男	人材派遣会社	新宿区	分譲マンション	自転車移動可能。店が多い。	健康	首都圏内	未婚	親、妹	いる	-	友人、親
3	30代後半	女	会計事務所	新宿区	分譲マンション	買い物に便利。店が多い。職場から近い。病院が多い。	健康	首都圏外	未婚	親、妹、姪	いる	-	友人
4	30代後半	男	通信機器会社	23区内(都心3区)	分譲マンション	静かで暮らしやすい。交通の便がよい。買い物に便利。	健康	首都圏外	未婚	親、弟	いる	-	友人・知人、おば、いとこ
5	40代前半	女	食品会社	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。	健康	首都圏外	未婚/パートナーあり	親、弟妹、甥、姪	いる	-	パートナー
6	40代後半	女	証券会社	23区内(都心3区)	分譲マンション	通勤に便利。静かで暮らしやすい。病院が近い。	健康	首都圏外	未婚/パートナーあり	親、弟	いる	-	パートナー、弟、親戚、友人
7	40代後半	女	不動産会社	23区内(都心3区)	分譲マンション	通勤に便利。店が多い。	健康	首都圏内	未婚	親、妹	いる	-	妹

(2) 正規職・標準収入 10人(男4、女6)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
8	30代後半	男	高校教諭	新宿区	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。	健康	首都圏外	未婚/婚約者あり	親	いる	-	友人
9	40代前半	男	障害者施設	23区内	賃貸	交通の便がよい。	健康	首都圏外	未婚	親、兄	いる	-	親
10	40代前半	女	電機メーカー	23区内(都心3区)	分譲マンション	交通の便がよい。なじみがある。病院が多い。	健康	新宿区	離別	弟	いる	-	友人
11	40代前半	男	印刷会社	23区内(都心3区)	賃貸	職場から近い。なじみがある。	ほぼ健康	首都圏内	離別	親、子ども	いる	-	親
12	40代前半	女	広告制作会社	新宿区	賃貸	職場から近い。なじみがある。店が多い。	健康	新宿区	未婚	親、妹	-	-	-
13	40代後半	女	保険会社	23区内(都心3区)	分譲マンション	交通の便がよい。買い物に便利。治安がよい。	健康	都内市町村	未婚/パートナーあり	親、姉、甥姪	いる	-	姉、パートナー、友人
14	40代後半	女	IT系企業事務	23区内(都心3区)	分譲マンション	(下町風の良さがなくなった)	あまりよくない	首都圏外	未婚	親、弟	いる	-	親
15	40代後半	男	特殊法人	23区内	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。病院が多い。	健康	首都圏外	未婚	親、弟妹	-	-	友人・知人
16	40代後半	女	アパレル会社	23区内	賃貸	店が多い。交通の便がよい。	健康	首都圏外	離別	親、兄弟	いる	-	いない
17	40代後半	女	英会話学校	23区内(都心3区)	賃貸	買い物に便利。交通の便がよい。治安がよい。	健康	首都圏外	離別	親、姉	いる	-	親

<一覧の見方>

ヒアリング調査回答者一覧の作成にあたっては、個人情報に配慮して作成しています。

●職場、実家・出身地:「23区内(都心3区)」は千代田・中央・港区の3区、「23区内」はこれらの区と新宿区を除いた19区である。また、「首都圏内」は埼玉・千葉・神奈川・茨城・栃木・群馬・山梨県、「首都圏外」はこれらと東京都を除いた道府県である。

●ヒアリング調査で質問していない項目は「-」を記載している。

(3) 情報サービス業従事者 6人(男5、女1)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
18	30代後半	男	IT系企業(プロジェクトマネージャー)	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。(大きいスーパーがないので不便)	健康	首都圏外	未婚	親、弟	いる	-	友人
19	30代後半	男	マーケティング会社	23区内	分譲マンション	店が多い。	健康	首都圏内	未婚	親、兄弟	いる	-	親
20	30代後半	男	アプリ制作会社(プロデューサー)	新宿区	分譲マンション	店が多い。交通の便がよい。家賃が安い。	健康	23区内	未婚	親	いる	-	親
21	30代後半	男	アニメイベント会社(役員)	23区内	持ち家一戸建て	静かで暮らしやすい。	健康	23区内	未婚/婚約者あり	親、兄姉	いる	なし	婚約者
22	40代前半	女	マーケティング会社(個人経営)	新宿区	賃貸	交通の便がよい。治安がよい。	健康	首都圏外	未婚	親、姉弟	いる	-	友人
23	40代後半	男	ベンチャー企業(SE)	23区内(都心3区)	分譲マンション	交通の便がよい。(近くにスーパーがなく不便)	健康	23区内	未婚	親、妹	-	あり	親、妹

(4) 専門的技術・資格者 10人(男2、女8)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
24	30代後半	女	作業療法士	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。(住むのにファミリー向きではない)	ほぼ健康	都内市町村	未婚	親、妹	いる	-	-
25	30代後半	女	大学講師	都内	賃貸	買い物に便利。店が多い。交通の便がよい。	健康	首都圏外	未婚	親、弟	いる	-	友人、親、兄弟
26	30代後半	女	看護施設経営	新宿区	賃貸	(田舎育ちには落ち着かない)	健康	首都圏外	未婚/パートナーあり	親、兄	いる	-	わからない
27	30代後半	女	弁護士	新宿区	賃貸	交通の便がよい。店が多い。緑や公園が多い。家賃が安い。	健康	首都圏外	未婚	親、弟	いる	-	知人
28	40代前半	男	放射線技師	新宿区	賃貸	徒歩で繁華街に行くことができる。店が多い。治安がよい。	健康	首都圏内	未婚	親、弟	いる	-	知人、親、弟
29	40代前半	女	写真家	-	賃貸	店が多い。静かで暮らしやすい。治安がよい。	健康	首都圏外	離別	親、弟	いる	-	親
30	40代前半	女	大学講師	23区内	分譲マンション	店が多い。緑や公園が多い。芸術家がいたまち。	健康	首都圏内	未婚	親、兄	いる	-	友人
31	40代前半	女	デザイン会社	新宿区	賃貸	交通の便がよい。店が多い。	健康	首都圏内	未婚/パートナーあり	親、弟、叔母	いる	-	叔母、親
32	40代前半	女	医師	都内	分譲マンション	交通の便がよい。買い物に便利。	健康	新宿区	未婚	親、妹	いる	-	友人
33	40代前半	男	税理士	新宿区	賃貸	交通の便がよい。静かで暮らしやすい。店が多い。	健康	首都圏外	未婚	親、妹	いる	-	わからない

●生活不安定層

(1) 収入不安定な事業者 6人(男4、女2)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
34	30代後半	男	マーケティング会社(個人経営)	新宿区	賃貸	交通の便がよい。自転車移動可能。	健康	首都圏外	未婚	親、妹	いる	-	友人
35	40代前半	男	ネットショップ(個人経営)	新宿区	賃貸	(家賃が高い)	健康	首都圏外	未婚	親	いる	-	-
36	40代前半	男	飲食店(個人経営)	新宿区	賃貸	一人暮らしをしやすい。	健康	都内市町村	離別	親、兄	いる	-	友人
37	40代後半	女	フリーライター	新宿区	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。	健康	首都圏外	未婚	親、妹	いる	-	友人
38	40代後半	男	自由営業	新宿区	賃貸	買い物に便利。店が多い。仕事を探しやすい。	健康	首都圏外	未婚	親、兄	いる	-	わからない
39	40代後半	女	デザイナー	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。一人暮らしをしやすい。	あまりよくない	首都圏外	未婚	兄弟	いる	-	いない

(2) 非正規職・失業中 5人(男3、女2)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
40	30代後半	男	無職(元IT企業)	-	賃貸	買い物に便利。公園が多い。	病気あり	新宿区	未婚	親、兄	いる	-	親、兄
41	40代前半	男	配送業(アルバイト)	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。自転車移動可能。買い物に便利。	健康	首都圏外	未婚	親、弟	いない	-	わからない
42	40代前半	男	データ入力(非正規)	23区内	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。静かで暮らしやすい。	病気あり	23区内	未婚	親、姉弟	いる	-	姉弟
43	40代後半	女	無職(元保険会社)	-	分譲マンション	賑やかでよい。あこがれの新宿区に住みたかった。	健康	首都圏外	未婚/パートナーあり	親、弟	いる	あり	知人、パートナー
44	40代後半	女	飲食店(アルバイト)	23区内(都心3区)	賃貸	交通の便がよい。買い物に便利。猥雑さや多様性。	健康	23区内	未婚	親、弟	いる	-	弟

(3) 生活保護 4人(男3、女1)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
45	30代後半	男	無職(元建設業) / 生活保護	-	賃貸	交通の便がよい。静かで暮らしやすい。	病気あり	首都圏外	離別	親、兄姉、子ども	いる	-	いない
46	40代後半	男	無職(元飲食店) / 生活保護	-	賃貸	店が多い。	病気あり	首都圏外	未婚	親	いない	-	わからない
47	40代後半	男	無職(元家電販売) / 生活保護	-	賃貸	(物価が高い)	病気あり	都内市町村	未婚	妹(音信不通)	いない	-	いない
48	40代後半	女	交通誘導等(アルバイト) / 生活保護	-	賃貸	賑やかでよい。	病気あり	首都圏外	未婚	親、弟(音信不通)	いない	あり	いない

※ 職業不詳 1人(男1)

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
49	30代後半	男	(不明)	新宿区	賃貸	店が多い。交通の便がよい。	健康	首都圏内	未婚	親、兄	いる	-	-

■ 壮年後期(50～64歳) 21人

● 生活安定層

(1) 男性 5人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
50	50代前半	男	ジャーナリスト(フリー)	都内	賃貸	交通の便がよい。店が多い。	健康	23区内	未婚	親	いる	—	いない
51	50代後半	男	大学教授	都内	分譲マンション	—	健康	新宿区	未婚	姉、姪	いない	—	いない
52	50代後半	男	アパート経営	新宿区	持ち家一戸建て	交通の便がよい。店が多い。病院が近い。	健康	新宿区	未婚	—	いる	あり	いない
53	50代後半	男	システムエンジニア(フリー)	都内	分譲マンション	病院が多い。店が多い。交通の便がよい。	病気あり	新宿区	未婚	弟	いる	あり	友人、ヘルパー
54	60代前半	男	嘱託職員(経理)	都内	持ち家一戸建て	交通の便がよい。病院が多い。	健康	新宿区	未婚	親戚	いる	あり	友人

(2) 女性 5人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
55	50代前半	女	新聞社	首都圏内	持ち家一戸建て	病院が多い。店が多い。交通の便がよい	ほぼ健康	新宿区	未婚/パートナーあり	親、妹、甥	いる	あり	パートナー、親、妹
56	50代後半	女	賃貸マンション経営	新宿区	分譲マンション	人とのつながりがある。文化的である	健康	新宿区	離別/パートナーあり	親、兄(音信不通)、叔母	いる	あり	パートナー、友人
57	50代後半	女	障害者施設	23区内	賃貸	交通の便がよい。職場から近い。	健康	—	離別	妹、子ども、孫	—	—	子ども
58	60代前半	女	学習塾(個人経営)	新宿区	分譲マンション	店が多い。買い物に便利。	健康	首都圏外	未婚	義姉、甥	いる	あり	甥
59	60代前半	女	老人ホーム(看護師)	23区内(都心3区)	分譲マンション	—	健康	首都圏外	死別	兄弟、連れ子、甥	いる	あり	知人、兄弟、甥の子ども

● 生活不安定層

(1) 男性 6人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
60	50代前半	男	無職(元建設業派遣)/生活保護	—	賃貸	—	病気あり	首都圏外	未婚	親・妹(音信不通)	—	あり	いない
61	50代前半	男	無職(元団体代表)	—	賃貸	—	健康	首都圏外	離別	弟、子ども、孫	いる	—	友人
62	50代後半	男	無職(元データ会社)	—	賃貸	店が多い。	健康	首都圏外	未婚	親、姉	いる	—	いない
63	50代後半	男	無職(元電気工)/生活保護	—	施設	—	病気あり	23区内	離別	親、姉、子ども(音信不通)	いない	—	いない
64	60代前半	男	臨時職(元IT業)	—	賃貸	交通の便がよい。干渉されないと。店が多い。	ほぼ健康	首都圏外	離別	親、子ども(音信不通)	いる	—	いない
65	60代前半	男	設計事務所(個人経営)	新宿区	分譲マンション	交通の便がよい。	健康	首都圏内	離別	兄弟、甥姪	いる	—	友人

(2) 女性 5人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	職場	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	健康状態	実家・出身地	配偶関係	親・兄弟・子ども・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時に頼れる人
66	50代前半	女	無職(元病院栄養士)	—	持ち家一戸建て	交通の便がよい。買い物に便利。	健康	新宿区	未婚	従妹	いる	—	いない
67	50代後半	女	郵便物仕分け作業(パート)	新宿区	賃貸	あこがれの新宿区に住みたかった。	健康	首都圏外	離別	親、弟	—	—	親、弟
68	60代前半	女	無職(栄養士)	—	賃貸	店が多い。下町風の雰囲気。	健康	新宿区	有配偶(別居中)	親、兄妹、子ども	—	—	子ども
69	60代前半	女	ネットショップ(個人経営)	新宿区	分譲マンション	病院が近い。店が多い。	健康	新宿区	未婚	兄妹	—	—	兄妹
70	60代前半	女	無職(元飲食店パート)	—	持ち家一戸建て	—	病気あり	新宿区	離別	姉、甥	いる	あり	友人

■ 高齢期(65歳以上) 36人

● 生活安定層

(1) 男性 5人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	年金	健康状態	実家・出身地	配偶関係	子ども・孫	兄弟・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時、要介護時に頼れる人
71	70代前半	男	鉄道整備会社(非正規)	賃貸(別に持ち家所有)	-	あり	健康	都内	死別	子あり	兄	いる	-	知人、子ども
72	70代前半	男	無職(元会社員)	分譲マンション	買い物に便利。交通の便がよい。	あり	健康	-	離別	子あり・孫あり	-	いる	あり	友人、子ども、子どもの嫁
73	80代後半	男	無職(元外資系設計事務所)	分譲マンション	買い物に便利。	-	健康	-	死別	子あり	-	いる	あり	子ども
74	80代後半	男	無職(元建材会社社長)	分譲マンション	生活に便利。交通の便がよい。環境がよい。	あり	健康	首都圏内	死別	子あり・孫あり	-	いる	あり	子ども、孫
75	90代前半	男	通訳・翻訳業	分譲マンション	買い物に便利。交通の便がよい。	-	健康	国外	死別	子あり	-	いる	あり	知人

(2) 女性 16人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	年金	健康状態	実家・出身地	配偶関係	子ども・孫	兄弟・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時、要介護時に頼れる人
76	60代後半	女	無職(元出版会社)	持ち家一戸建て	交通の便がよい。近所づきあいがある。	あり	健康	首都圏外	離別	子あり・孫あり	兄姉	-	あり	兄弟、子ども
77	70代前半	女	臨時職	持ち家一戸建て	公共施設、大学がある。店が多い。	あり	健康	首都圏内	死別	子あり・孫あり	兄弟	いる	あり	子ども、知人
78	70代前半	女	無職(元印刷会社)	持ち家一戸建て	買い物に便利。交通の便がよい。	-	健康	首都圏内	死別	子あり・孫あり	妹	いる	-	子ども
79	70代前半	女	無職(元会社員)	持ち家一戸建て	環境がよい。交通の便がよい。静かで暮らしやすい。	あり	健康	首都圏外	未婚	なし	兄姉	いる	あり	姉、知人
80	70代前半	女	無職(元公務員)	持ち家一戸建て	-	あり	健康	新宿区	未婚	なし	弟妹、甥・姪	いる	あり	妹・弟、甥・姪、知人
81	70代後半	女	無職	持ち家一戸建て	買い物に便利。交通の便がよい。	あり	健康	新宿区	死別	子あり・孫あり	-	いる	あり	友人、子ども
82	70代後半	女	無職	公営住宅	一人暮らしをしやすい。生活に便利。	-	病気あり	首都圏外	死別	なし	妹	いる	あり	-
83	70代後半	女	無職	分譲マンション	環境がよい。	-	健康	-	死別	子あり	死亡	いる	あり	子ども
84	70代後半	女	無職	公営住宅	交通の便がよい。	あり	あまりよくない	-	死別	子あり・孫あり	死亡	いる	あり	子ども、孫
85	70代後半	女	映像制作会社経営	賃貸	病院が多い。交通の便がよい。環境がよい。	-	健康	-	未婚	なし	妹	いる	-	-
86	70代後半	女	無職	公営住宅	買い物に便利。病院が多い。生活に便利。	あり	健康	-	死別	子あり	姉	いる	あり	友人、子ども、孫、親族
87	80代前半	女	無職(元フリー営業)	分譲マンション	交通の便がよい。	あり	あまりよくない	23区内	死別	なし	兄妹	-	-	妹
88	80代前半	女	無職(元仕立て業)	公営住宅	-	あり	健康	新宿区	未婚	なし	-	-	あり	-
89	80代後半	女	無職(元医療系出版社)	分譲マンション	道路整備が進んでいる。	あり	病気あり	首都圏外	未婚	なし	甥夫婦	いる	あり	甥夫婦、友人
90	80代後半	女	無職(元看護学校教師)	持ち家一戸建て	環境が悪い。	あり	健康	新宿区	死別	子あり	弟	いる	なし	弟、友人、子ども、友人の子ども
91	90代前半	女	無職	公営住宅	買い物に便利。交通の便がよい。	-	病気あり	首都圏外	死別	子あり・孫あり	-	いる	あり	子ども

●生活不安定層

(1) 男性 8人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	年金	健康状態	実家・出身地	配偶関係	子ども・孫	兄弟・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時、要介護時に頼れる人
92	60代後半	男	タクシー運転手	賃貸	買い物に便利。交通の便がよい。	なし	健康	首都圏外	離別	子あり(音信不通)・孫あり	兄弟	いない	なし	兄弟
93	60代後半	男	無職(元パイヤー) / 生活保護	賃貸	店が多い。	-	健康	首都圏外	未婚	なし	なし	いない	-	わからない
94	70代前半	男	公園清掃員 / 生活保護	賃貸	干渉されないところ。生活に便利。	-	病気あり	-	離別	子あり(音信不通)	兄弟	-	-	妹
95	70代前半	男	ビル清掃員(臨時職) / 生活保護	賃貸	店が多い。交通の便がよい。	-	健康	都内	未婚	なし	姉	いる	あり	知人
96	70代前半	男	無職(元左官) / 生活保護	賃貸	-	-	病気あり	首都圏外	離別	なし	なし	-	-	いない
97	70代後半	男	無職(元飲食店) / 生活保護	賃貸	-	-	病気あり	首都圏外	離別	なし	なし	-	-	-
98	70代後半	男	無職(元クリーニング業) / 生活保護	賃貸	生活に便利。	-	病気あり	首都圏外	離別	子あり(音信不通)	弟妹	いる	なし	知人
99	70代後半	男	執筆業	賃貸	店が多い。	なし	病気あり	新宿区	離別	子あり(音信不通)	-	いない	-	ヘルパー

(2) 女性 7人

No.	年齢	性別	仕事・収入の内容	住宅	新宿区の暮らしやすさ(にくさ)	年金	健康状態	実家・出身地	配偶関係	子ども・孫	兄弟・親族	友人	近所づきあい	いざ困った時、要介護時に頼れる人
100	60代後半	女	飲食店経営(廃業見込み)	賃貸	環境がよい。	あり	健康	23区内	離別	子あり・孫あり	兄	-	-	いない
101	60代後半	女	マンション清掃員(非正規)	賃貸	交通の便がよい。(治安が悪化してきた)	あり	健康	首都圏外	未婚	なし	兄姉妹	いる	あり	姉、妹
102	70代前半	女	無職(元飲食店勤務)	賃貸	家賃が安い。買い物に便利。静かで暮らしやすい。	なし	病気あり	首都圏外	未婚	なし	兄弟	いる	-	友人
103	70代前半	女	無職(元麻雀荘経営)	賃貸	-	なし	病気あり	首都圏外	離別	なし	弟妹	いる	-	わからない
104	70代前半	女	不動産業(歩合制)	賃貸	家賃が安い。なじみがある。	なし	病気あり	首都圏外	死別	なし	-	いる	-	いない
105	70代後半	女	無職(仕事を転々) / 生活保護	賃貸	-	あり	病気あり	新宿区	離別	なし	姉	いる	-	わからない
106	80代後半	女	無職(元麻雀荘経営)	賃貸	生活に便利。	なし	健康	首都圏外	離別	なし	弟妹	いる	-	友人



単身化の課題と施策の方向性



1. ヒアリング調査結果からみる単身者の特徴と課題

Ⅳ章でヒアリング調査結果から単身者の生活像をタイプ分類別にみてきた。そこで示した単身者の特徴と課題を生活安定層と不安定層別にまとめると以下のとおりとなる。

(1) 生活安定層

壮年期で生活が安定している人の多くは、一定の安定した収入が得られる正規職や経営者、専門職の人たちで、皆、とにかく忙しそうである。仕事のストレスも大きく、始終、仕事のことを考えているという人も少なくない。こうした仕事の忙しさからか、結婚したいと思える相手が見つからないという人は男女問わず多く、また、今の仕事を続けたいので結婚は難しいという女性もみられた。

職場は新宿区内や近隣区にある人がほとんどで、その分、効率的に時間をつくり、健康づくりも兼ねて自転車通勤をしたり、ジムやダンス教室、趣味のサークル活動などに力を注いでいる人も多い。なかには病気やケガで日常生活に困っている人もいるが、一人暮らしだからこそ生活習慣が乱れないようにと健康面に配慮している人は多い。

仕事で遅くなっても、深夜営業している飲食店やコンビニなどが多いため、一人暮らしには困らない。親や兄弟・姉妹も健在で、いざという時には何とか

なる。友人も職場や仕事関係、趣味の仲間などがおり、もしもの時には誰かが気が付けてくれるので、孤独死の心配は今のところないという人が多い。

また将来への不安を漠然と感じつつも、経済的にはあまり心配がなく、むしろ仕事を退職した後、人間関係が弱くなることに不安を抱いている人が多い。

高齢期で生活が安定している人では、元会社勤めで厚生年金を受けている人や配偶者と死別して遺族年金等を収入源としている女性が多い。持ち家で子どもがいる人が多く、子どもと頻りに連絡を取り合っている。近所づきあいや友人も多く、一人暮らしが寂しいながらも自立した生活を送っている。

これらの生活安定層は、壮年期、高齢期とも社会的孤立に陥る可能性は少ないと思われる。しかし、壮年期の単身者が未婚のまま高齢期を迎え、退職等により人とのつながりが弱くなることで、孤立状態になることは十分考えられる。

(2) 生活不安定層

壮年期で生活が不安定な人では、非正規雇用やフリーで仕事をしている人、失業中の人などで、収入は少ないか不安定である。職場や仕事での人間関係は弱く、親や兄弟姉妹と疎遠になっている人が多い。収入が不安定なため、結婚は考えられないという。

高齢期で生活が不安定な人では年金が少なかったり、受けていない人が多く、高齢になっても仕事をせざるを得ないという人たちである。

ヒアリング調査結果からも生活不安定に陥った要因として次のことが語られた。

- ・リストラや事業の失敗
- ・地方で仕事や家族関係がうまくいかず上京
- ・病気やケガ、心の病

・離婚により単身者となり、子どもとも音信不通
そのほか、生活習慣が乱れている人や話し相手がまったくいないという人もおり、今の状況から抜け出せる見込みがないと語っている人も多い。こうした人は、いざという時に頼る人のいない社会的孤立状態に陥っている人や、将来、社会的孤立状態になる可能性の高い人が多い。今回のヒアリング調査でも、「誰かと話したかったから参加した」という人が何人かいた。

こうした、経済的な理由等により生活が不安定な単身者が陥りやすい「社会的孤立」が、単身化の最も大きな課題といえるであろう。

2. 地域課題としての社会的孤立

社会的孤立は個人の問題にとどまらず地域の共通課題である。

長年、孤立の問題は、主に高齢者の問題と考えられてきた。つまり、地域の中で孤立した独居高齢者等が、生きがいの喪失や生活不安を抱え、その人らしい豊かな生活を送ることができない状況に置かれ、孤独死に至るリスクも高まることへの対応が課題であった。

しかし、近年、地域社会だけでなくあらゆる社会関係が希薄化する「社会的孤立」は、高齢者のみならず若者層においても問題になっている。

景気低迷が続き、経済的に困窮しているものの現在の社会保障制度からもれてしまう人が増加する中、平成27年4月「生活困窮者自立支援法」が施行された。

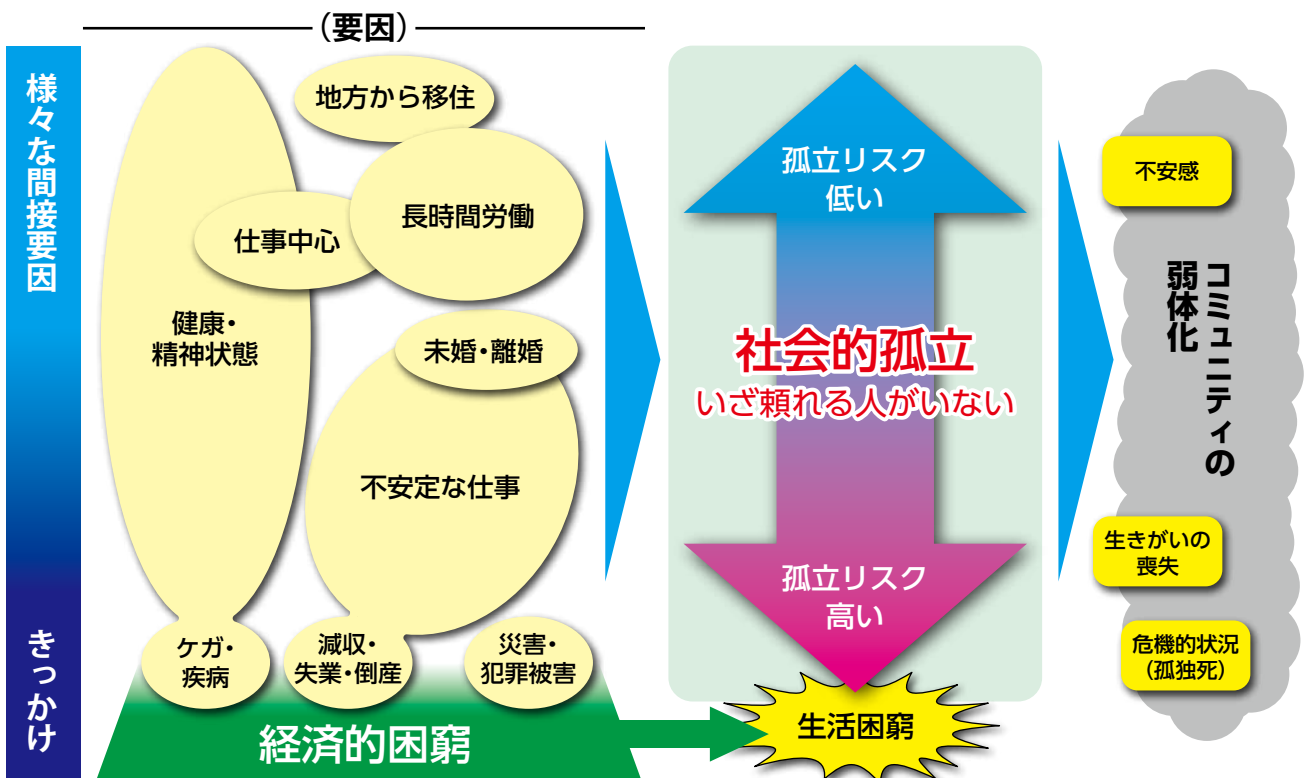
この制度においては、主な支援対象者は「現に経済的に困窮し、最低限度の生活を維持することができなくなるおそれのある者」、つまり「生活困窮者」である。そうした人々の中には、社会とのつながりが薄れ、自らサービスにアクセスできない者が多いことから、本制度では、社会的孤立状態の解消などへ配慮することが重要とし、孤立状態の者への対策が掲げられている。

生活困窮者自立支援制度の設計段階で検討にあたった「生活困窮者の生活支援の在り方に関する特別部会」の報告書の中には、「生活困窮が広がるなかで、家族などのつながりをなくして孤立化する人々が少なくない。低所得で家族をつくることができず、また年金など老後の備えをする余力のないまま単身で高齢期を迎えていく人々も増えている。社会的孤立の拡大は、自立への意欲を損ない、支援を難しくし、地域社会の基盤を脆弱にする。」と書かれている。これは、経済的困窮によって社会的孤立状態となり生活困窮に陥る場合もあれば、社会的孤立リスクが高まり経済困窮と結びつくことによって生活困窮に陥る場合もあることを示唆している。このように社会的孤立は、経済困窮の問題と強い関係がある問題であると言える。

また、若年層を中心とした激しい人口移動を背景に単身化が進み、地域において安定的な人間関係が構築しにくくなれば、コミュニティの弱体化、地域経済の衰退にもつながる。

こうした背景を踏まえ、以下社会的孤立のリスクが高い単身世帯を多く抱える新宿区において、様々な課題と強い関係がある「社会的孤立」の解消にどう対応していくべきかを考察する。

図 27 単身世帯における社会的孤立の要因 ～新宿区のケーススタディから～



3. 社会的孤立解消のための施策の方向性

今回のケーススタディを通じて得た分析結果を基に単身者を経済状況と社会的孤立リスクで類型化したものが図 28 である。縦軸の経済的安定度と横軸の社会的孤立リスクで 4 象限に分類し、経済的安定度が高く、人間・社会関係もある人々を「生活充足群」、経済的安定度が低く人間・社会関係が希薄な人々を「生活困窮群」、社会的孤立のリスクは低いが経済状況が厳しいあるいはその逆の経済状況は安定しているが社会的孤立リスクが高い人々を「生活不安群」とした。

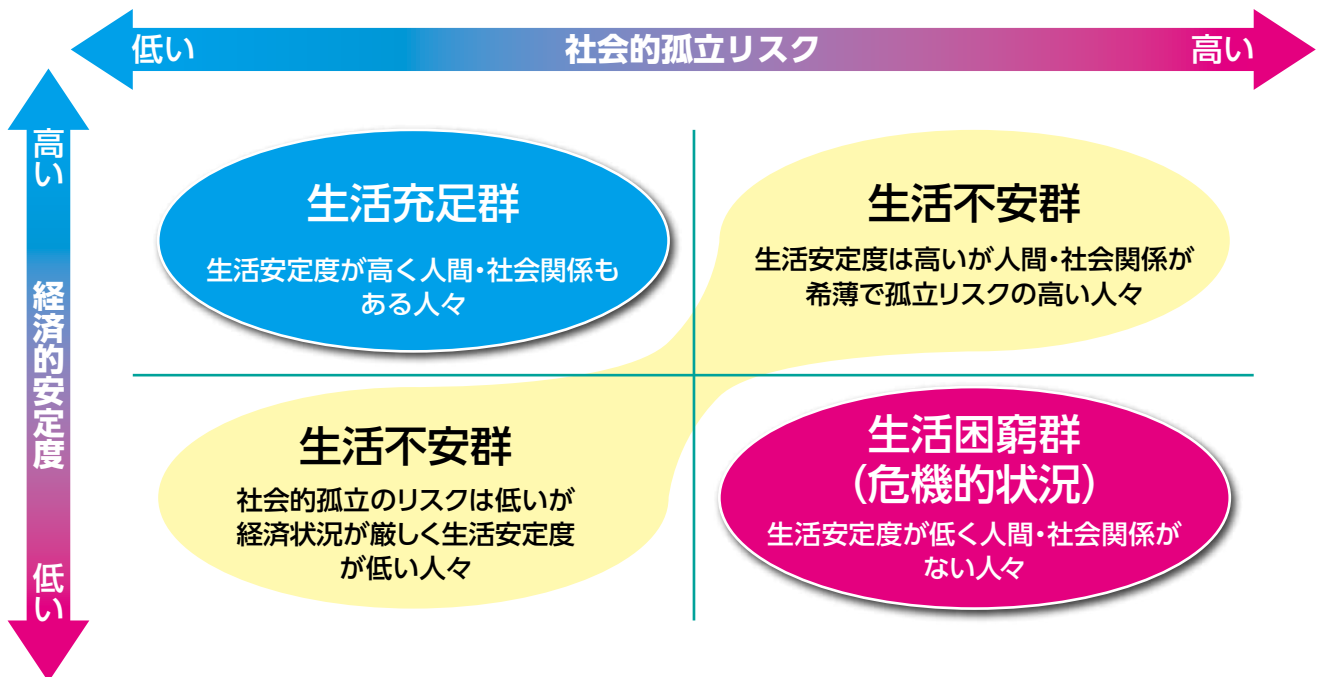
研究所が実施したこれまでのアンケート調査やヒアリング調査等の結果から、単身者は一様ではなく、類型したとおり、生活充足群もいれば生活困窮群もいる。また、生活充足群に属する人々でも潜在的なリスクは有しており、いつ生活困窮群に移行するかは分からない。

こうした単身者の割合が高い新宿区においては、社会的孤立解消のため、2 種類のアプローチが必要である。

ひとつは、生活充足群も含む地域全体を対象として、社会生活の基礎となる健康づくりの意識醸成や地域における賑わいの創出、コミュニティ活性化、スポーツ・生涯学習環境整備、まちのバリアフリー化等のいわゆる基盤づくりである。

もうひとつは、生活不安群の中に見られる生活困窮・危機的状況に陥るリスクが高まっている人々を対象に、そのリスクを下げるあるいはリスクがそれ以上高まらないよう働きかける施策である。壮年期では、経済的不安定にかかるものであれば就業・起業支援、関係づくりにかかるものであれば婚活支援といったものがあげられる。高齢期では、地域における居場所づくりや相談窓口の充実、雇用の場の創出などがあげられる (図 29)。

図 28 単身者の類型



●政策的含意

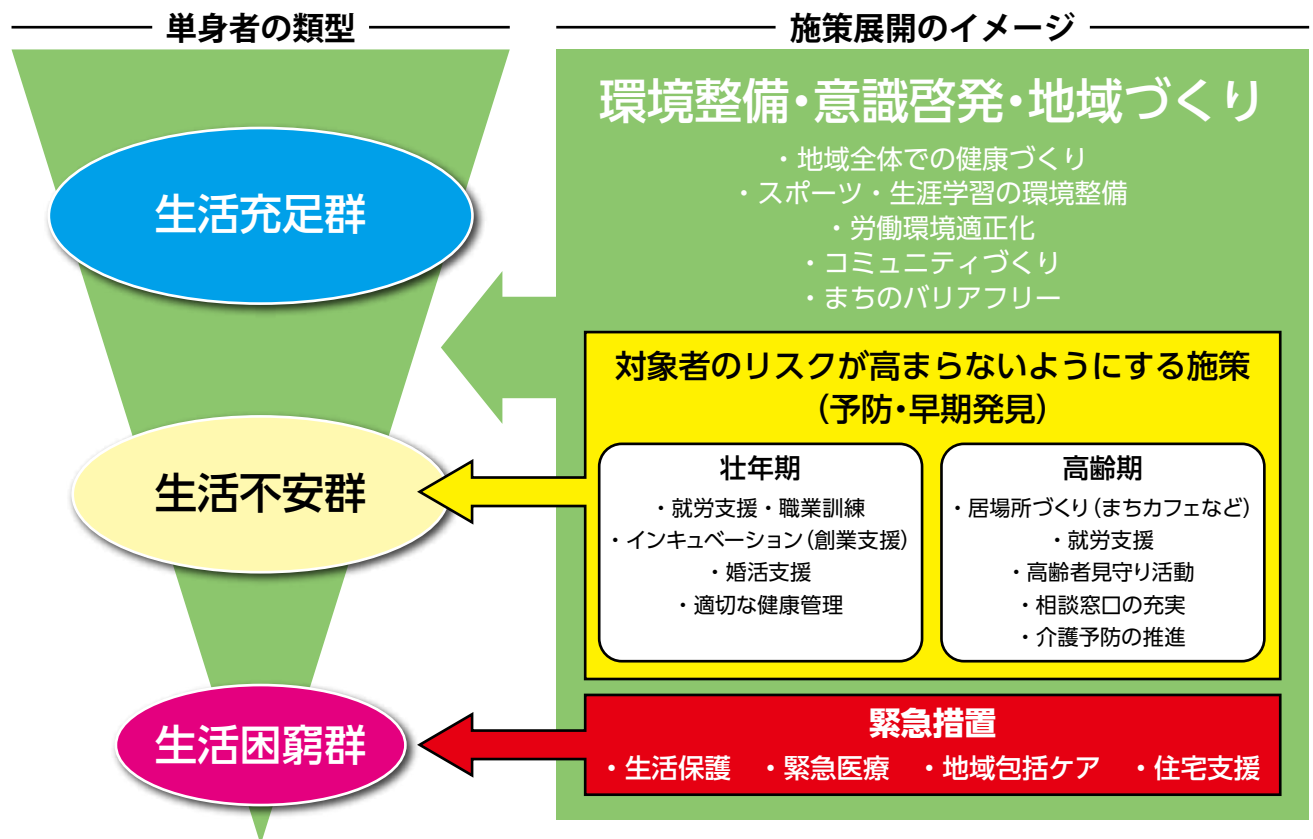
生活困窮・危機的状況に陥ってしまった人々に対しては、生活保護や住宅支援、医療・介護支援といった緊急措置としての施策が必要なのはいうまでもない。しかし、それだけでは根本的な解決にはならない。地域全体でリスクを軽減し、問題を起こさせないための地域全体の基盤づくりに力を入れて取り組むべきである。(地域全体のリスクを下げる施策の重要性)

その際、問題の複合化、ニーズの多様化が進む中、行政以外の多様な主体とより一層連携を図ることが必要である。現在も、民間企業、NPO法人や地域のボランティアなど行政以外の主体による活動が多く行われているが、民間の機動性やノウハウを活用するためこうした地域における行政以外の取り組みについても区として把握し、行き届いていない部分に施策を誘導するなど総合調整していくことが求められる。(多様な主体とのさらなる連携)

また、社会的孤立解消の課題は、高齢化、こどもの貧困、コミュニティ、健康寿命の延伸など、区政の様々な課題につながる課題である。このため、課題ごとに個別に施策を展開するのではなく、区の施策を総合的に融合させより効率的・効果的に施策展開していくことが重要である。(区内での施策の融合)

本レポートでは、個人情報に最大限配慮した上で、可能な限りヒアリング調査対象者の生の声を引用し、新宿区の単身者の生活実態を浮かび上がらせることを心がけた。今後、区の施策立案にあたり、区民の実情を踏まえる材料として本レポートを活用するとともに、ここにあげた3つの視点に基づき、より一層取り組みを進めることが望まれる。

図 29 単身者の類型と施策展開のイメージ



おわりに

最後に、家族社会学の無縁社会や生活困窮に関する多数の研究があり、当研究所のアドバイザーとして3年間、指導・助言をくださった宮本みち子放送大学副学長より、本調査研究について専門家の立場から総括していただくとともに、長きにわたり新宿区の研究に携わった感想をいただく。

単身者調査から見たこと

放送大学副学長・新宿自治創造研究所アドバイザー
宮本みち子

■壮年単身者を対象とする画期的な調査

3年間にわたる新宿区の単身世帯調査の特徴は、単身高齢者に限定せず、壮年期（30代後半から60代前半）の単身者の実態に着目した点にある。壮年前期（30代後半～40代後半）は晩婚化・非婚化に原因があり、壮年後期（50代前半～60代前半）は6割弱が未婚、3割弱が離婚、高齢期（65歳以上）は、男性においては未婚、女性においては死別がもっとも多い。壮年期全体として、単身者の数は男性が女性を大きく上回っている。

全国的にみて行政が実施してきた単身者調査の対象の多くは高齢者で、壮年期を含めたひとり暮らしの人々を対象に調査をした例は多くはない。今回の単身者調査は、単身（未婚や離婚）であることを例外として扱ったり問題視するのではなく、単身者の課題やニーズを把握し、それに応える環境整備を進めるための基礎資料を得るというスタンスをとってきた。単身世帯がマジョリティとなっている新宿区は、家族世帯こそ本来の姿（標準型）とする暗黙の前提を払拭し、単身者の正確な実態把握をもとにした行政施策を展開するための資料となることを期待している。

■単身者からの確かな手ごたえ

3年間の研究プロジェクトに寄せる思いを込めて、調査協力者を募るためのお願い文をつぎのように書いた。

新宿区では単身世帯が一般世帯の6割以上を占めており、今後も壮年期や高齢期を中心に増加していくことが見込まれます。こうした新宿区で一人暮らしをする方の生

活や意識の実態を把握するため、アンケート調査を実施いたします。調査結果を基に、新宿区の単身世帯の実態に関する分析を行い、これからの行政サービスや新たな施策を考えるための基礎資料として活かしてまいります。また、あわせてヒアリング調査（聞き取り調査）も行います。アンケート調査からでは知ることが難しい一人暮らしの方の具体的な日常生活、困りごと、人とのつながり、行政への要望などについて、生の声をお聞かせいただきたいと考えております。ぜひ、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

壮年期の単身者は日中の不在者が多く、しかもオートロックのマンションも多いなかで、アンケート調査で35.6%（891人）を回収できたことをよしとするべきであろう。

興味深いことは、アンケート調査の自由意見欄に、壮年期の163人、高齢期の98人が、「一人暮らしをして困っていることや将来不安に感じることに、必要だと思うサービスなど」を記入してくれたことであった。そこに単身者の実情が良く表れていた。

そのことを踏まえて企画したヒアリング調査では、予想を上回る35歳から90歳まで106の方が協力を申し出てくれた。これらの方々から、「行政が単身者に関心を示してくれたことがうれしかった」、「行政は何をしてくれるのかに興味があった」「新宿の単身者の実態を知りたかった」という声が聴かれたことは大きな収穫だった。先

にも書いた通り、これまで地方行政は高齢者以外については暗黙のうちに家族世帯を想定しており、壮年期单身者に関する問題意識は薄かったのではないと思われる。大都市の場合、かなり多くの壮年期の人々が非婚または離婚の結果单身化していることを正面から見据えるべきであり、新宿区がこの問題に着手した意味は大きい。

■单身化する新宿区の光と影

東京のような巨大都市はいつの時代にも单身者が多かったが、現在の新宿区のような单身化の時代はなかった。少子高齢化が進む地方から若年女性が大都市に大量に流出し、地方圏の少子高齢化と人口減少を進めている状況を極点社会という用語で表示するとすれば、流入する女性たち（もちろん男性たちも）を吸い込んでいる一大都市が新宿区だということができるだろう。ところが、新宿区に集積した若年女性の出生率は低下を続けている。大きな原因は非婚化にあり、壮年期男女の单身者の増加が止まらない状態にある。将来は結婚歴のない高齢单身者が急増することが予想される。

新宿区の单身者の実態から、单身化には光と影があることがわかる。光とは、伝統や社会的拘束から放たれて、個人中心の自由なライフスタイルを享受できる人々が多いことで、新宿にはその条件が揃っている。影とは、不安定な仕事と経済状態で、安心できる人間関係や帰属できる場をもたないまま暮らしている人々が少なくないことである。新宿区で住むにはお金がかかる。とくに住居費が極めて高くしかも狭小である。持ち家率は低い。そのため、单身者でなければ住めない・住みたくないという住宅事情が单身化を促進しているともいえる。このような住宅事情は、初老から高齢期の生活問題のひとつとなっている。賃貸住宅に住まう人々や住宅ローンを抱える单身者には、家賃や住宅ローンが払えなくなる不安を抱える例が少なくないのである。

このことを言い換えると、新宿区の单身化には選択的单身化と制約としての单身化の両面があると表現することもできる。安定した仕事と収入があり、豊かな社会関係に恵まれた人々の单身化と、不安定な仕事や経済的制約のために結婚をあきらめたり離婚した結果の单身化である。制約の結果

としての单身化は、希薄化した家族・親族関係と友人・知人関係をともないがちで、社会的孤立化と隣合わせである。本調査の分析によれば、社会的孤立に陥りやすいのは、壮年期においては、【男性】【地方出身】【年齢の高い壮年後期】【非正規雇用】【低所得】という条件のある人である。また高齢期においては、【男性】【貯蓄がない】【子どもがいない】という条件のある人である。また、経済的困窮者ほど社会的に孤立しがちである。

单身者の状況は、男性と女性で社会関係に違いがみられる。男性は親族との関係を維持することに関心が薄いため関係を失う傾向がある一方、女性は年齢に関係なく密接な関係を維持している。離婚をした場合、女性は子どもとの関係を維持するのに対して男性は疎遠になる傾向が強い。高齢期の女性は死別が多いため、子ども、きょうだい、近隣の人々との関係が豊かな傾向がある。一方男性は、死別より非婚单身と離婚が多く、女性のような社会関係をもたない傾向がある。

■单身化のリスク

单身化する新宿区の影あるいはリスクを軽視することはできない。これまで家族は人々の暮らしのセーフティ・ネットとして機能してきた。複数のメンバーで構成される家族・世帯の場合、住宅と家計の共用にはじまり、子どもの養育や看護や介護の必要なメンバーの世話を、何らかの役割分担によって遂行してきた。

このような体制が、家族内外の環境条件の変化に伴って変容を遂げてきたのは全国共通であるが、2000年代に入ると一気に单身者の増加を含む家族の多様化が進んだ。新宿区はそのような趨勢の先頭集団に属する。将来、男女を問わず非婚单身者がさらに増加すれば、現在以上に身寄りの少ない高齢者が増えることが予想される。しかも、社会的格差が拡大する状況下で低所得者が多くなることも予想される。

行政としては、壮年期の段階で、経済困窮に陥るリスクのある人々に対する就労支援その他の支援を強化するとともに、社会関係の希薄な人々を増加させない取り組みを進め、生活困窮に陥る人々の増加に歯止めをかける必要がある。2015年度に始まった生活困窮者自立支援制度をはじめとする諸施策は、このことを十分念頭に置く必要がある。

■何が必要か？

家族の変容に対応して、暮らしの器である住宅の多様化を進める必要もある。特に、標準世帯を前提にした持ち家政策では、住宅保障からこぼれる人々が増加する。民間賃貸住宅に住む単身者は、年齢とともに家賃を払えなくなることや、契約更新時に保証人がいないこと、単身高齢者の入居拒否を恐れている人が多い。公営住宅を希望する例は多いが、調査協力者のなかには20年にわたって毎年抽選に外れている例もあった。障がい者や認知症高齢者の共同生活の場であるグループホーム、高齢者などのコレクティブ・ハウスやグループリビング、シェアハウスなど、家族に代わる多様なすまい方が登場しているが、新宿においても住宅問題は大きなテーマといえるだろう。

若年層から高齢期まで、単身で暮らす人々が増加するなかで、従来家族のなかで調達できた対人ケアは、ますます得難いものになりつつあるが、失われた家族機能を商品として購入すること（家族機能の市場化）が解決の方向となれば、それについていける人々は限定され、ついていけない人々の問題が深刻になるだろう。

多くの先進工業国では、グローバル化のもとで企業が柔軟な労働力を強く求めていることに配慮しながら労働者の生活をどのようにして安定させるか、また、失業時の所得喪失を補いながら、いかにして失業者を労働市場に復帰させるかという、両立の難しい課題への模索が続いている。日本も例外ではない。多様化する家族を前提に、男性に対しては就労支援と同時に個人生活のマネジメント力の育成や社会関係を作るためのさまざまな取り組みが必要だろう。女性に対しては就労による経済的自立を推進するための教育、職業訓練と同時に、同一労働・同一賃金の原則に立って正規・非正規間の処遇格差を見直し、女性の賃金を引き上げる必要があるだろう。

新宿区の人口は移動性が激しいため、結婚に至る出会いの機会に恵まれない人々がいる。また、単身者が多いために結婚しようという動機づけが起こりにくいなどの環境が、壮年期の非婚化を加速化し、将来の単身高齢者を生み出しやすいことに留意する必要がある。単身者のニーズを汲み取る行政サービスの展開が必要であろう。

■新宿の利点を伸ばす

新宿には、都心区に特有な職業に従事する人々が多い。IT系・情報系・ベンチャー系企業に勤務する人々や、専門的技術を有するフリーランスや経営者の人々などである。これらの人々は仕事中心、長時間変則勤務、多様なネットワークをもつなどの特徴があり、高所得者から不安定所得者まで幅は広い。これらの人々を既存の地域社会に組み入れるという方向性だけではなく、その潜在能力を発揮しやすい仕組みや仕掛けを考えると、この方向性も今後は検討していく必要がある。

移動が激しいとはいえ常に一定の若年人口が居住しているという点で新宿区は特別である。若年人口の循環は新宿区の年齢構造の変化を比較的緩やかにしており、同時に多様性と独創性にあふれた活気あるまちづくりに繋がる要素でもある。このような新宿区に特有な好条件を有効に活かす施策が求められる。

本レポートが単身化する社会の実態とその課題を考えるための貴重な資料として活用されることを期待する。

既刊一覧

◎2008（平成20）年度 新宿自治創造研究所活動報告書	2009（平成21）年3月
◎2009（平成21）年度 新宿自治創造研究所活動報告書	2010（平成22）年3月
◎都市・自治にかかる情報と分析—データの読み方—	2010（平成22）年3月
◎研究所レポート2010 外国人WG報告（1）	2010（平成22）年12月
◎研究所レポート2010 人口WG報告（1）	2011（平成23）年2月
◎研究所レポート2010 集合住宅WG報告（1）	2011（平成23）年3月
◎研究所レポート2011 集合住宅WG報告（2）	2011（平成23）年11月
◎研究所レポート2011 外国人WG報告（2）	2011（平成23）年11月
◎研究所レポート2011 集合住宅WG報告（3）	2012（平成24）年1月
◎研究所レポート2011 外国人WG報告（3）	2012（平成24）年1月
◎研究所レポート2011 人口WG報告（2）	2012（平成24）年3月
◎研究所レポート2011 人口WG報告（3）	2012（平成24）年3月
◎研究所レポート2012 No.1 国勢調査データからみる新宿区の特徴	2013（平成25）年3月
◎研究所レポート2012 No.2 国勢調査に基づく新宿区将来人口推計 — 将来の住宅供給を考慮したコーホート・シェア延長法による —	2013（平成25）年3月
◎研究所レポート2013 No.1 国勢調査に基づく新宿区将来人口推計 — 地域別推計 —	2014（平成26）年1月
◎研究所レポート2013 No.2 国勢調査に基づく新宿区将来世帯推計	2014（平成26）年3月
◎研究所レポート2013 No.3 新宿区の単身世帯の特徴 — 壮年期を中心として —	2014（平成26）年3月
◎研究所レポート2014 No.1 新宿区の人口移動	2015（平成27）年3月
◎研究所レポート2014 No.2 新宿区の単身世帯の特徴（2） — 単身世帯意識調査結果から —	2015（平成27）年3月

研究体制

所 長	金安 岩男	（慶應義塾大学名誉教授）
副 所 長	村上 京子	（新宿自治創造研究所担当課長）
政策形成アドバイザー	牧瀬 稔	（一般財団法人地域開発研究所上席主任研究員）
テーマ別アドバイザー	宮本 みち子	（放送大学副学長）
”	大江 守之	（慶應義塾大学教授）
研 究 員	田中 雅美	
”	岸田 瞳	
非 常 勤 研 究 員	建井 順子	
”	中野 邦彦	

研究所レポート2015 No.1

新宿区の単身世帯の特徴（3） — 壮年期・高齢期の生活像 —

発行年月	2016（平成28）年3月
編集・発行	新宿区新宿自治創造研究所 （新宿区新宿自治創造研究所担当部新宿自治創造研究所担当課）
住 所	〒160-8484 東京都新宿区歌舞伎町一丁目4番1号（新宿区役所内）
電 話	03-5273-4252（直通）
F A X	03-5272-5500
E-Mail	jichisozo@city.shinjuku.lg.jp

新宿区新宿自治創造研究所

印刷物作成番号

2015-1-2201

再生紙を使用しています。



新宿区はグリーン電力証書システムに参加し、使用電力のうち年間100万kWhを、再生可能エネルギーから作られたグリーン電力でまかっています。